仙台市文化財調査報告書 第44集

宮城県仙台市

鴻巣遺跡

―発掘調査報告書―

1982.12

仙台市教育委員会

鴻ノ巣遺跡正誤表

項	誤	正
P．3　下1	観応2年（1321）	観応2年（1351）
P．4　上1	凝定地	擬定地
P．4　上2	嘉歴2年	嘉暦2年
P．5　上4	古墳時 の	古墳時代の
P.13上5～P.69上9	三面疵	三面庇
P．13　上13	掘立柱建立跡	掘立柱建物跡
P．13　下10	柱穴柱り方	柱穴掘り方
P．13　下4	ＳＤ－11井戸跡	ＳＤ－11溝跡
P．14　上3	ＳＥ－7	ＳＥ－11
P．14　上8	南北方面	南北方向
P．34　上12	ＳＤ－12溝跡に切られている	ＳＤ－12溝跡を切る
P．51　下7	第12トンチ	第12トレンチ
P．58　上9	小型手摯ね土器	小型手捏ね土器
P．58　上11	推積土	堆積土
P．61　下14	第47図13・14・15	第47図11・12・13
P．66　上7	摩　滅	磨　滅
P．68　下11	2・3の問題	二・三の問題
P．71　上8	桑原・滋部	桑原 滋郎

仙台市文化財調査報告書 第44集

宮城県仙台市

鴻巣遺跡

― 発掘調査報告書 ―

1982.12

仙台市教育委員会

序

この報告は、岩切地区の鴻ノ巣遺跡にかかる宅地造成に伴う、事前の発掘調査の成果をまとめたものであります。

岩切地区を貫流する七北田川は仙台の沃野を潤す三河川の一つで、古代・中世時代には河川交通路としても営まれていたとも伝えられています。とくにこの地区は、留守氏の居城として著名な岩切城（昭和57年８月史跡指定）を中心に、この流域には冠屋市や五日市等の市場が開かれ、黒川以北や多賀城・塩釜へ通ずる古街道とも会合し、水陸両交通の結接地点と云う地の理とも相まって、中世時代の政治・交通・商業の文化の中心的役割をはたしたところとして、歴史上重要な所とされてきたところであります。

近年、この地区にも市街化の影響が及び、土地区画整理事業や宅地造成、あるいは東北新幹線建設工事等々の開発事業の進展に伴い、埋蔵文化財包蔵地にかかる発掘調査の機会が増えつつあり、こうした中で古記にはない、先人の残した文化や歴史の解明が少しずつなされ、その土地に根ざした歴史的風土が明らかにされつつあります。

仙台市教育委員会では、こうした貴重な文化遺産を少しでも多く後世に継承すべく、その保護や啓蒙に努めております。しかし、これとても市民一人ひとりの御理解がなければ成し得ない事業であることは云うまでもありません。一片の土器、一握りの土が、その土地の歴史を語る貴重な資料であることを考えるとき、記録にとどめる発掘調査の重要性を市民と共に認識しなければならないと考えるのであります。

この遺跡の発掘調査に際し、たくさんの方々の御協力をいただき、ここに立派な報告書を刊行することが出来ましたこと、心から感謝を申し上げる次第であります。この報告が学兄諸氏をはじめ、多くの方々の研究活動に利用されること、また、永く後世に継承されるべき歴史的財産となることを念じて序とする次第であります。

昭和57年12月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本報告書は仙台市岩切字鴻ノ巣に所在する鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書である。

2．本文の執筆は下記の通り分担した。

本文執筆　　青沼一民……Ⅰ．Ⅱ．Ⅳ．Ⅴ．Ⅵ2～5．Ⅶ1、2．Ⅷ．

長島栄一……Ⅲ．Ⅵ1、6．Ⅶ1、2．Ⅷ．

遺構トレース……高橋薫子・真中信三

遺物実測……相沢尚子・池田真弓・菊地雅之・遠藤正昭・菊池豊・三浦和子

氏家弘子・青沼一民・長島栄一

遺物トレース……小林広美・神尾紀以子・渡辺紀雄・赤間郁子・神尾恵美子

遺物復元、拓影……菊地宣之・鈴木康弘・三浦和子・氏家弘子

遺物写真……長島栄一・小島真弓・鈴木康弘

図面整理……菊地雅之・菊地宣之・遠藤正昭・菊池豊・鈴木康弘

遺構写真……青沼一民・長島栄一

図表作成、台帳整理…相沢尚子・池田真弓・三浦和子・氏家弘子

編集は青沼一民、長島栄一が行なった。

3．本報告書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・佐原：1970）を使用した。

4．本調査においては、次の通りの遺構略号を使用した。

ＳＢ：掘立柱建物跡

ＳＤ：溝跡

ＳＥ：井戸跡

ＳＩ：竪穴住居跡

ＳＫ：土壙

ＳＸ：その他の遺構

5．本報告書の実測図中の方位は磁北で統一してある。

6．遺物の分類は下記の通りである。

A	縄文土器	I	自然遺物
B	弥生土器	J	陶磁器
C	土師器（非ロクロ）	K	石製品
D	土師器（ロクロ）	L	木製品
E	須恵器	N	鉄製品
F	丸瓦	P	土製品
G	平瓦		

本　文　目　次

序　文
例　言
Ⅰ．調査に経る経過……1
Ⅱ．調査要項……1
Ⅲ．遺跡の位置と環境……2
Ⅳ．調査の方法と概要……5
Ⅴ．基本層位……7
Ⅵ．発見遺構と出土遺物……9
1．竪穴住居跡……9
2．掘立柱建物跡……12
3．溝跡……14
4．井戸跡……25
5．土壙……33
6．その他……37
(1)　SX－1 性格不明遺構……37
(2)　周溝墓（SK－6 土壙、SD－15溝跡）……41
Ⅶ．遺構・遺物の検討……47
1．遺　構……47
(1)　竪穴住居跡……47
(2)　掘立柱建物跡……47
(3)　溝跡……48
(4)　井戸跡……49
(5)　土壙……50
(6)　SX－1 性格不明遺構……50
(7)　周溝墓（SK－6、土壙、SD－15溝跡）……51
2．遺　物……53
(1)　縄文土器……53
(2)　土師器……54
(3)　須恵器……60
(4)　赤焼土器……61
(5)　瓦……63
(6)　自然遺物……63
(7)　陶磁器……63
(8)　石製品……65
(9)　木製品……66
(10)　鉄製品……66
(11)　土製品……66
(12)　動物遺存体……66
Ⅷ　ま　と　め……68

挿入図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第２図　調査区設定図……5
第３図　調査区位置図……6
第４図　基本層位模式図……7
第５図　Ⅱ区東・北壁断面図……8
第６図　Ⅰ区東・南壁断面図……9
第７図　調査Ⅰ区遺構配置図……10
第８図　調査Ⅱ区遺構配置図……11
第９図　ＳＢ１～３掘立柱建物跡平面図…12
第10図　ＳＢ4・5掘立柱建物跡平面図……14
第11図　ＳＤ－１出土遺物実測図(1)……15
第12図　ＳＤ－１出土遺物実測図(2)……16
第13図　ＳＤ－１出土遺物実測図(3)……17
第14図　ＳＤ溝跡断面図(1)……18
第15図　ＳＤ溝跡断面図(2)……19
第16図　ＳＤ－21溝跡遺物出土状況平面図…22
第17図　ＳＤ－21溝跡出土遺物実測図(1)…23
第18図　ＳＤ－21溝跡出土遺物実測図(2)…24
第19図　ＳＥ－1～3井戸跡平面図断面図…26
第20図　ＳＥ－4～7井戸跡平面図断面図…27
第21図　ＳＥ－8～10井戸跡平面図断面図…28
第22図　ＳＥ－11～12井戸跡平面図断面図…29
第23図　ＳＥ井戸跡出土遺物実測図(1)……30
第24図　ＳＥ井戸跡出土遺物実測図(2)……31
第25図　ＳＥ井戸跡出土木製品……32
第26図　ＳＫ－２遺物出土状況平面図……33
第27図　ＳＫ－７遺物出土状況平面図……33
第28図　ＳＫ－６出土遺物実測図……34
第29図　ＳＫ土壙実測図……35
第30図　ＳＫ－７出土遺物実測図……36
第31図　ＳＸ－１遺物出土状況平面図……37
第32図　ＳＸ－１出土遺物実測図(1)……38
第33図　ＳＸ－１出土遺物実測図(2)……39
第34図　ＳＸ－１出土遺物実測図(3)……40
第35図　ＳＸ－１出土遺物実測図(4)……41
第36図　ＳＫ－６　ＳＤ－15平面図……41
第37図　遺構検出面出土遺物実測図……42
第38図　その他各遺構出土遺物実測図(1)…43
第39図　その他各遺構出土遺物実測図(2)…44
第40図　その他各遺構出土遺物実測図(3)…45
第41図　耕作土中出土遺物実測図(1)……45
第42図　耕作土中出土遺物実測図(2)……46
第43図　土師器坏実測図……55
第44図　土師器壺実測図……56
第45図　土師器甕実測図……57
第46図　坏口径と底径の比・坏口径と器高の比……58
第47図　赤焼土器実測図……62
第48図　研磨痕のある須恵器片・陶磁片実測図……64

表　目　次

第１表　掘立柱建物跡一覧表……47
第２表　溝跡一覧表……49
第３表　井戸跡一覧表……50
第４表　ＳＸ－１出土土師器破片集計表…51

第５表　宮城県内発見方形周溝墓・円形周溝一覧表(昭和57年10月現在)……52
第６表　ＳＤ－１溝跡出土遺物破片集計表……67

図　版　目　次

図版１　Ⅰ区全景……73
図版２　Ⅱ区全景……74
図版３　ＳＥ－１井戸跡検出状況……75
図版４　ＳＥ－１井戸跡……75
図版５　ＳＥ－１井戸跡断面……75
図版６　ＳＥ－２井戸跡……76
図版７　ＳＥ－２井戸跡断面……76
図版８　ＳＥ－３井戸跡……77
図版９　ＳＥ－４井戸跡……77
図版10　ＳＥ－５井戸跡……77
図版11　ＳＥ－６井戸跡……78
図版12　ＳＥ－６井戸跡遺物出土状況……78
図版13　ＳＥ－６井戸跡断面……78
図版14　ＳＥ－９井戸跡……79
図版15　ＳＥ－９井戸跡断面……79
図版16　ＳＥ－11井戸跡……80
図版17　ＳＥ－11井戸跡断面……80
図版18　ＳＥ－12井戸跡……81
図版19　ＳＥ－12井戸跡断面……81
図版20　ＳＤ－１溝跡……82
図版21　ＳＤ－１溝跡遺物出土状況……82
図版22　ＳＤ－１溝跡断面……82
図版23　ＳＤ－20溝跡断面……83
図版24　ＳＤ－21溝跡遺物出土状況……83
図版25　ＳＫ－13土壙……83
図版26　ＳＫ－２土壙遺物出土状況……84
図版27　ＳＫ－16土壙遺物出土状況……84
図版28　Ｐ－12遺物出土状況……84
図版29　ＳＩ－１住居跡……85
図版30　ＳＫ－6、ＳＤ－15周溝墓……85
図版31　ＳＫ－６土壙遺物出土状況……85
図版32　SX-1性格不明遺構遺物出土状況…86
図版33　SX-1　〃　…86
図版34　SX-3　〃　…87
図版35　現地見学会風景……87
図版36　調査参加者……87
図版37　出土遺物土師器・赤焼土器……88
図版38　出土遺物赤焼土器……89
図版39　出土遺物土師器……90
図版40　出土遺物土師器……91
図版41　出土遺物土師器・土製品・縄文土器‥92
図版42　出土遺物中世陶品・青磁、青白磁…93
図版43　出土遺物石製品・鉄製品……94
図版44　出土遺物木製品……96

Ⅰ．調査に至る経過

鴻ノ巣遺跡（仙台市文化財登録番号C－135）は、仙台市岩切字鴻ノ巣にあり、七北田川右岸の自然堤防上に位置する遺跡である。

鴻ノ巣遺跡は過去に昭和48年、昭和55年と二度調査が行なわれた。昭和48年の宮城県教育委員会による東北新幹線工事に伴う事前調査では、５世紀頃の竪穴住居跡２軒、中世の井戸跡等が発見され、多くの遺物が出土した。また昭和55年、仙台市教育委員会による調査でも、平安時代から中世に至る溝跡、井戸跡、掘立柱建物跡が発見された。

仙台市近郊の宅地化は同遺跡にも及び、昭和56年５月岩切字鴻ノ巣168－１外において宅地造成に伴う発掘届が提出された為、仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係では、この開発地が遺跡の範囲内に位置していることから、開発者城不動産商事と協議の上、開発予定地の記録保存を目的とした発掘調査を昭和57年４月12日から同年６月31日の間で実施した。

Ⅱ．調　査　要　項

遺跡の名称　鴻ノ巣遺跡（仙台市文化財登録番号　C－135）

遺跡所在地　仙台市岩切字鴻ノ巣168－１外

調査面積　993㎡　　対象面積　2530㎡

調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査協力　㈲城不動産商事

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

課長　永野昌一

主幹兼文化財調査係長　早坂春一

文化財調査係　教諭　青沼一民　主事　長島栄一

発掘調査・整理及び報告書作成に際しては、下記の方々諸機関から適切な教示・協力をいただいた。記して感謝したい。名古屋大学教授　楢崎彰一氏、東北歴史資料館　藤沼邦彦氏、多賀城跡研究所　白鳥良一氏、東北大学医学部第一解剖学教室　山田格氏、仙台市科学館　佐々木隆氏、宮城県教育庁文化財保護課　小井川和夫氏、加藤道男氏、手塚均氏、森貢喜氏、多賀城市教育委員会　高倉敏明氏、岩切中区町内会々長　相沢林三郎

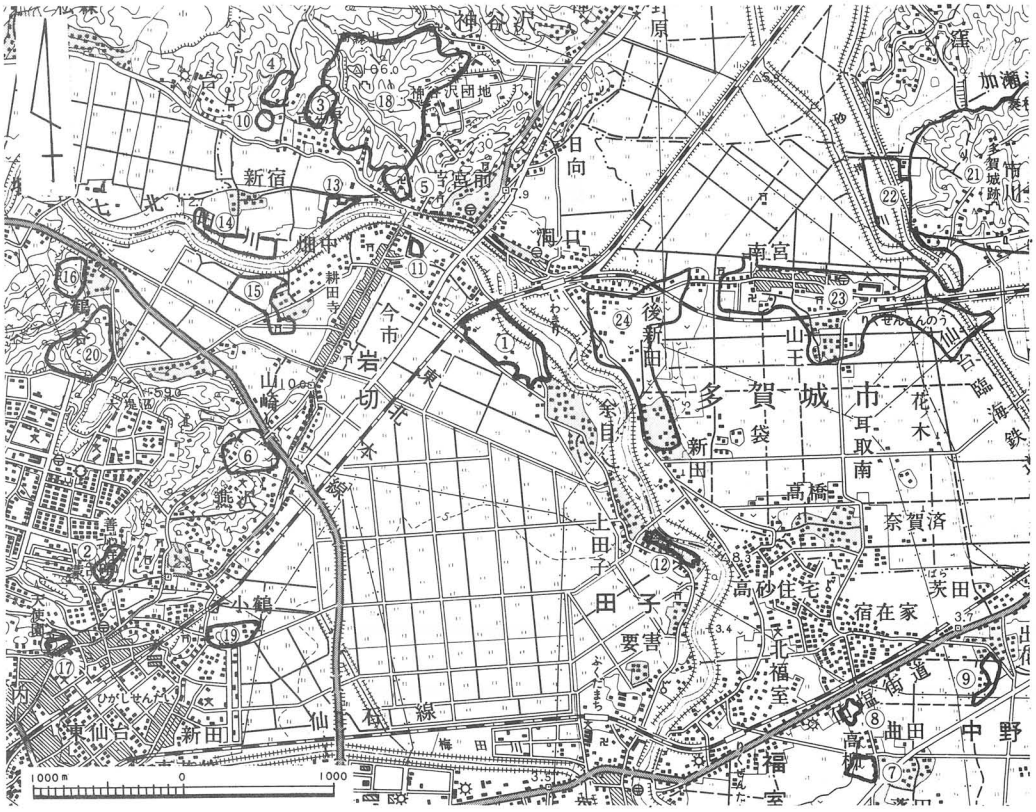
調査参加者

相沢尚子、菊地雅之、菊地宣之、遠藤正昭、菊池豊、鈴木康弘、池田真弓、荘司真理、守浩子、高橋薫子、三浦和子、氏家弘子、小林広美、神尾恵美子、神尾紀以子、赤間郁子、渡辺紀雄、小島真弓、真中信三、(以上整理も含む)、相沢林三郎、石森留吉、大泉林造、小野寺庄三郎、佐藤徳右ェ門、斎藤惣一、斎藤敏雄、但木はな子、但木吉蔵、畑中虎勝、永野正、横田要七、永野のぶ子

Ⅲ．遺跡の位置と環境

位置と地形環境

位置：鴻ノ巣遺跡は、仙台駅の北東約７kmの仙台市岩切字鴻ノ巣に位置する。本遺跡は、石巻街道を塩釜方向に進み、岩切の今市から高砂方面に向かって七北田川沿いに行くと、東北本線を越えたあたりから余目に至る七北田川右岸に広がっている。岩切駅から南南西約 0.5 km、多賀城政庁地区より西南西 3.5 kmの地点である。遺跡の範囲は、東西約600m、南北約300 m の約18万㎡に及んでいる。



1．鴻ノ巣遺跡（C－135）
2．善応寺横穴群（C－027）
3．台屋敷横穴群（C－029）
4．入生沢横穴群（C－030）
5．東光寺横穴群（C－032）
　東光寺城跡（C－508）
　東光寺古碑・磨崖仏（C－602）
6．燕沢遺跡（C－101）
7．高柳Ａ遺跡（C－173）
8．高柳Ｂ遺跡（C－174）
9．出花遺跡（C－176）
10．入生沢遺跡（C－184）
11．今市遺跡（C－200）
12．堰下遺跡（C－218）
13．新宿囲遺跡（C－219）
14．大正囲遺跡（C－220）
15．岩切畑中遺跡（C－221）
16．北畑遺跡（C－237）
17．大蓮寺窯跡（C－415）
18．高森城跡（C－502）
19．小鶴城跡（C－509）
20．笹森城跡（C－512）
21．多賀城跡
22．市川橋遺跡
23．山王遺跡
24．新田遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

地形環境：鴻ノ巣遺跡の位置する七北田川流域の地形を概観すると、七北田川流域には４段の段丘面が発達し、Ⅰ面は現河床との比高30m、Ⅱ面は13～18m、Ⅲ面は８～10m、Ⅳ面は１～６ｍの比高を有し、Ⅳ面は下流において沖積面下に没する。泉ヶ岳に源を発する七北田川は、これらの段丘面の間を蛇行し、土砂の堆積と氾濫を繰り返し両岸に自然堤防を発達させている。自然堤防の発達は、国道４号線沿いの七北田方面より下流域が顕著である。（註１）

鴻ノ巣遺跡は沖積面の自然堤防上に立地し、標高は８～９ｍ、七北田川との比高は３ｍ前後である。また、南側の水田面より１～２ｍ程高くなっている。自然堤防上は、これまで畑地として利用されてきたが、近年宅地化が著しい。

歴史的環境

鴻ノ巣遺跡周辺の遺跡をみると、古墳時代以前の遺跡は現在のところ確認されておらず、不明な点が多い。よって、ここでは古墳時代以降の遺跡、遺物について概観する。

古墳時代：高塚を有する古墳は、燕沢遺跡と同一丘陵上に千人塚古墳が一基のみ確認されている。千人塚古墳は、すでに墳丘の形も崩れており、詳細は不明である。また、高塚古墳のあった可能性は、本遺跡対岸の新田遺跡で指摘されている。さらに、岩切小学校所蔵の円筒埴輪は、同校庭より出土したと言われ、観察によれば体部に三本の凸帯が貼付けられ、底部から二段目と三段目に互いに直交する円孔が二対穿れていたと考えられる。周辺に古墳のあった可能性を示すものと思われる。

集落としては、本遺跡対岸の自然堤防上に新田遺跡があり、古墳時代中期（南小泉式期）の遺物を出土している。また、岩切畑中遺跡からは、古墳時代後期（栗囲式期）の住居跡２軒が検出されている。

古墳時代終末～奈良時代：西方の丘陵地帯に横穴古墳群が形成され始める。善応寺横穴古墳群は、推定で100基をこえると言われ、これまでそのうちの23基が調査されている。古墳からは直刀、刀子、金環、勾玉等が出土し、７世紀から８世紀頃までの古墳群と考えられている。また、入生沢、台屋敷古墳群は総数70基ほどで、中には蒲鉾形や家形の玄室が残っているものもある。この時代には、本遺跡の東北約３kmに多賀城が造営され、東北の一中心地として陸奥国の国府、鎮守府等がおかれたのである。

平安時代：西方丘陵上の燕沢遺跡には、官衙風建物が建っていたと考えられ、周辺から歯車文軒丸瓦等が採集されている。本遺跡でも平安時代以降中世に至るまで、数多くの遺物を出土し、集落としての発達を窺うことができる。

中世以降：源頼朝の平泉征伐の後、陸奥国留守職に任命された伊沢家景以来の留守氏の居城と言われる岩切城が、高森山の頂上部に構築された。岩切城が記録に出るのは、観応の擾乱―観応２年（1321年）―の時で、岩切城の他に余目城という名も現れる。この他にも以前より稲

荷館の凝定地とされていた(註２)、稲荷神社のある岩切畑中遺跡では中世の大溝、掘立柱建物跡等が検出され、館の存在が考えられる。また、東光寺境内には嘉歴２年銘(1327年)の板碑、鎌倉時代の作と推定される磨崖仏等が残っている。留守家文書には、鎌倉時代後半に冠屋市場・河原宿五日市場・在家などの記載が見られ、七北田川（冠川）沿いに商業活動が営まれていたことが指摘されている。このように岩切を中心とする附近一帯は中世における仙台平野の政治・経済・文化の一中心地として発達を遂げたのである。

以上のように鴻ノ巣遺跡の周辺は、古墳時代より人々の生活の跡を知ることができる。中でも、中世に至っては留守氏との関係で著しい発展を遂げ、郷土史の中でも極めて重要な地域であると言えよう。

鴻ノ巣遺跡の考古学的調査：これまで鴻ノ巣遺跡で行なわれた発掘調査の概要を述べておく。

○昭和48年、宮城県教育委員会による東北新幹線工事に伴う事前調査。

調査地点：東北新幹線路線敷地内

七北田川南岸からＣ区、Ａ区、Ｂ区の３調査区を設定し、路線敷地内約2700㎡のうち約1100㎡について発掘調査を実施している。Ｃ区からは古墳時代中期（南小泉式期）の住居跡２軒、焼土遺構１基、土壙１基等が検出され、Ａ区からは焼土遺構が２基、Ｂ区からは井戸跡１基、土壙５基、溝跡９条等が検出されている。遺物は、ほとんどが遺物包含層からで、土師器、須恵器、中世陶器、石製模造品、砥石、石器、土製品、鉄製品、古銭等が出土している。(註３)

○昭和55年、仙台市教育委員会による宅地造成に伴う事前調査

調査地点：岩切字鴻ノ巣80外

開発予定地内の約 540㎡について発掘調査を実施し、調査の結果、井戸跡11基、土壙19基、焼土遺構１基、溝跡10条、掘立柱建物跡13棟等が検出されている。遺物は、土師器、須恵器、中世陶器、青磁、瓦、小刀、古銭、石臼、木桶等が出土している。遺構、遺物とも平安時代から中世にかけてのものであり、古墳時代にまで遡るものは検出されていない。(註４)

○昭和56年、仙台市教育委員会による住宅新築に伴う試掘調査

調査地点：（Ⅰ）岩切字鴻ノ巣96－１

（Ⅱ）岩切字鴻ノ巣71－１

鴻ノ巣遺跡内の二ヶ所において住宅新築が行なわれることにより、各々トレンチを設定し、試掘調査を実施している。

（Ⅰ）地点では溝跡１条のみ検出され、基本層位は第１層暗褐色粘土あるいは粘土質シルト(旧耕作土)、第２層黒褐色あるいは褐灰色粘土、第３層にぶい黄橙色砂（地山）である。旧表土から第３層上面までは 120㎝程である。

（Ⅱ）地点では溝跡２条のみ検出され、基本層位は第１層にぶい黄褐色シルトあるいは粘土

質シルト(旧耕作土)、第２層褐灰色粘土質シルト、第３層黒褐色あるいは褐灰色粘土、第４層浅黄色粘土（地山）である。旧耕作土から第４層上面まで 100 ～ 120 ㎝程である。

これらのことから、鴻ノ巣遺跡内において遺構の分布する密度に違いはあるものの、遺構は遺跡全体に拡がっていると考えられる。しかし、古墳時の遺構、遺物、遺物包含層の分布については、遺跡の中で限られているようである。

Ⅳ　調査の方法と概要

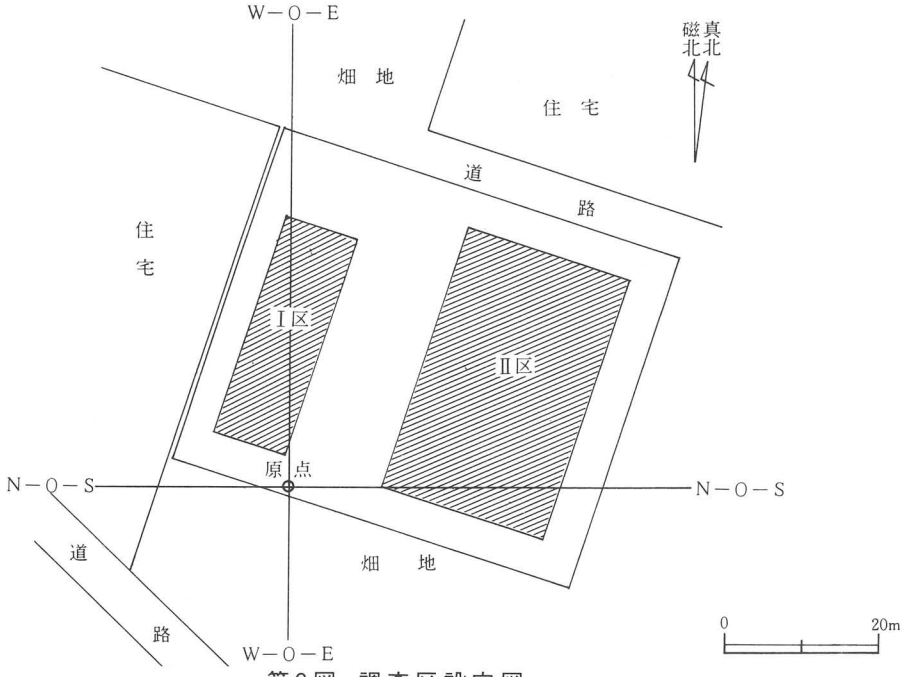
４月５日に基本層位の観察の為、試掘調査を行ない、その結果、耕作土から深さ60㎝程で地山面を検出した。本調査は４月12日より実施し、対象面積2530㎡のうち排土等を考慮して調査区（Ⅰ区南北28m ×東西10m 、Ⅱ区南北35m ×東西20m ）総面積 993 ㎡を設定した。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層まで重機で排土し、遺構の検出を行なった。

○測量の基準原点は、Ⅰ区調査区真北方向に３ｍの地点とした。測量基準線は、原点より磁北に合わせて設定し、北側のラインＮ―、南側のラインＳ―、東側のラインＥ―、西側のラインＷ―とし、基本単位とする距離数で表示した。

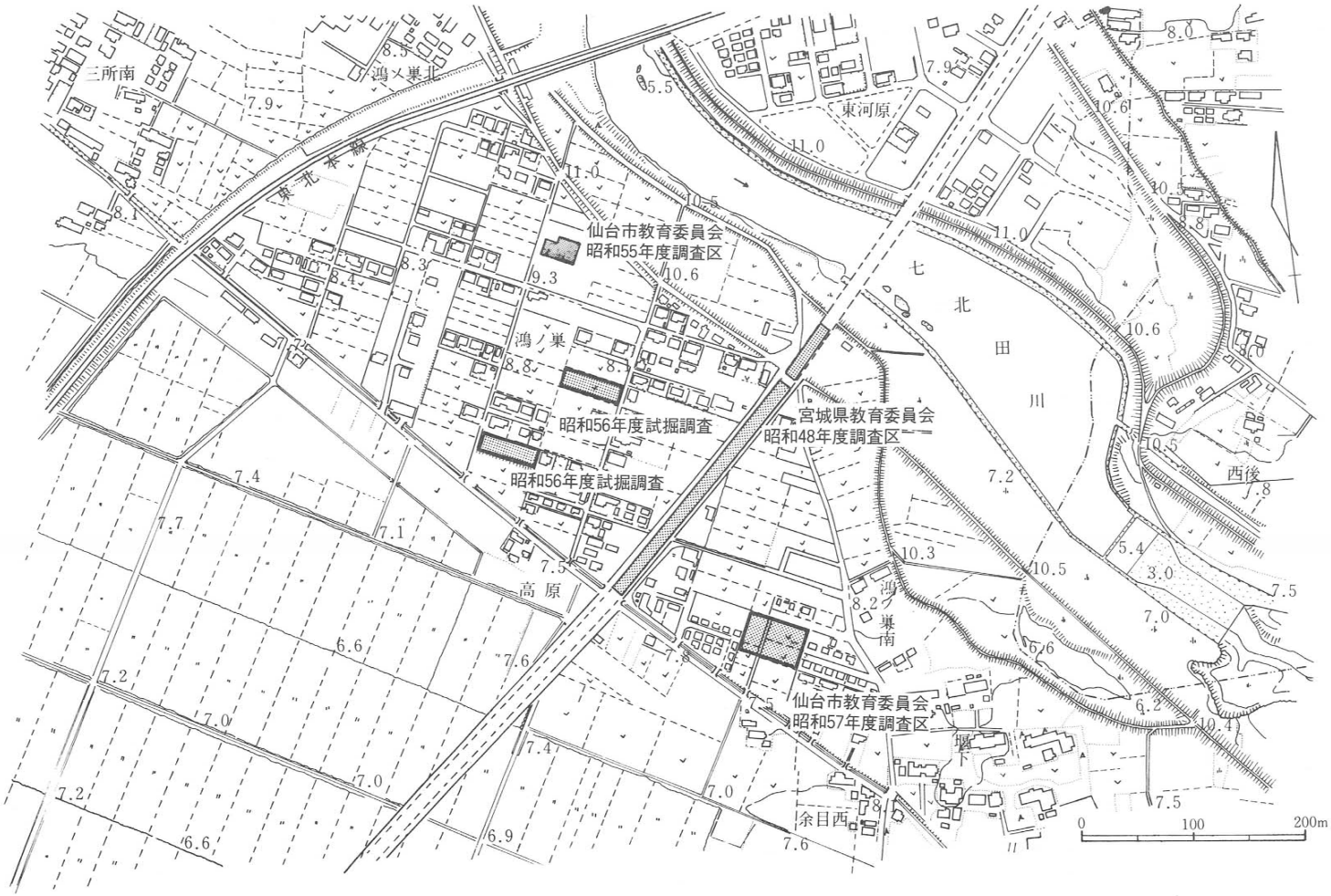
○標高は仙台市道路部設置のＡ―No. 267 原点7.357m から用い、水系の標高はⅠ、Ⅱ区とも7.500 m に統一した。

○平面図、断面図は$\frac{1}{20}$に統一し、特に遺物の出土量の多い遺構、及び実測の必要と考えられる遺構に関しては$\frac{1}{10}$に作成した。

○整理作業の結果、SK―１、４、９、10土壙、SD―９溝跡は消滅する。

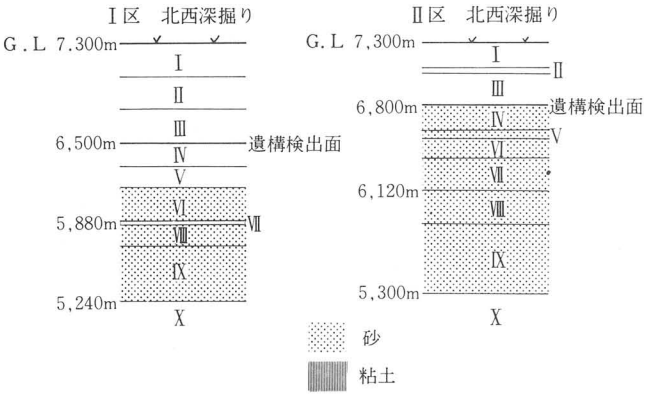


第２図　調査区設定図


三所南
鴻ノ巣北
東北本線
東河原
仙台市教育委員会
昭和55年度調査区
鴻ノ巣
昭和56年度試掘調査
昭和56年度試掘調査
宮城県教育委員会
昭和48年度調査区
七北田川
西後
高原
鴻ノ巣南
仙台市教育委員会
昭和57年度調査区
堰下
余目西
0
100
200m

第3図　調査区位置図

Ⅴ 基 本 層 位



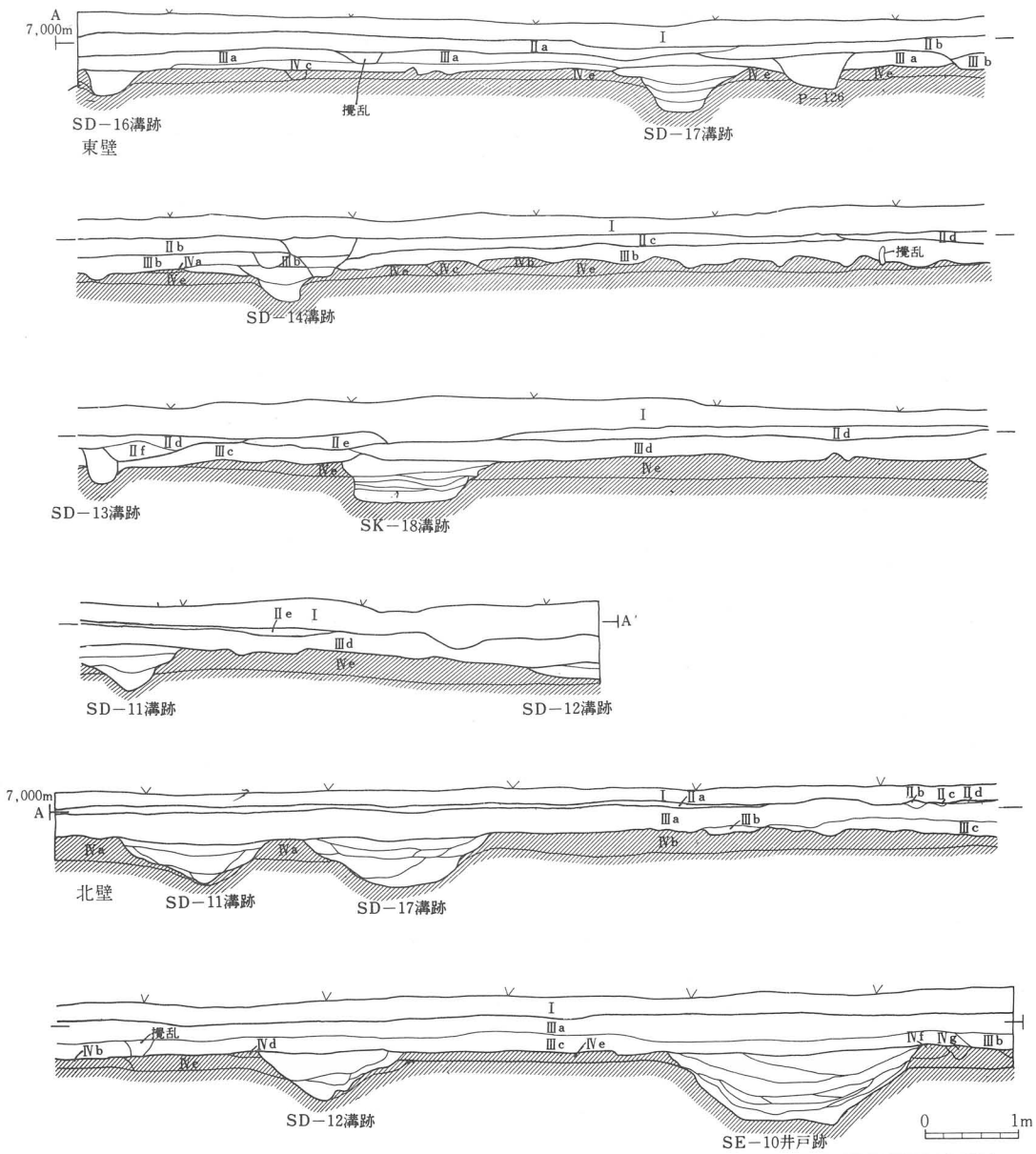
	層No	土　色	土 性	その他（Ⅰ区北面深掘り）
	Ⅳ	10YR6/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
旧河川堆積土	Ⅴ	2.5Y5/4 黄褐色	シルト（砂）	
	Ⅵ	10YR4/6 褐　色	砂	
	Ⅶ	2.5Y6/3 にぶい黄色	粘　土	
	Ⅷ	2.5Y5/3 黄褐色	砂	
	Ⅸ	2.5Y5/4 黄褐色	砂	倒木片、多量に含む
	Ⅹ	2.5Y6/3 にぶい黄色	シルト質粘土	

	層No	土　色	土 性	その他（Ⅱ区）
	Ⅳ	Ⅰ区と同じ		
	Ⅴ	2.5Y6/4 にぶい黄色	粘土質シルト	
旧河川堆積土	Ⅵ	10YR4/6 褐　色	砂	
	Ⅶ	10YR5/2 灰黄褐色	砂	
	Ⅷ	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂	倒木、流木片 含む
	Ⅸ	2.5Y5/2 灰白色	砂	

第4図　基本層位模式図

表土から遺構確認面までは、Ⅰ区で60～70cm程、Ⅱ区で50～60cm程ある。調査区の基本層位は4層に分けられる。Ⅰ・Ⅱ層は耕作土で厚さ40cm前後、暗褐色シルト及び砂質シルトである。少量の遺物を含む。Ⅲ層は旧耕作土で厚さ30cm前後、黒褐色粘土質シルトである。少量の土器片を含む。Ⅳ層は浅黄色シルトの地山面で、表土から50～70cm下で検出した。

Ⅳ層より下層においては、遺構、遺物等は発見されなかった。



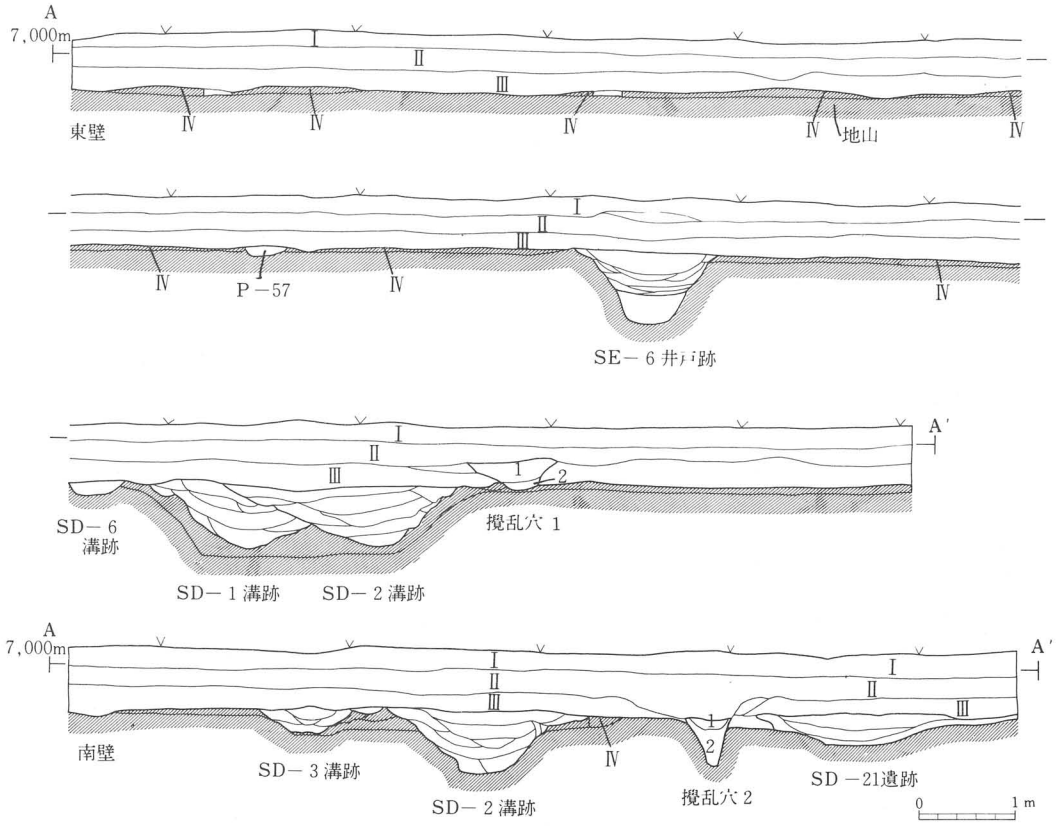
東壁断面図

層No	土色	土性	備考
Ⅰ	10YR5／4 にぶい黄褐色	シルト	
Ⅱa	10YR3／3 暗褐色	シルト	炭化物少量含む
Ⅱb	10YR4／4 褐色	砂質シルト	粒の荒い砂，多量に含む
Ⅱc	10YR5／4 にぶい黄褐色	砂質シルト	砂・植物根少量含む
Ⅱd	10YR5／3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
Ⅱe	10YR4／4 褐色	砂質シルト	粒の荒い砂，少量含む
Ⅱf	10YR4／3 にぶい黄褐色	砂質シルト	
Ⅲa	10YR3／3 暗褐色	砂質シルト	
Ⅲb	10YR2／3 黒褐色	シルト	
Ⅲc	10YR3／2 黒褐色	砂質シルト	砂多量，小石少量含む
Ⅲd	10YR2／3 黒褐色	シルト質砂	大粒の砂多量，小石・土器片含む
Ⅲe	10YR3／3 暗褐色	シルト	酸化鉄少量含む
Ⅲf	10YR3／4 暗褐色	シルト	酸化鉄多量に含む
Ⅳa	10YR5／4 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄少量含む
Ⅳb	10YR4／4 褐色	シルト	
Ⅳc	10YR4／2 灰黄褐色	砂質シルト	
Ⅳd	10YR4／3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
Ⅳe	2.5Y 7／4 浅黄色	シルト	

北壁断面図

層No	土色	土性	備考
Ⅰ	10YR5／4 にぶい黄褐色	シルト	
Ⅱa	10YR4／4 褐色	シルト	
Ⅱb	10YR4／4 褐色	シルト	
Ⅱc	10YR4／4 褐色	シルト	
Ⅱd	10YR4／4 褐色	シルト	
Ⅲa	10YR3／3 暗褐色	シルト	土師器片を含む
Ⅲb	10YR3／3 暗褐色	砂質シルト	10YR4／4褐色，砂をブロック状に含む
Ⅲc	10YR2／3 黒褐色	シルト	10YR4／4褐色，砂・酸化鉄微量含む
Ⅳa	10YR5／4 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄斑状に含む
Ⅳb	10YR5／6 黄褐色	砂	酸化鉄を含む
Ⅳc	10YR3／1 黒褐色	砂質シルト	10YR7／3にぶい黄橙色，砂質シルトをブロック状，酸化鉄少量含む
Ⅳd	10YR4／2 灰黄褐色	シルト	10YR7／3にぶい黄橙色，砂質シルトをブロック状，炭化物微量含む
Ⅳe	10YR8／3 浅黄橙色	シルト	10YR3／1黒褐色，シルトをブロック状，酸化鉄ブロック状に含む
Ⅳf	10YR2／2 黒褐色	シルト	10YRにぶい黄橙色，シルトをブロック状，酸化鉄微量に含む
Ⅳg	10YR3／1 黒褐色	シルト	10YR6／6明黄褐色，シルトをブロック状，酸化鉄，炭化物を少量含

第5図　Ⅱ区東・北壁断面図



東・南壁断面図

層No	土色	土性	備考
Ⅰ	10YR3／3　暗褐色	シルト	砂と微細な土器片含む（耕作土）
Ⅱ	10YR3／4　暗褐色	砂質シルト	砂と少量の酸化鉄，微細な土器片含む
Ⅲ	10YR2／2　黒褐色	粘土質シルト	土器片多量に含む
Ⅳ	2.5Y7／4　浅黄色	シルト	酸化鉄多量に含む

撹乱穴1

層No	土色	土性	備考
	10YR3／3　暗褐色	粘土質シルト	
	10YR2／2　黒褐色	シルト質粘土	

撹乱穴2

層No	土色	土性	備考
1	10YR4／4　褐色	粘土質シルト	多量の酸化鉄含む
Ⅱ	7.5YR4／3褐色	シルト質粘土	多量の酸化鉄含む

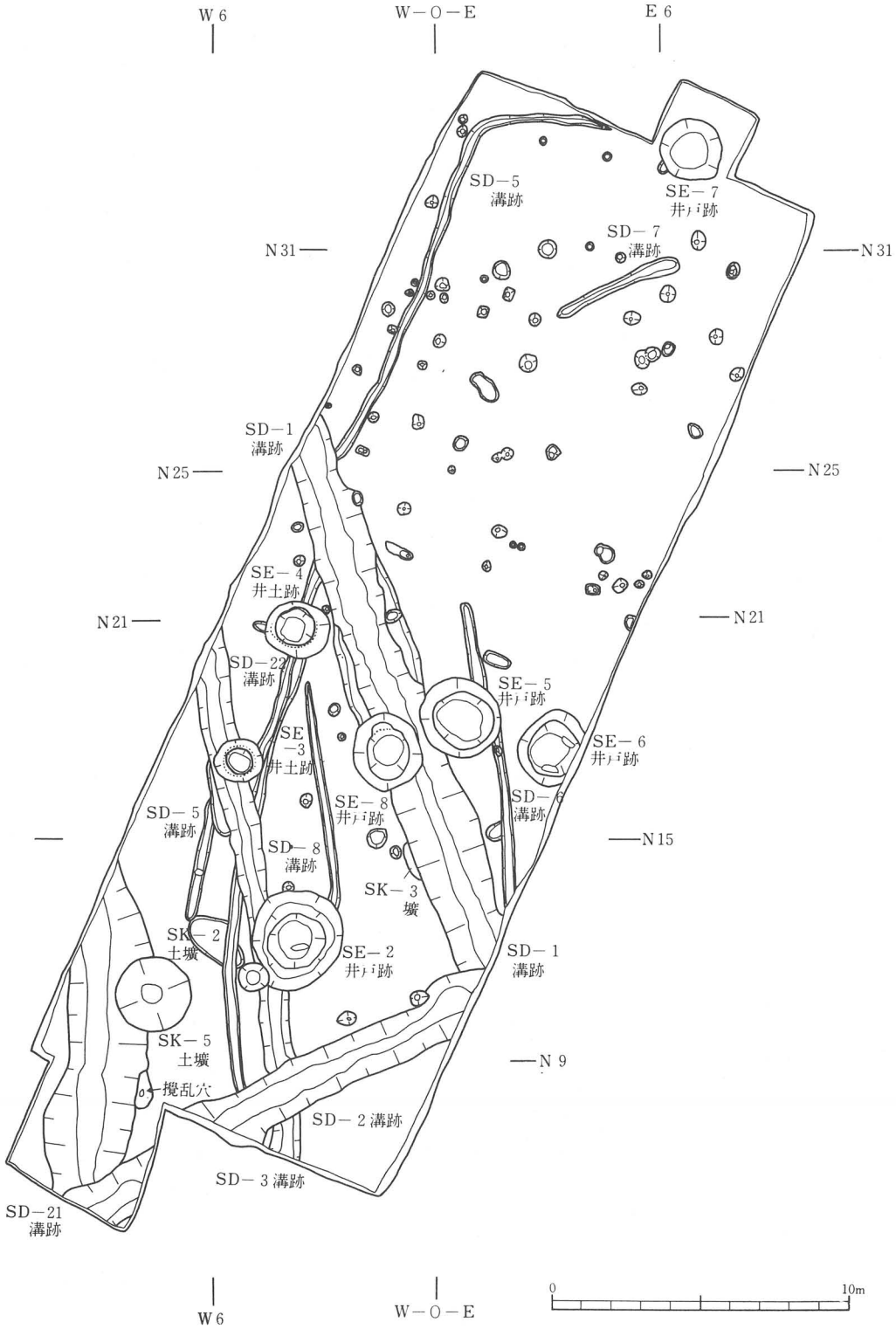
第6図　Ⅰ区東・南壁断面図

Ⅵ　発見遺構と出土遺物

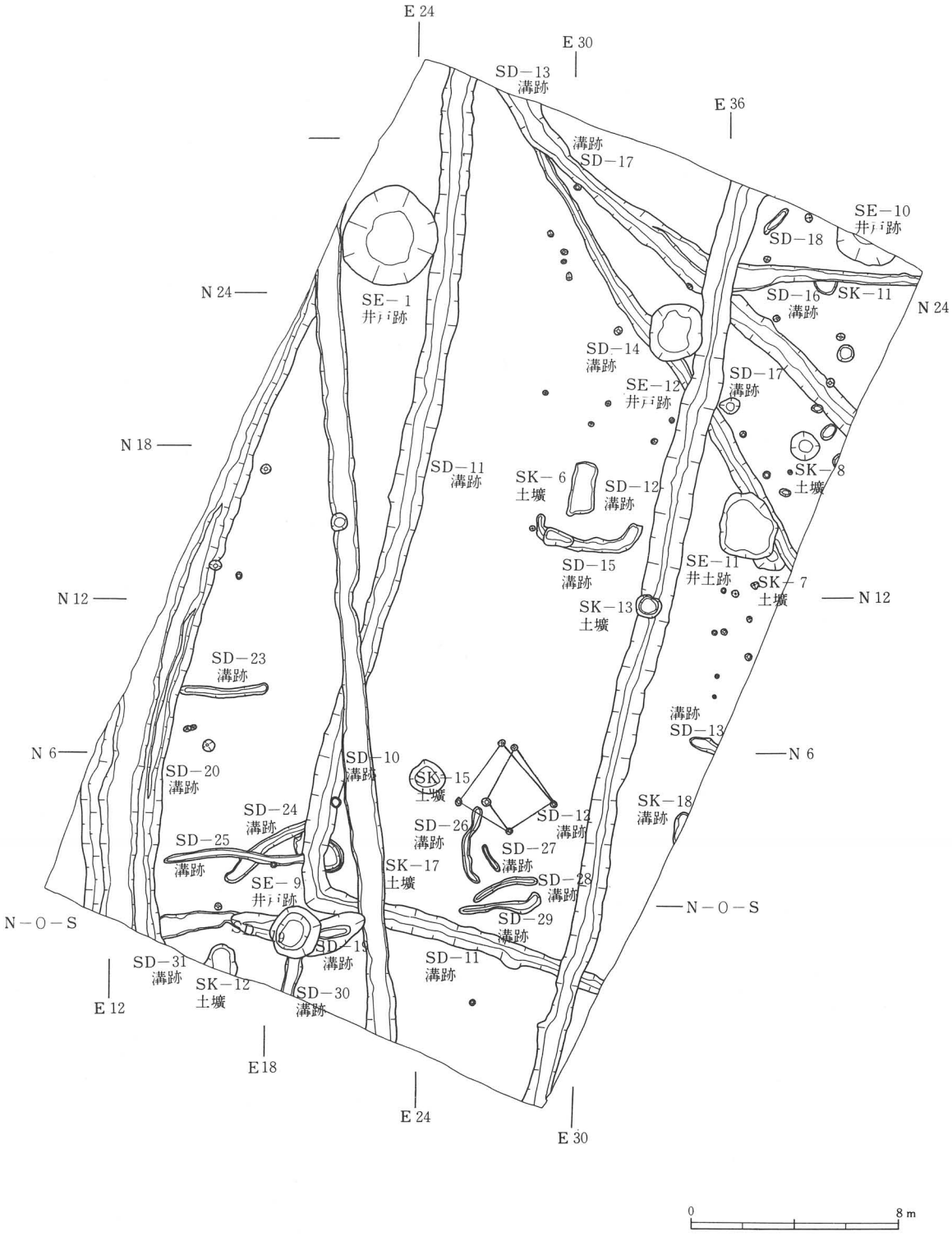
今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4軒、掘立柱列1棟、井戸跡12基、溝跡31条、土壙14基、性格不明遺構2等である。これらの各遺構、遺物について記述する。

1．竪穴住居跡

SI－1竪穴住居跡　SX－1堆積土を除去したのち地山上面を精査した結果、ピットを6ヶ検出した。壁、床面等は削平されていたが、検出されたピットの配列関係から主柱穴としてピット1、2、3、4とピット1、2、3、5が考えられた。柱穴間の距離はピット1－ピット2が220cm、ピット2－ピット3が200cm、ピット3－ピット4が270cm、ピット4－ピット1が300cm、ピット3－ピット5が310cm、ピット5－ピット1が280cmを計り、いずれも柱穴の配置は台形を呈す。



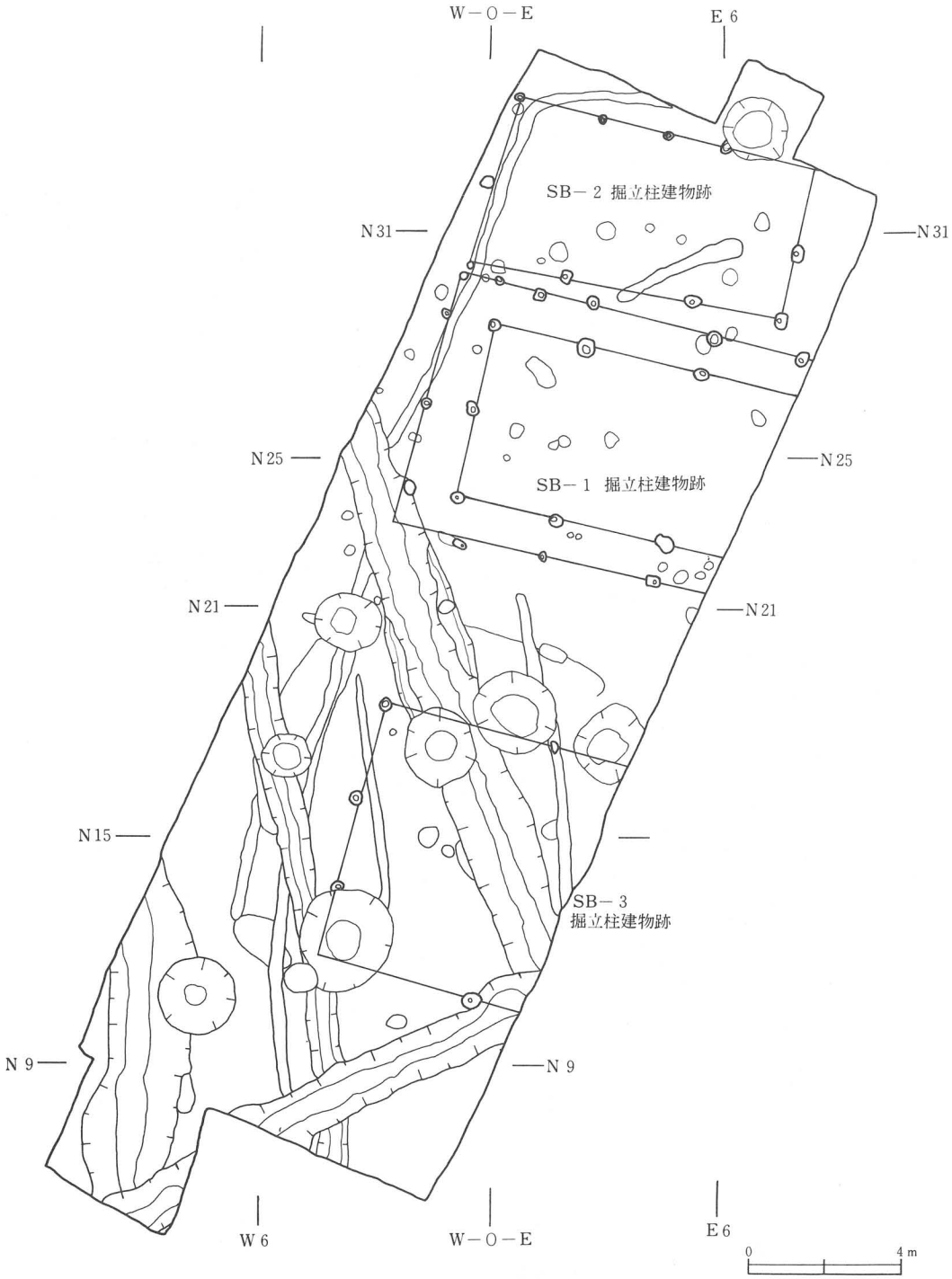
第７図　調査区Ⅰ区遺構配置図



第８図　調査区Ⅱ区遺構配置図

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

2．掘立柱建物跡



第9図　SB1～3掘立柱建物跡平面図

掘立柱建物跡は掘立柱列も含めて５棟確認された。また柱穴は調査区内で約130を数え、さらに多くの建物跡が存在していたと考えられるが、明確な建物跡として確認されるに至らなかった。柱穴からの出土遺物はSB－１・２掘立柱建物跡から出土したのみで、その他は殆どなく、時代の決定は困難であるが、他の遺構との重複関係から中世のものと考えられるに至った。

ＳＢ－１掘立柱建物跡　SB－１はⅠ区北半で検出された三面に疵が付く東西棟建物跡である。東西桁行２間以上(西から2.7＋3.0m)、梁行２間(2.4＋2.4m)、桁行総長5.5m以上、梁行総長4.8mである。疵の出は、南側で1.0m、西側で1.2m、北側で1.0～1.1mである。建物の方向は南北柱列でN－5°－Eである。柱穴掘り方はほぼ円形・方形で一辺30～50cm、深さ10～20cm、柱痕跡は平均直径10～15cm程である。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルトである。SD－1、５溝跡を切る。

〈出土遺物〉　ピット22、ピット25、ピット27からロクロ使用の土師器坏、甕、ピット56から陶器片等を出土している。

ＳＢ－２掘立柱建立跡　SB－２はSB－１建物跡の50cm北側に近接して検出された東西棟建物跡である。東西桁行４間(西から2.3＋1.8＋1.5＋2.4m)、梁行２間(2.4＋2.4m)、桁行総長8.0m、桁行総長4.8mである。建物の方向はN－9°－Eである。東側桁柱の南１東３の柱穴は検出されなかった。柱穴掘り方は円形、方形で一辺20～40cm、深さ10～40cm、柱痕跡は平均直径10cm程である。柱穴掘り方埋土は黒褐色シルト及び、暗褐色シルトである。SD－５溝跡を切り、SE－７井戸跡に切られる。

〈出土遺物〉　ピット19からロクロ使用の土師器坏・甕片を出土している。

ＳＢ－３掘立柱建物跡　SB－３はⅠ区南半で検出された東西棟建物跡である。井戸跡、溝跡との重複で北側桁柱列は検出されなかった。東西桁行２間以上、梁行３間(北より2.6＋2.4＋2.1)、桁行総長4.0m以上、梁行総長7.1mである。建物の方向は南北柱列でN－8°－Eである。柱穴柱り方はほぼ円形で直径30～50cm、深さ20cm程、柱痕跡は直径10cm程である。柱穴掘り方埋土は黒褐色及び、灰黄褐色シルトである。SD－１、６溝跡、SE－２井戸跡に切られる。

〈出土遺物〉　ピット68より土師器片を１点出土している。

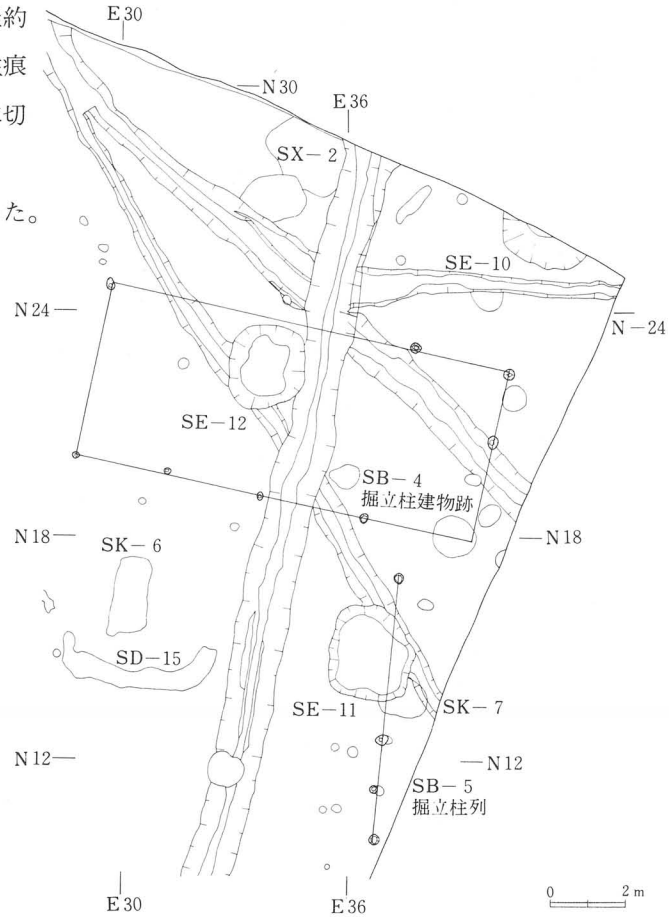
ＳＢ－４掘立柱建物跡　SB－４はⅡ区北半で検出された東西棟建物跡である。東西桁行４間(西より2.5＋2.5＋2.8＋2.9m)、梁行(北より1.9＋2.7m)、桁行総長10.7m、梁行総長4.6mである。建物方向はN－12°－Eである。柱穴掘り方は円形及び楕円形で、直径約20～35cm、深さ６～20cm程である。柱痕跡は認められない。SD－11井戸跡、SK－８土壙に切られている。

〈出土遺物〉　ピット81より土師器片を１点出土している。

ＳＢ－５掘立柱建物跡　SB－５はⅡ区中央部東側で検出された一本柱列である。南北５間と推定され、柱間寸法は1.4～1.5mで総長は７m程である。柱列方向はN－5°－Eである。柱

穴掘り方は円形及び楕円形で、直径約20～30cm、深さ10～27cmである。柱痕跡は認められない。SE－7井戸跡に切られる。

〈出土遺物〉　遺物は出土しなかった。



第10図　SB4・5掘立柱建物跡平面図

3．溝　跡

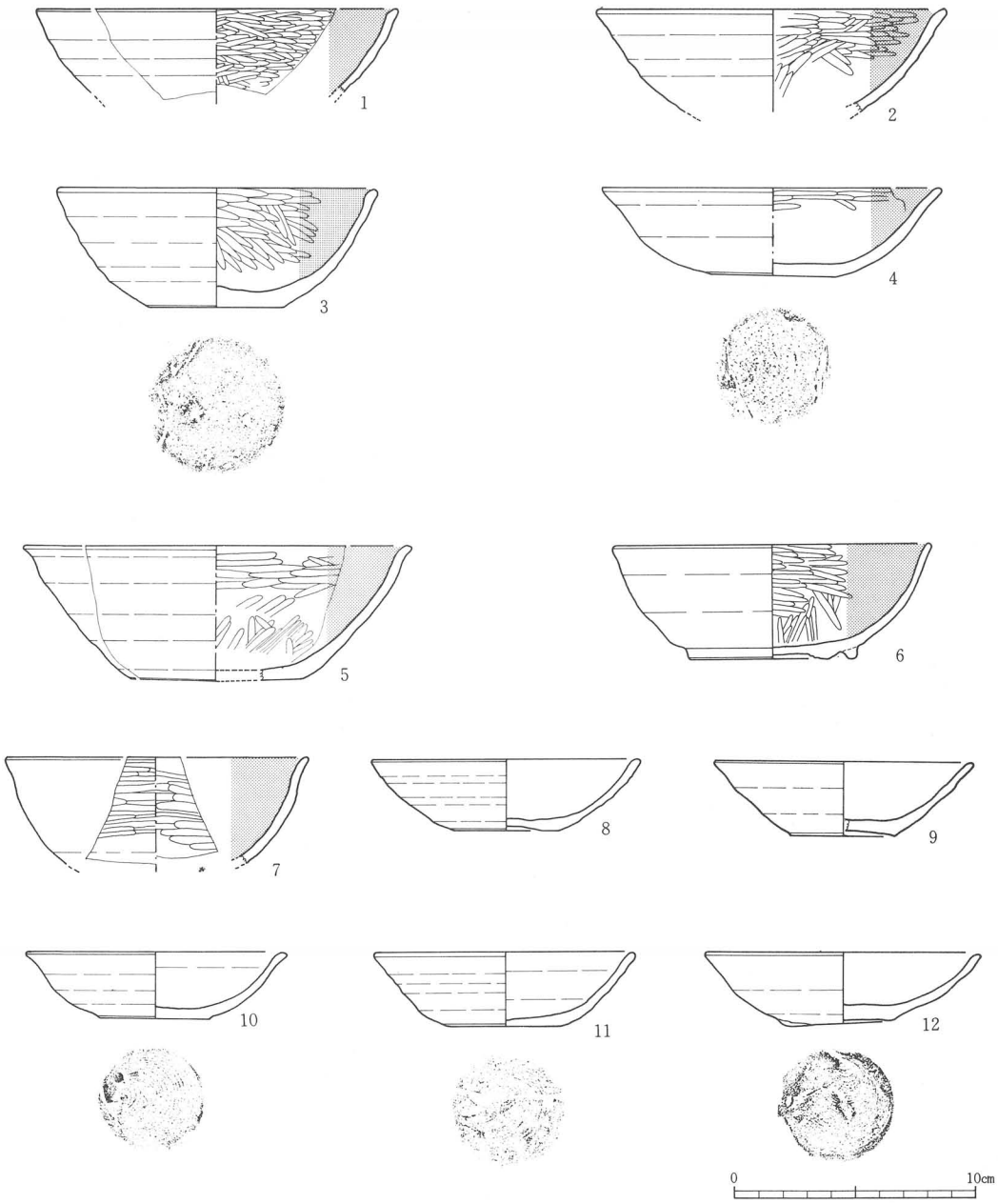
溝跡は調査区内より31条検出されたが、全て他遺構との重複ないし、調査区外に延びている。

SD－1溝跡　調査1区の中央部にほぼ南北方面に延びる溝跡である。上端幅120～210cm、底幅30～70cm、深さ60～80cm程で、断面形はほぼ逆台形を呈し、調査区中央付近では壁に段を有し、底面はほぼ平坦である。堆積土は大別して4層に分けられ、1層は褐灰色シルト、2層は黒色粘土質シルト、3層は灰黄褐色シルト、及び褐灰色シルト、4層は褐灰色シルトである。SD－5溝跡、SK－3土壙を切り、SD－2溝跡、SE－5、8井戸跡に切られる。

〈出土遺物〉

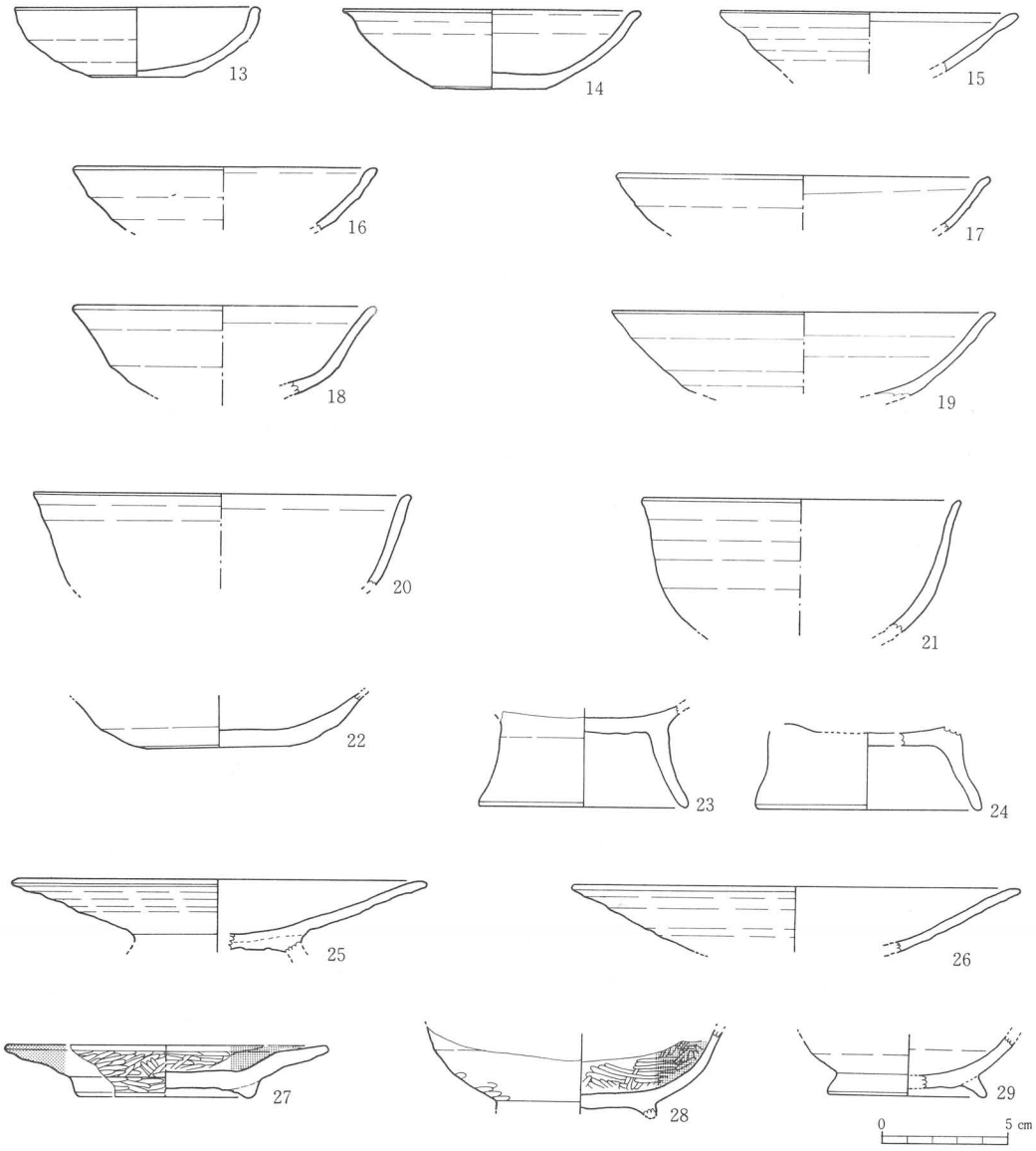
土師器

坏　いずれも製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部まで緩やかに外傾する（第11図1～5、7）。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りによるもの(第11図3、4、5)と底部欠損の為不明であるものとがある(第11図1、2)。



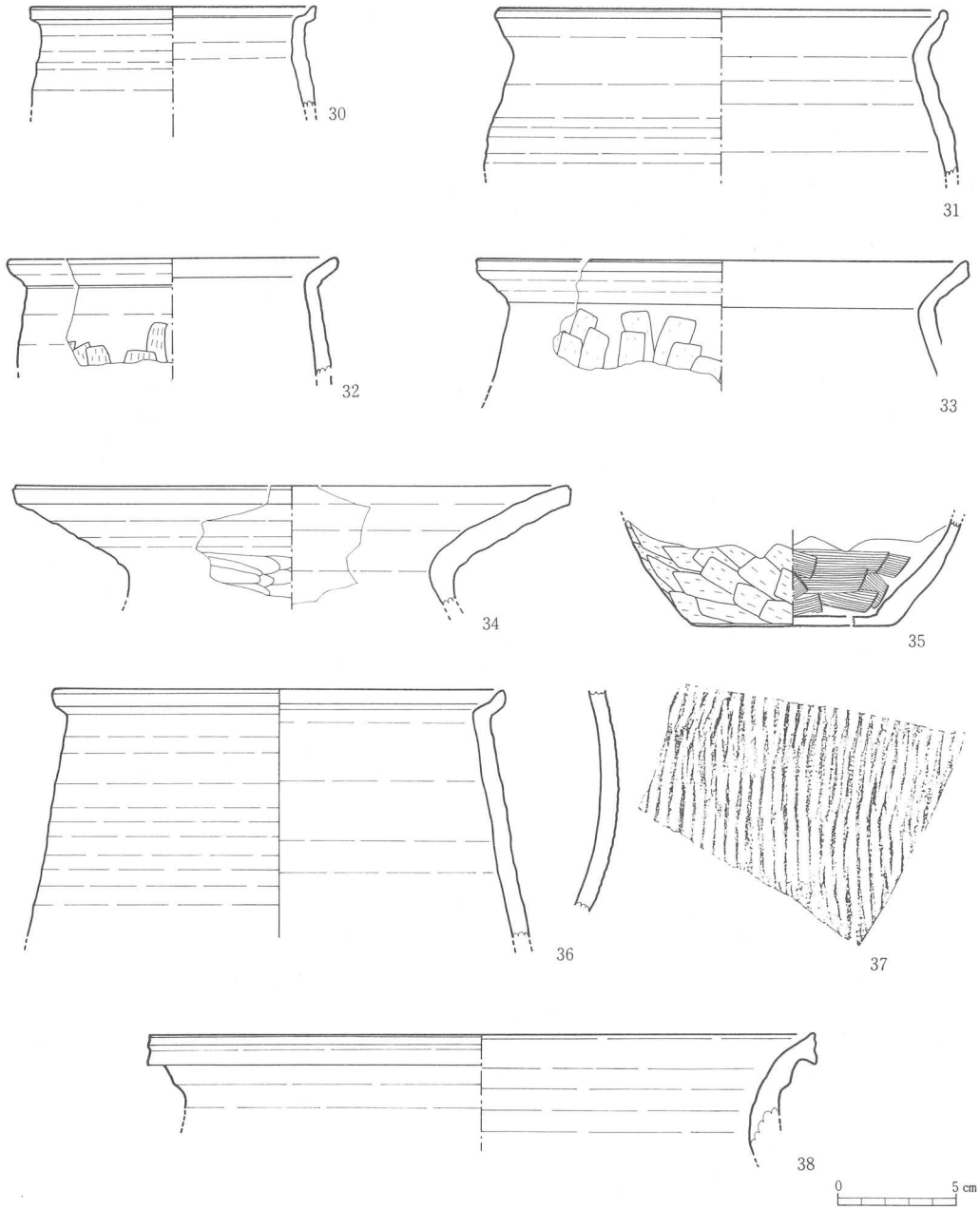
番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	D－4	土師器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラミガキ	ヘラミガキ			14.9(cm)			
2	D－9	土師器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラミガキ	ヘラミガキ			14.5			
3	D－8	土師器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.0	13.2	5.5	⅔	37－1
4	D－3	土師器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラミガキ			3.7	13.9	5.2	⅓	37－3
5	D－20	土師器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	15.6	7.0	⅙	
6	D－7	土師器	高台付坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.8	13.2	7.0	½	37－5
7	D－25	土師器	坏	堆1	ヘラミガキ	ヘラミガキ		ヘラミガキ	ヘラミガキ			12.6			
8	D－2	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.0	11.1	4.4	⅓	38－1
9	D－17	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.1	10.0	4.4	½	37－7
10	D－12	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	2.8	10.8	4.8	½	37－11
11	D－18	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.0	11.0	4.6	⅔	37－8
12	D－11	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.1	11.4	4.2	⅔	38－2

第11図　SD－1溝跡出土遺物実測図（1）



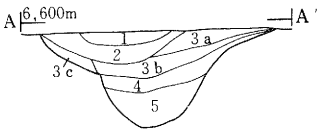
番号	登録No	種別	器形	層位	外面調・整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
13	D－19	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	2.8	9.8	3.8		37－6
14	D－10	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.2	11.7	4.5	½	38－3
15	D－27	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			11.9		⅛	
16	D－14	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			11.9		¼	
17	D－15	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			14.6		⅛	
18	D－24	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			11.8		⅙	
19	D－13	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			15.7		⅙	
20	D－21	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			15.0		⅙	
21	D－22	赤焼土器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			12.6			
22	D－16	赤焼土器	坏	堆1		ロクロナデ	回転糸切		ロクロナデ	ロクロナデ			5.6		
23	D－43	赤焼土器	高台付坏	堆1			ロクロナデ			ロクロナデ			8.2		38－10
24	D－44	赤焼土器	高台付坏	堆1			ロクロナデ			ロクロナデ			8.3		38－9
25	D－30	赤焼土器	高台付坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			16.0		¼	
26	D－31	赤焼土器	高台付坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			17.8		⅙	
27	D－28	土師器	段皿	堆1～2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.1	12.7	6.8	¼	38－11
28	D－29	土師器	高台付坏	堆3		ロクロナデ後ミガキ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ				⅔	
29	D－71	土師器	高台付坏	堆1		ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			6.8		

第12図　SD－1溝跡出土遺物実測図（2）



番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
30	D－35	土師器	甕	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			11.8			
31	D－39	土師器	甕	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			19.0			
32	D－38	土師器	甕	堆1	ロクロナデ	ロクロ→ケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ			13.8			
33	D－37	土師器	甕	堆1	ロクロナデ	ロクロ→ケズリ		ロクロナデ	ロクロナデ			20.6			
34	D－36	土師器	甕	堆1	ロクロナデ	ロクロ→ナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			23.4			
35	D－42	土師器	甕	堆1		ロクロ→ケズリ			ヘラナデ	ヘラナデ			8.4		
36	D－40	土師器	甕	堆1～2	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			18.8			
37	E－31	須恵器	甕	堆1		タタキメ			ナデ						
38	E－32	須恵器	甕	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			27.8			

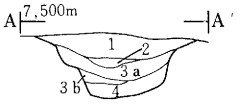
第13図　SD－1溝跡出土遺物実測図（3）



SD－1溝跡

Ⅰ区SD－1

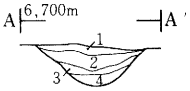
層No	土　色	土性	その他
1	7.5YR3/4褐灰色	シルト	砂と酸化鉄を含む(少量)
2	7.5YR3/1黒　色	粘土質シルト	
3a	10YR5/3 灰黄褐色	シルト	砂と酸化鉄を含む(少量)
3b	10YR5/4 褐灰色	粘土質シルト	
3c	10YR5/3 灰黄褐色	シルト	
4	10YR5/4 褐灰色	粘土質シルト	
5	2.5Y5/1 黄灰色	粘土質シルト	



SD－2溝跡

Ⅰ区SD－2

層No	土　色	土性	その他
1	10YR3/1黒褐色	シルト	
2	10YR2/1黒　色	粘土質シルト	
3a	10YR5/3 灰黄褐色	シルト	
3b	10YR5/3 灰黄褐色	シルト	
4	10YR6/3 灰黄褐色	砂	シルト質粘土を多少含む



SD－3溝跡

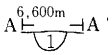
Ⅰ区SD－3

層No	土　色	土性	その他
1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄(斑点状)を含む
2	10YR5/4 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
3	10YR3/1 黒褐色	粘土	
4	10YR5/4 褐灰色	シルト質砂	

SD－5溝跡

SD－5

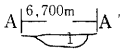
層No	土　色	土性	その他
1	10YR5/4 にぶい黄橙色	シルト	



SD－6遺跡

Ⅰ区SD－6

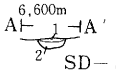
層No	土　色	土　性	その他
1	10YR5/3 黒褐色	粘土質シルト	



SD－7遺跡

Ⅰ区SD－7

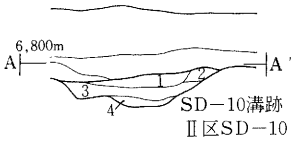
層No	土　色	土　性	その他
1	7.5YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄含む



SD－8溝跡

Ⅰ区SD－8

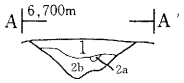
層No	土　色	土性	その他
1	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄(少量)と砂を含む
2	2.5Y7/3 浅黄色	粘土質シルト	



SD－10溝跡

Ⅱ区SD－10

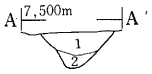
層No	土　色	土性	その他
1	10YR4/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/4褐色 砂質シルト・酸化鉄含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR4/4褐色 砂質シルト含む
3	10YR4/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR4/4褐色 砂質シルト・酸化鉄含む
4	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	10YR3/1黒褐 シルト質粘土含む



SD－11溝跡

SD－11

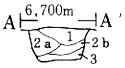
層No	土　色	土　性	その他
1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	炭を微量含む
2a	10YR5/4 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
2b	10YR8/2 灰白色	火山灰	



SD－14溝跡

Ⅱ区SD－14

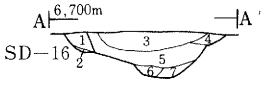
層No	土　色	土性	その他
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	小石を少量含む
2	10YR3/3 黒褐色	シルト	



SD－15溝跡

Ⅱ区SD－15

層No	土　色	土性	その他
1	10YR3/3 黒褐色	砂質シルト	石粒を少量含む
2a	10YR3/3 黒褐色	シルト質砂	石粒を少量含む
2b	10YR3/3 暗褐色	砂	石粒を多く含む
3	10YR5/4 にぶい黄橙色	砂	石粒を多く含む



SD－17溝跡

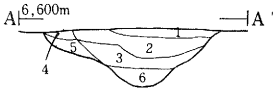
Ⅱ区SD－17

層No	土　色	土性	その他
1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	少量の酸化鉄を含む
2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
3	10YR3/3 黒褐色	シルト	酸化鉄を斑点状に含む
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を斑点状に含む
5	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	
6	10YR5/4 褐灰色	シルト	
7	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	

SD－18溝跡

SD－18

層No	土　色	土性	その他
1	10YR5/3 黒褐色	シルト	炭化物を含む



SD－19溝跡

Ⅱ区SD－19

層No	土　色	土性	その他
1	10YR5/4 褐　色	砂質シルト	酸化鉄と炭化物を含む
2	10YR5/6 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
3	10YR5/6 にぶい黄褐色	砂	酸化鉄を含む
4	10YR5/6 にぶい黄褐色	砂	酸化鉄を球状に含む
5	10YR5/6 灰黄褐色	砂	酸化鉄を含む
6	10YR5/6 灰黄褐色	砂	酸化鉄を少量含む

SD－21溝跡

Ⅰ区SD－21

層No	土　色	土　性	その他
1	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	土器片と砂と酸化鉄を含む
2	7.5YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
3	2.5Y7/3 浅黄色	シルト	酸化鉄を含む

0　2 m

第14図　溝跡平面図・断面図

高台付坏　いずれも製作に際しロクロを使用し、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている(第11図６、第12図28)。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。

甕　甕頸部や口縁部片のため器形は不明である。いずれも頸部でくびれ、口縁部は外反か、もしくは外傾する(第13図30～33、36)。頸部から大きくくびれるもの(第13図34)、体部下半ヘラケズリ、体部上半欠損のため不明のものなどである(第13図35)。

段皿　内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施され、高台は低く、皿部は直線的に大きく開く(第12図27)。

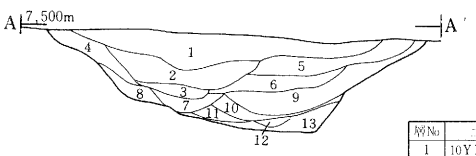
須恵器　甕の口・頸部破片で、頸部が直線的に外傾し、口縁部は外反して端部が上、下側方に突き出す(第13図38)。体部片のみのもの(第13図37)もある。

赤焼土器

坏　いずれも製作の際にロクロを使用している。体部から緩やかに立ち上がり、口縁部で直立ぎみのもの(第11図８、第12図20)。体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（第11図９、11、第12図16～19)。体部から緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外傾するもの(第11図10、12、第12図14、15)。いずれも底部は回転糸切り、無調整である。

高台付坏　いずれも製作の際にロクロを使用している。坏部は直線的に外傾し、大きく開くもの（第12図25、26)。高台部はわずかに開き、端部でやや細まる(第12図23、24)ものがある。

ＳＤ－２溝跡　調査Ⅰ区の南壁寄りで検出され、ほぼ東西方面に延び、さらに南拡張区まで延びる溝跡である。上端幅120～130cm、底幅30～60cm、深さ50cm程である。断面形はほぼ逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は大別して４層に分けられ、１層は黒褐色シルト、



ＳＤ－20溝跡

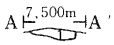
Ⅱ区ＳＤ－20

層No	土　色	土　性	その他
1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	
2	2.5Y 暗灰黄色	砂	
3	10YR5/4 褐灰色	粘土	
4	7.5YR5/4 褐灰色	砂質シルト	
5	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	砂(多量)と酸化鉄含む
6	10YR5/2 灰黄褐色	砂	砂と酸化鉄含む
7	7.5YR5/4 褐灰色	粘土	
8	7.5YR5/4 黒褐色	粘土	
9	10YR5/4 褐灰色	砂質シルト	
10	7.5YR5/4 褐灰色	粘土	
11	7.5YR5/4 褐灰色	粘土	
12	7.5YR5/4 褐灰色	粘土	砂(多量)と酸化鉄(少量)含む
13	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	

ＳＤ－22溝跡

Ⅰ区ＳＤ－22

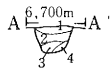
層No	土　色	土　性	その他
1	10YR5/2 にぶい黄橙色	シルト	



ＳＤ－23溝跡

ＳＤ－23

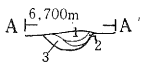
層No	土　色	土　性	その他
1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を少量含む



ＳＤ－24溝跡

ＳＤ－24

層No	土　色	土　性	その他
1	10YR3/3暗褐色	シルト	酸化鉄を含む
2	10YR3/3暗褐色	シルト	
3	10YR5/3にぶい黄橙色	シルト	酸化鉄を含む
4	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	



ＳＤ－25溝跡

ＳＤ－25

層No	土　色	土　性	その他
1	10YR5/3にぶい黄橙色	砂質シルト	酸化鉄を含む
2	10YR5/3にぶい黄橙色	砂	
3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	

第15図　溝跡平面図・断面図

2層は黒色粘土質シルト、3層は灰黄褐色シルト、及び砂である。SD—1、3、21溝跡を切っている。

〈出土遺物〉　1層中より土師器坏、甕、須恵器甕、馬の歯、4層よりロクロ使用の土師器高台付坏片等を出土している。

SD－3溝跡　調査Ⅰ区南半で検出され、ほぼ南北方向に延びる。上端幅80～100cm、底幅30cm程、深さ20～30cm程である。断面形は緩やかなV字型である。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は褐灰色粘土質シルト、2層は黒褐色粘土、3層は砂を含む褐灰色シルトである。SD—4、22溝跡を切り、SD—2溝跡、SE—2、3井戸跡に切られている。

〈出土遺物〉　少量の非ロクロの土師器甕の細片を出土している。

SD－4溝跡　調査Ⅰ区南半で残存総長3mを検出された。上端幅30cm、深さ5cm程で、断面形は逆台形である。SD—3溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

SD－5溝跡　調査1区西壁に沿って検出され、調査区北壁付近で屈曲し東方に延びる溝跡である。上端幅30～40cm程、底幅10～20cm、深さ15～20cm程、断面形はU字型である。堆積土はにぶい黄橙色シルトである。SD—1溝跡に切られている。SD—22溝跡と同一のものと考えられる。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

SD－6溝跡　調査Ⅰ区中央東壁付近で検出され、南に延びる溝跡である。上端幅20～30cm、底幅10cm程、深さ10cm程、断面形は緩やかなU字型を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。SE—5井戸跡に切られている。

〈出土遺物〉　非ロクロ土師器甕片を数点出土している。

SD－7溝跡　調査1区北半中央部で検出され、やや東西方向に延びる溝跡である。上端幅30～40cm、底幅10cm程、深さ10～15cm程である。断面形は逆台形を呈し、堆積土は褐灰色シルト質粘土である。

〈出土遺物〉　土師器片を出土している。

SD－8溝跡　調査Ⅰ区南半中央部で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅20cm、底幅15cm、深さ10cm程である。断面形は逆台形を呈し、堆積土は2層に分けられ、1層は黒褐色粘土質シルト、2層は浅黄色粘土質シルトである。SE—2井戸跡に切られている。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

SD－10溝跡　調査Ⅱ区北半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅は100～120cm、底幅60～80cm、深さ10～20cm程である。断面形は逆台形で、緩い立ち上がりの壁で、底面はほぼ平坦である。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルト、及びシルト質粘土、暗褐色シルト・砂質シルトである。SD—11、20溝跡を切っている。

〈出土遺物〉　縄文土器片(第40図１)、土師器片、須恵器片でいずれも小破片である。

ＳＤ－11溝跡　調査Ⅱ区北半で検出され、南北方向、南側で東に屈曲して「Ｌ」字状に延びる溝跡である。上端幅は70～100cm、底幅20～30cm、深さ20～40cm程である。断面形は舟底型で緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色及び灰黄褐色砂質シルトである。SD—19、24、25溝跡、SK—17土壙を切り、SD—10、12溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　土師器坏(第39図８)、甕(第38図６)、須恵器、瓦、中世陶器、石製模造品（第40図４)、粘土塊等である。

ＳＤ－12溝跡　調査Ⅱ区北半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅は約100cm～130cm、底幅20～40cm、深さ20～60cm程である。断面形は舟底形である堆積土は黒褐色砂質シルト及び褐灰色粘土質シルト、浅黄褐色シルトである。SD—11、14、16、17溝跡を切り、SE—12井戸跡、SK—13土壙に切られている。

〈出土遺物〉　縄文土器片(第40図３)、土師器坏(38図３、第39図３)、高坏(第38図２)、壺(第38図７)、中世陶器、粘土塊等である。

ＳＤ－13溝跡　調査Ⅱ区中央西端で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅40～50cm、底幅20～35cm、深さ５～20cm程である。断面形はＵ字型で、堆積土は褐色シルト、黒褐色砂質シルトである。

〈出土遺物〉　ツマミ状の土製品が出土している。

ＳＤ－14溝跡　調査Ⅱ区北半で検出され、南東方向に延びる溝跡である。上端幅40—70cm、底幅20～30cm、深さ10～20cm程である。断面形は逆台形で、堆積土は黒褐色シルトである。SD—９、12、17溝跡、SE—11、12井戸跡、SK—７土壙に切られている。

〈出土遺物〉　土師器の小破片のみである。

ＳＤ－16溝跡　調査Ⅱ区北半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅40～100cm、底幅20～80cm、深さ10cm程である。断面形は逆台形で、堆積土は暗褐色砂質シルト及び灰黄褐色シルトである。SK—11土壙を切り、SD—12、17溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　土師器の小破片のみである。

ＳＤ－17溝跡　調査Ⅱ区北西隅で検出され、南東方向に延びる溝跡である。上端幅60～100cm、底幅30～40cm、深さ30～40cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は大別して２層に分けられ、１層は黒褐色及びにぶい黄褐色シルト、２層は灰黄褐色及び褐灰色シルトである。SD—14、16溝跡、SK—16土壙を切り、SD—９、12溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　土師器の小破片のみである。

ＳＤ－18溝跡　調査Ⅱ区北半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅30cm、底幅20cm、深さ10cm程である。断面形はＵ字形で、堆積土は黒褐色シルトである。

〈出土遺物〉　土師器の小破片のみである。

ＳＤ－19溝跡　調査Ⅱ区南半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅80～120cm、底幅20cm、深さ30～50cm程である。断面形は舟底形である。堆積土は大別して３層に分けられ、１層は褐色砂質シルト、２層はにぶい黄褐色砂質シルト及び砂、３層は灰黄褐色砂である。SD—10、11、31溝跡を切り、SE—９井戸跡に切られている。

〈出土遺物〉　縄文土器(第40図２)、赤焼土器坏(第39図９)、中世陶器、粘土塊等である。

ＳＤ－20溝跡　調査Ⅱ区西半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅280～300cm、底幅100cm、深さ70～80cm程である。断面形は扁平な逆台形である。堆積土は大別して３層に分けられ、１層は灰黄褐色砂質シルト、２層は灰黄褐色シルト質砂及び砂、３層は褐灰色粘土及び灰黄褐色シルト質粘土である。SD—23、31溝跡を切り、SD—10溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　土師器片、中世陶器片、木片、種子、馬の歯等である。

ＳＤ－21溝跡　調査Ⅰ区南西コーナーで検出され、ほぼ南北方向に延びる溝跡である。西側上端部が調査区外に延びている。上端幅250cm、深さ最深部で30cm程である。断面形は平坦な底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は２層に分けられ、１層は黒褐色粘土質シルト、２層は浅黄色シルトである。SK—５土壙、SD—２溝跡に切られている。

〈出土遺物〉

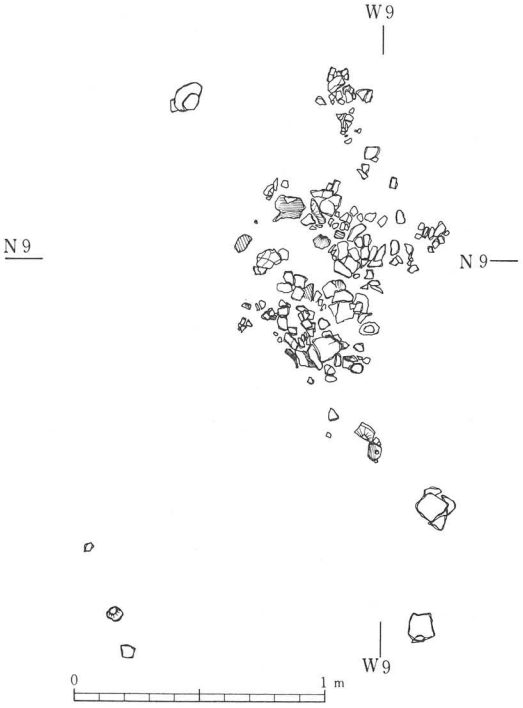
土師器甕　いずれもロクロを使用せず、体部は球形で、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲するもの(第17図１、３、４)や体部上半欠損しているが、体部は球形であると考えられるもの(第17図６、７)などがある。

壺　底部片でロクロを使用していないもの(第18図８、９)である。

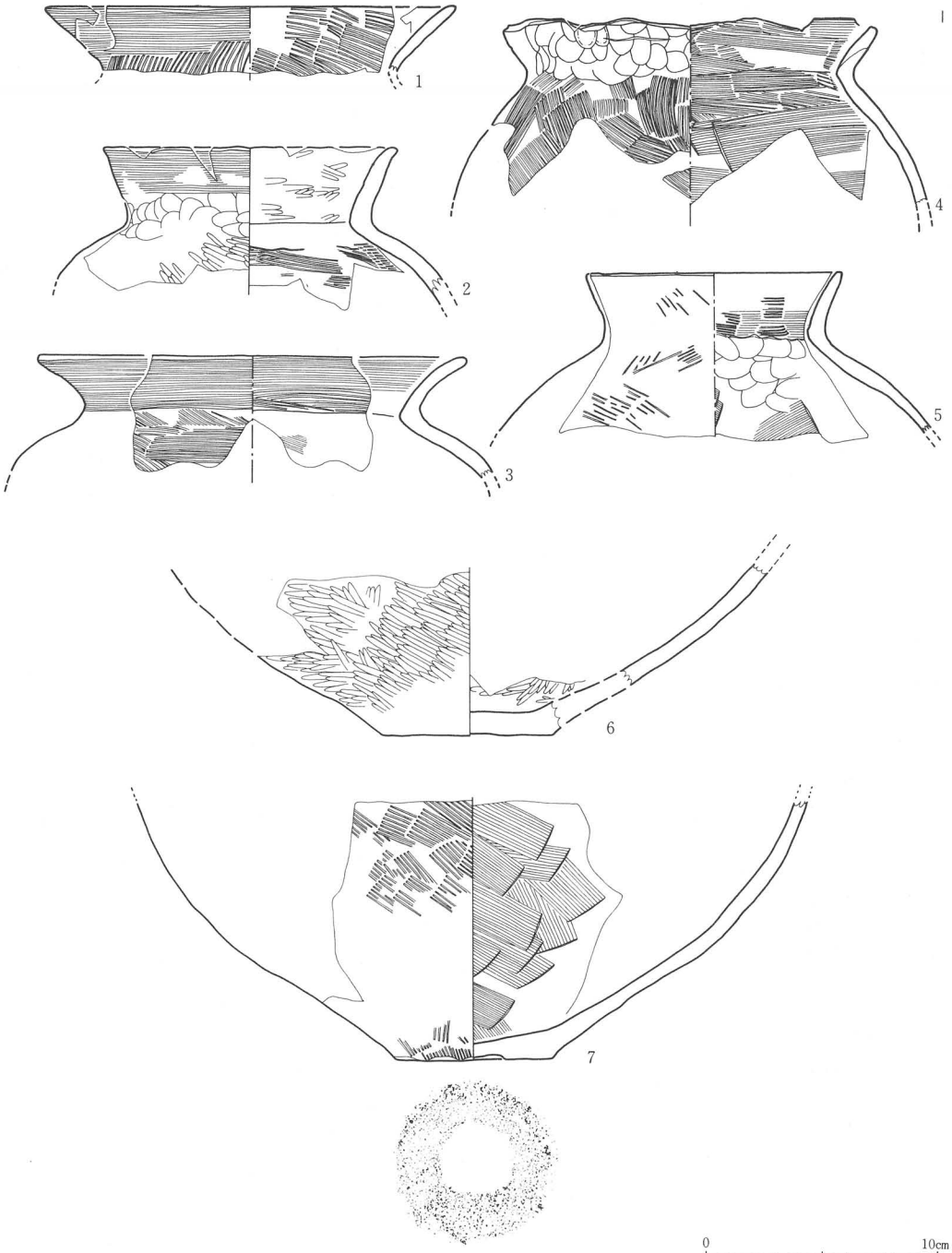
須恵器甕　体部破片である。

土製品　フイゴ羽口は復元径 4.1 cmで、ほぼ円筒形である(第18図11)。

ＳＤ－22溝跡　調査Ⅰ区南半で検出され、ほぼ南北方向に延びる溝跡である。上端幅30～40cm、底幅15cm程、深さ10～20cm程である。断面形は扁平逆台形である。堆積土は大別して２層に分けられ、１層は黒褐色シルト、２層はにぶい黄色シルトである。SD—１、２、３溝跡、SE—３、４井戸跡に切られ、SK—2.土壙を切っている。



第16図　ＳＤ－21溝跡遺物出度平面図



番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	C－8	土師器	甕	堆1	ヨコナデ→ハケメ			ハケメ				17.8			
2	C－5	土師器	壺	堆2	ヨコナデ	ミガキ		ミガキ	ハケメ			12.7			41－3
3	C－6	土師器	甕	堆1	ヨコナデ	ハケメ		ハケメ→ヨコナデ				18.3			
4	C－4	土師器	甕	堆2	ハケメ→ナデ	ハケメ		ハケメ→ヘラナデ	ヘラナデ			16.2			
5	C－7	土師器	壺	堆1	ハケメ	ハケメ		ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ→ナデ			10.9			41－4
6	C－3	土師器	甕	堆1		ヘラミガキ	ケズリ→ミガキ		ヘラミガキ	ヘラミカキ			7.2		40－1
7	C－2	土師器	甕	堆1		ハケメ	ヘラケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ			6.8		

第17図　SD－21溝跡出土遺物実測図（1）

〈出土遺物〉　土師器坏、高坏、甕、須恵器片等を出土している。

ＳＤ－23溝跡　調査Ⅱ区西半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅30～40cm、底幅10～20cm、深さ５cm程である。断面形はＵ字形で、堆積土は灰黄褐色シルトである。SD—20溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　土師器、器台片（第38図１）のみである。

ＳＤ－24溝跡　調査Ⅱ区南半で検出され、ほぼ東西方向に延びる溝跡である。上端幅40～60cm、底幅10～40cm、深さ10cm程である。断面形はＵ字形で、堆積土は暗褐色及びにぶい黄橙色シルトである。SD—11、25溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

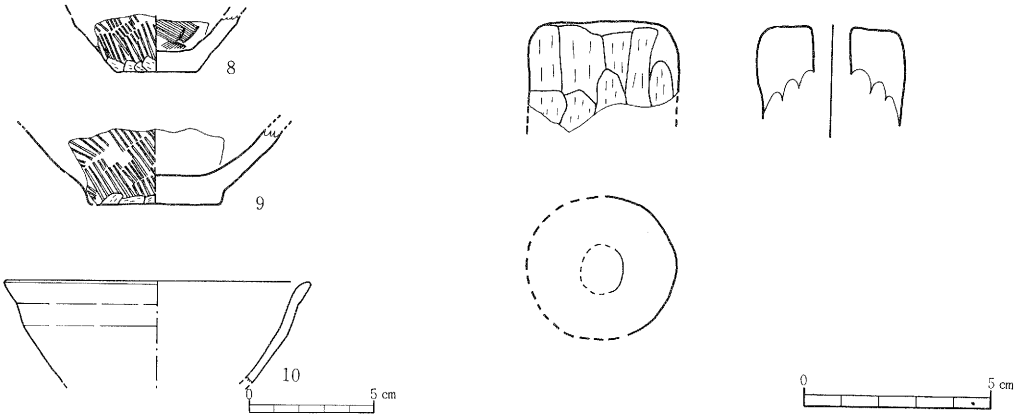
ＳＤ－25溝跡　調査Ⅱ区南半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅30～40cm、底幅20cm、深さ10cm程である。断面形はＵ字形である。堆積土は大別して２層に分けられ、１層はにぶい黄橙色砂質シルト及び砂、２層はにぶい黄褐色砂である。SD—24溝跡を切り、SD—11溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　土師器の小破片のみである。

ＳＤ－26溝跡　調査Ⅱ区南半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端部20～30cm、底幅10～20cm、深さ５cm程である。断面形はＶ字形で、壁は緩い立ち上がりを呈する。堆積土は黒褐色砂である。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

ＳＤ－27溝跡　調査Ⅱ区南半で検出され、ほぼ東西方向に延びる溝跡である。上端幅20～30cm、底幅５～10cm、深さ２～10cm程である。断面形はＵ字形で、壁は緩い立ち上がりを呈する。



番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
8	C－49	土師器	小形壺	堆1		ハケメ	ヘラケズリ		ヘラナデ	ヘラナデ			3.2	1/6	—
9	C－33	土師器	壺	堆1		ハケメ	ヘラケズリ						5.2	1/5	—
10	D－61	土師器	坏	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			12.2		1/6	—
11	P－2	土製品	フイゴ羽口	堆1		ケズリ						4.0		1/4	—

第18図　ＳＤ－21溝跡出土遺物実測図（２）

堆積土は黒褐色砂である。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

ＳＤ－29溝跡　調査Ⅱ区南半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅30～50cm、底幅10～25cm、深さ２～８cm程である。断面形はＵ字形で、壁は緩い立ち上がりを呈する。堆積土は黒褐色砂である。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

ＳＤ－30溝跡　調査Ⅱ区南半中央で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅50～60cm、底幅30～45cm、深さ５cm程である。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

ＳＤ－31溝跡　調査Ⅱ区南半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅40～95cm、底幅25～75cm、深さ５cm程である。

〈出土遺物〉　出土遺物はなかった。

４．井　戸　跡

調査区Ⅰ、Ⅱ区から計12基の井戸跡が検出された。井戸跡は全て素掘りで、井戸枠を据えたものは検出されなかった。

ＳＥ－１井戸跡　調査Ⅱ区の北半で検出され、掘り方平面形はほぼ円形で直径360～380cmである。深さは100cm程で、断面形は逆台形を呈し、深さよりも上端幅の方が大きい。底幅は180～200cmで底面はほぼ平坦である。堆積土は大別して５層に分けられ、１層は黒褐色シルト及び黒色粘土、２層は灰黄褐色砂及び黒色粘土、３層は灰褐色シルト及び砂、４層は褐灰色粘土、５層は灰オリーブ色シルト質砂である。SD―11溝跡を切り、SK―14土壙に切られている。

〈出土遺物〉　土師器坏(第23図４)、高坏(第23図１)・器台・甕、須恵器坏・甕、瓦片（第24図１、３、４）等である。

ＳＥ－２井戸跡　調査Ⅰ区南半で検出され、掘り方平面形はほぼ円形で直径250～270cmである。深さは110cmで、断面形は緩やかな円形からすぼまり、底面はレンズ状である。堆積土は大別して４層に分けられ、１層は灰黄褐色粘土質シルト、２層は黒褐色粘土、３層は褐灰色粘土質シルト、４層は黒褐色粘土質シルトである。SD―３、８溝跡を切り、ピット１に切られる。

〈出土遺物〉　１層中より三筋壺肩部片(第23図９)、３、４層中より土師器坏・甕、須恵器、中世陶器、砥石(第23図10)である。

ＳＥ－３井戸跡　調査１区西壁寄りで検出され、掘り方平面形はほぼ円形で直径110～130cmである。深さは50cm程で、緩やかな段を有し、さらに直径70cm程の円筒形の素掘りとなる。堆積土は大別して３層に分けられ、１層は黒褐色砂質シルト、２層は黒褐色粘土、３層は黒褐色

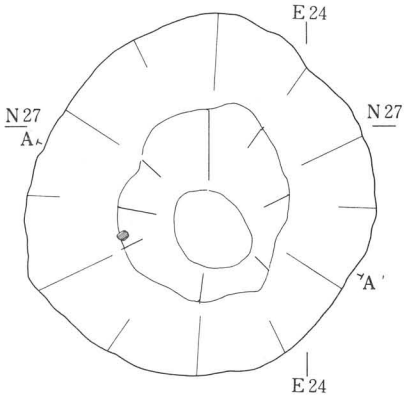
シルト質粘土である。SD—3、22溝跡を切る。

〈出土遺物〉　1層中より土師器坏、平瓦の細片（第24図2）等である。

SE－4井戸跡　調査Ⅰ区西壁寄りで検出され、掘り方平面形は楕円形で直径140～170cmである。深さ40cm程で、緩やかな段を有し、さらに直径100cm程の円筒形の素掘りである。底幅は110cmで、壁面は崩落の為刹られたと考えられる。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は黒褐色砂質シルト、2層は黒褐色粘土質シルト、3層は褐灰色シルトである。SD—22溝跡を切る。

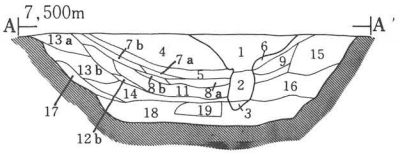
〈出土遺物〉　2、3層中より土師器坏・甕、中世陶器(第23図11)、縄、木製品舟形（第25図3）等である。

SE－5井戸跡　調査Ⅰ区中央で検出され、掘り方平面形はほぼ円形で直経200～220cmである。深さは120cm、壁面は緩やかにすぼまり、底面はほぼ平坦で底幅130cmを計る。堆積土は大別して3層に分けられ、1層

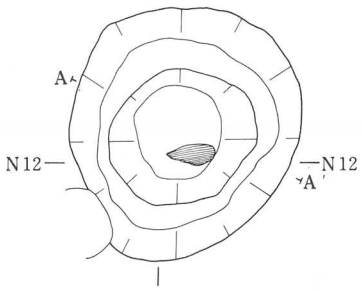


Ⅰ区SE－3

層No	土　色	土 性	その他(Ⅱ区SE－1)
1	7.5YR3/1黒 褐 色	粘土質シルト	
2	7.5YR3/1黒　色	粘 土	
3	7.5GY5/1緑 灰 色	砂	植物片(少量)を含む
4	7.5YR3/1黒 褐 色	シルト質粘土	酸化鉄(小量)、砂、小石を含む
5	10YR1/1黒　色	粘 土	植物片(少量)を含む
6	7.5YR3/1黒　色	粘 土	砂(多量)を含む
7a	10YR2/1 黒 褐 色	粘 土	酸化鉄(多量)を含む
7b	10YR2/2 灰黄褐色	粘土質シルト	砂(多量)と酸化鉄(少量)を含む
8a	10YR2/2 灰黄褐色	砂	
8b	10YR5/1 褐 灰 色	粘 土	酸化鉄(斑点状)を含む
9	10YR5/2 灰黄褐色	砂	
10	7.5YR5/1褐 灰 色	粘土質シルト	砂(多量)を含む
11	10YR5/2 黒 褐 色	粘 土	
12a	7.5YR5/1灰 褐 色	シルト	
12b	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂	
13a	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質砂	砂と酸化鉄を含む(多量)
13b	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質砂	
14	7.5YR5/1褐 灰 色	粘 土	
15	7.5YR5/1灰 褐 色	砂	酸化鉄(少量)を含む
16	7.5YR5/1褐 灰 色	粘 土	
17	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂	
18	5Y5/2 灰オリーブ色	シルト質砂	
19	2.5GY オリーブ灰色	砂	

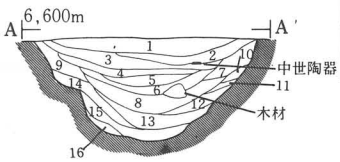


SE－1 井戸跡

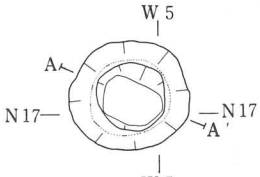


Ⅰ区SE－2

層No	土　色	土 性	そ の 他
1	10YR3/2 黒 褐 色	砂質シルト	砂と小石を含む
2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む
3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	少量の炭化物と酸化鉄を含む 2層下面に上器片を包含
4	7.5YR5/6明 褐 色	シルト	多量の酸化鉄と炭化物を含む
5	10YR5/1 褐 灰 色	シルト質粘土	炭化物と少石を多量に含む
6	10YR3/1 黒 褐 色	シルト質粘土	酸化鉄・炭化物・植物遺骸を多量に含む
7	7.5YR3/1黒 褐 色	粘土質シルト	酸化鉄を斑点状に含む
8	10YR3/1 黒 褐 色	粘 土	
9	7.5YR5/1褐 灰 色	シルト質粘土	酸化鉄を斑点状に含む
10	2.5YR5/3黄 褐 色	シルト質粘土	
11	10YR5/1 褐 灰 色	粘土質シルト	
12	2.5YR5/3暗灰褐色	砂	
13	10YR3/1 黒　色	粘土質シルト	小粒子を含む
14	10YR5/1 褐 灰 色	粘土質シルト	
15	10YR3/1 黒 褐 色	粘土質シルト	
16	10YR3/1 黒　色	粘土質シルト	

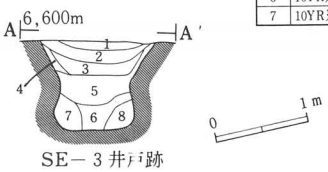


SE－2 井戸跡



Ⅰ区SE－3

層No	土　色	土　性	そ の 他
1	10YR3/2 黒褐色	砂 質 シ ル ト	
2	10YR3/2 黒褐色	〃	
3	7.5YR3/1 ！ 色	粘土質シルト	酸 化 鉄
4	7.5YR3/1黒褐色	〃	酸 化 鉄
5	10YR3/2 黒褐色	〃	
6	10YR3/1 黒褐色	〃	酸化鉄と植物遺骸と木片を含む
7	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	



SE－3 井戸跡

第19図　SE 1～3井戸跡平面図・断面図

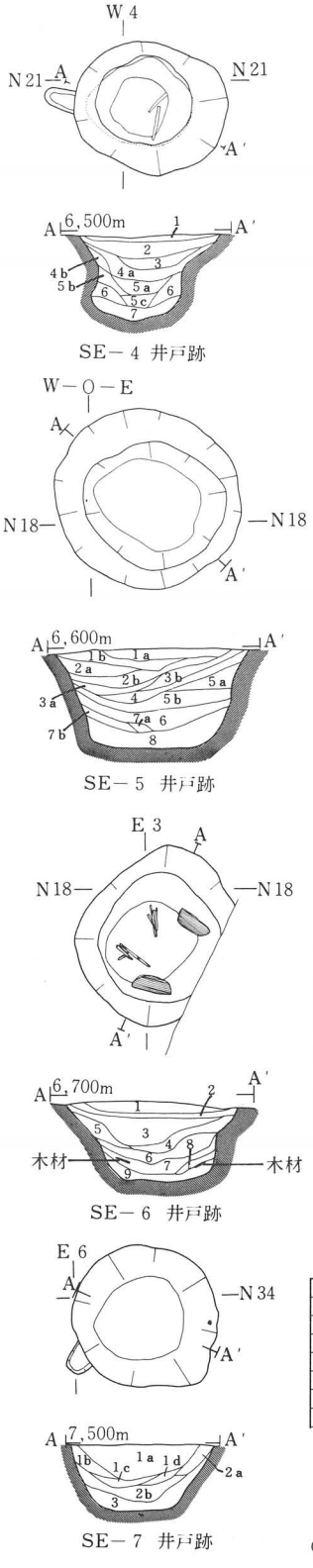
は褐灰色シルト、２層は黒褐色シルト質粘土、３層は黄灰色粘土である。SD－６溝跡を切る。

〈出土遺物〉　土師器坏・高坏・甕、栗の実、加工された木片、馬の歯等を出土している。

ＳＥ－６井戸跡　調査Ⅰ区東壁で検出され、掘り方平面形は楕円形で直径 210 cm程である。深さは90cmで壁面は緩やかにすぼまり、底面はほぼ平坦で底幅90cmを計る。堆積土は大別して３層に分けられ、１層は黒褐色シルト、２層は黒褐色シルト質粘土、３層は褐灰色粘土である。

〈出土遺物〉　土師器坏・甕、須恵器、井戸跡底面上から木桶の底板が２枚、木製品、炭化材等を出土している。

ＳＥ－７井戸跡　調査Ⅰ区北壁にかかる為、さらに北側1.5×2.0m を拡張し平面プランを検出した。掘り方平面形はほぼ円形で直径160～170cmである。深さは70cm程で、壁面は緩やかな傾きですすぼまり、底面はほ



Ⅰ区SE－４

層No	土　色	土　性	そ の 他
1	10YR3/2 黒褐色	シルト質砂	砂を含む
2	5YR3/1 黒褐色	砂質シルト	
3	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む
4 a	10YR3/2 黒褐色	粘土性シルト	
4 b	10YR3/1 黒　色	〃	
5 a	10YR3/1 黒　色	シルト	自然遺物を少量含む
5 b	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	
6 c	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
6	10YR4/1 褐灰色	シルト	
7	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	

Ⅰ区SE－５

層No	土　色	土　性	そ の 他
1 a	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質砂	炭化物・少量の砂・土器の細片含む
1 b	10YR5/1 褐灰色	〃	
2 a	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂	粘土を含む
2 b	2.5Y5/1 黄灰色	砂	酸化鉄・粘土を含む
3 a	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	砂を多量に混入
3 b	5Y7/2 褐灰色	粘土	酸化鉄・砂を混入
4	7.5YR3/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を含む
5 a	7.5YR3/1 黒　色	〃	酸化鉄を含む
5 b	7.5YR2/1 黒　色	〃	酸化鉄・少量の植物片を含む
6	10YR5/1 褐灰色	〃	酸化鉄を含む
7 a	2.5Y6/4 にぶい黄色	〃	植物遺骸を含む
7 b	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂	酸化鉄・粘土を含む
8	2.5Y5/4 黄灰色	粘土	酸化鉄・植物遺骸・少量の砂を含む

Ⅰ区SE－６

層No	土　色	土　性	そ の 他
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	
2	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
3	7.5YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む
4	7.5YR3/1 黒　色	粘土	酸化鉄を少量含む
5	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	〃
6	10YR3/1 黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄・木材を含む
7	7.5YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄・木材を包含する
8	2.5Y7/2 灰黄色	粘土	少量の砂・層下端に木材包がん
9	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	木材の細片を含む

Ⅰ区SE－７

層No	土　色	土　性	そ の 他
1 a	10YR3/4 暗褐色	シルト	
1 b	10YR4/1 褐灰色	シルト	
1 c	10YR4/6 褐　色	シルト	
1 d	10YR3/1 黒褐色	シルト	
2 a	10YR4/1 褐灰色	シルト	
2 b	10YR4/1 褐灰色	シルト	
3	10YR5/2 灰黄褐色	砂	

第20図　ＳＥ４～７井戸跡平面図・断面図

ぼ平坦で底幅60cmを計る。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は暗褐色シルト、2層は褐灰色シルト、3層は灰黄褐色砂である。SD—5溝跡を切る。

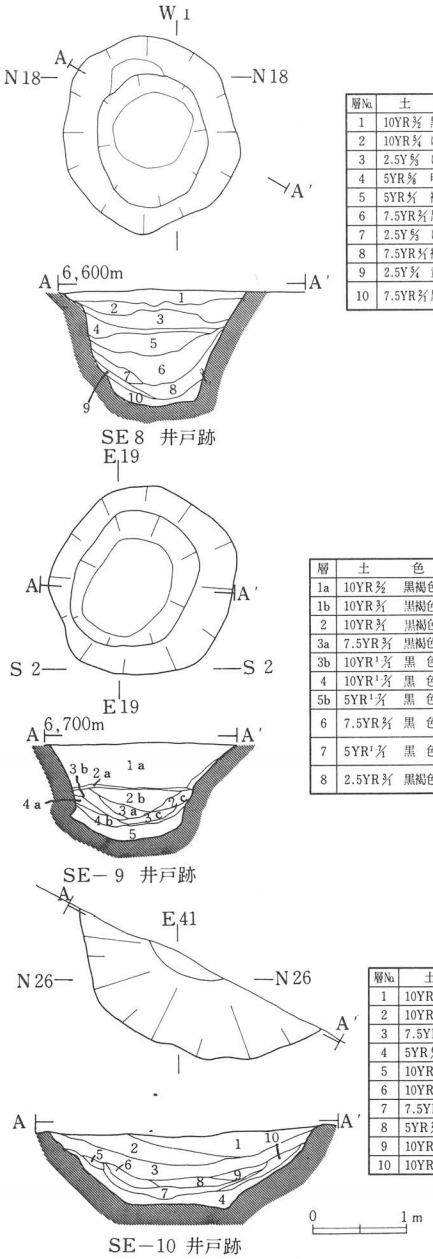
〈出土遺物〉　土師器坏、甕等の破片を出土している。

SE－8井戸跡　調査Ⅰ区のほぼ中央で検出され、掘り方平面形は楕円形で、直径170～210cmである。深さは125cm程で、断面形は不整逆台形を呈し、底面はほぼ平坦で、底幅は70cm程である。堆積土は大別して4層に分けられ、1層は黒褐色砂、2層は暗赤褐色シルト、3層は黒褐色粘土質シルト、4層は黄褐色砂及び粘土である。SD—1溝跡を切る。

〈出土遺物〉　土師器坏・甕、須恵器の破片等である。

SE－9井戸跡　調査Ⅱ区の南半で検出され、掘り方平面形はほぼ円形で、直径200cm程である。深さは100cm程で上端より徐々にすぼまり、深さ50cmの所で緩やかな段を有し、直径130～140cmの方形の素掘りである。堆積土は大別して5層に分けられ、1層は黒褐色シルト及び砂質シルト、2層は黒褐色シルト及び粘土質シルト、3層は黒色粘土及び粘土質シルト、4層は黒色粘土質シルト及びシルト質粘土、5層は黒褐色砂質粘土である。SD—19、30溝跡を切る。

〈出土遺物〉　土師器坏・高台付坏、須恵器甕片、炭化物、木片、粘土塊等である。



Ⅰ区　SE－8

層No.	土色	土性	その他
1	10YR2/2 黒褐色	砂	小石を含む
2	10YR4/4 にぶい黄褐色	砂	多量の小石を含む
3	2.5Y5/3 にぶい黄色	シルト	酸化鉄を含む
4	5YR5/8 明赤褐色	シルト	酸化鉄を含む
5	5YR5/1 褐灰色	粘土	
6	7.5YR2/1 黒色	粘土	酸化鉄を含む
7	2.5Y5/3 にぶい黄色	シルト質粘土	少量の砂を含む
8	7.5YR4/1 褐灰色	粘土	少量の砂を含む
9	2.5Y5/4 黄褐色	砂	多量の小石含む
10	7.5YR3/1 黒色	粘土	小れきと小粒の荒い砂を多量含む

Ⅱ区　SE－9

層	土色	土性	その他
1a	10YR3/2 黒褐色	シルト	酸化鉄とすみを少量含む
1b	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	酸化鉄を帯状に多量に含む
3a	7.5YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
3b	10YR1/1 黒色	粘土質シルト	酸化鉄と炭を少量含む
4	10YR1/1 黒色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む
5b	5YR1/1 黒色	粘土	酸化鉄と木片を少量含む
6	7.5YR2/1 黒色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含み木片も少量含む
7	5YR1/1 黒色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含み木片をブロック状に多く含む
8	2.5YR3/1 黒褐色	砂質粘土	酸化鉄を少量含み木片も少量含む

Ⅱ区　SE－10

層No.	土色	土性	その他
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	
2	10YR3/1 黒色	シルト	土師器片含む
3	7.5YR3/1 黒褐色	シルト	
4	5YR5/6 灰オリーブ色	砂	
5	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	
6	10YR3/1 黒褐色	シルト	
7	7.5YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
8	5YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	
9	10YR3/1 黒褐色	シルト	
10	10YR5/1 黒褐色	砂質シルト	

第21図　SE 8～20井戸跡平面図・断面図

ＳＥ－10井戸跡　調査Ⅱ区の北半で一部検出され、調査区外に延びるものである。掘り方平面形はほぼ円形で、直径240cm程である。深さは60cm程である。堆積土は大別して３層に分けられ、１層は黒褐色及び黒色シルト、２層は黒褐色砂質シルト、３層は灰オリーブ色砂である。

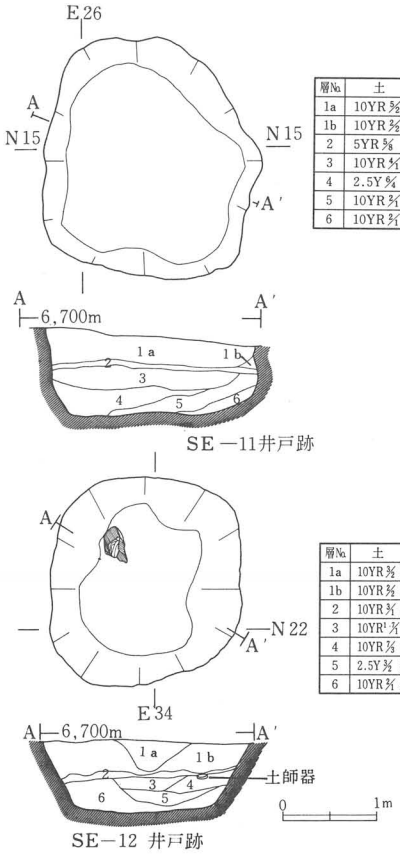
〈出土遺物〉　土師器坏・高台付坏・甕、赤焼土器皿(第23図５)、平瓦、丸瓦(第24図６)等である。

ＳＥ－11井戸跡　調査Ⅱ区の東半で検出され、掘り方は平面形は不整楕円形で、直径は200～240cm程である。深さは60～100cm程で、断面形は逆台形を呈し、深さより上端幅の方が大きい。堆積土は大別して５層に分けられ、１層は灰黄褐色砂質シルト、２層は明赤褐色シルト質砂、３層は褐色粘土、４層はにぶい黄色砂、５層は黒色粘土である。SB－５掘立柱建物跡、SD－14溝跡、SK－７土壙を切っている。

〈出土遺物〉　土師器坏・甕片、丸瓦(第24図５)、中世陶器片、炭化物、粘土塊等である。

ＳＥ－12井戸跡　調査Ⅱ区の北半で検出され、掘り方平面形は楕円形で、直径200～210cmである。深さは70～90cm程で、断面形は逆台形を呈し、深さより上端幅の方が大きい。堆積土は大別して５層に分けられ、１層は黒褐色シルト、２層は黒色シルト質粘土、３層はにぶい黄橙色粘土、４層は黒褐色シルト質砂、５層は黒色シルト質砂である。ＳＤ－12、14溝跡を切っている。

〈出土遺物〉　土師器坏・高台付坏・甕(第23図２)、赤焼土器坏、木片等である。



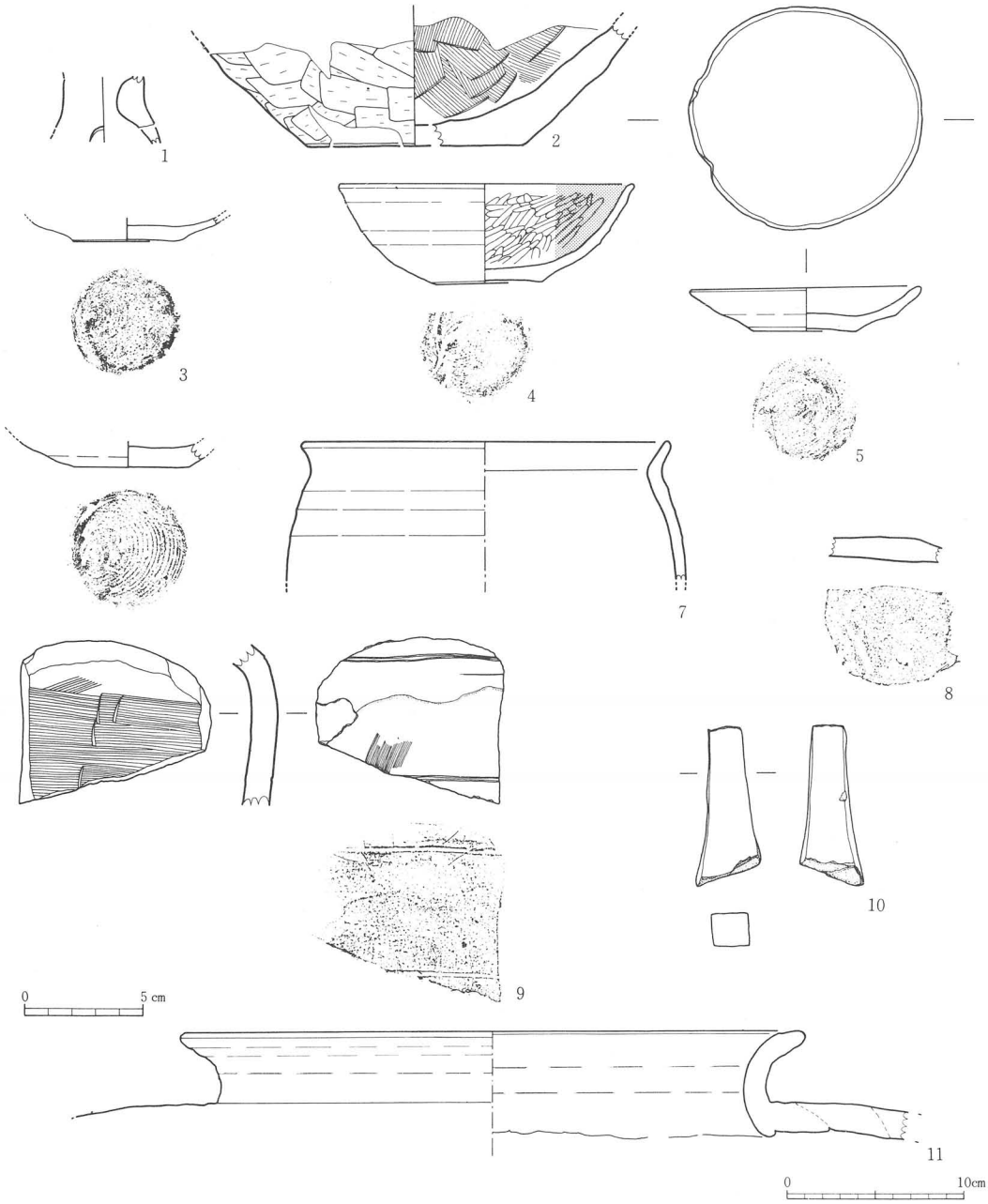
Ⅱ区ＳＥ－11

層No.	土色	土性	その他
1a	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
1b	10YR5/2 黒褐色	粘土	酸化鉄を含む
2	5YR5/8 明赤褐色	シルト質砂	酸化鉄を多量に含む
3	10YR4/4 褐灰色	粘土	
4	2.5Y6/4 にぶい黄色	砂	
5	10YR3/1 黒色	粘土	
6	10YR3/1 黒色	粘土	砂を含む

Ⅱ区ＳＥ－12

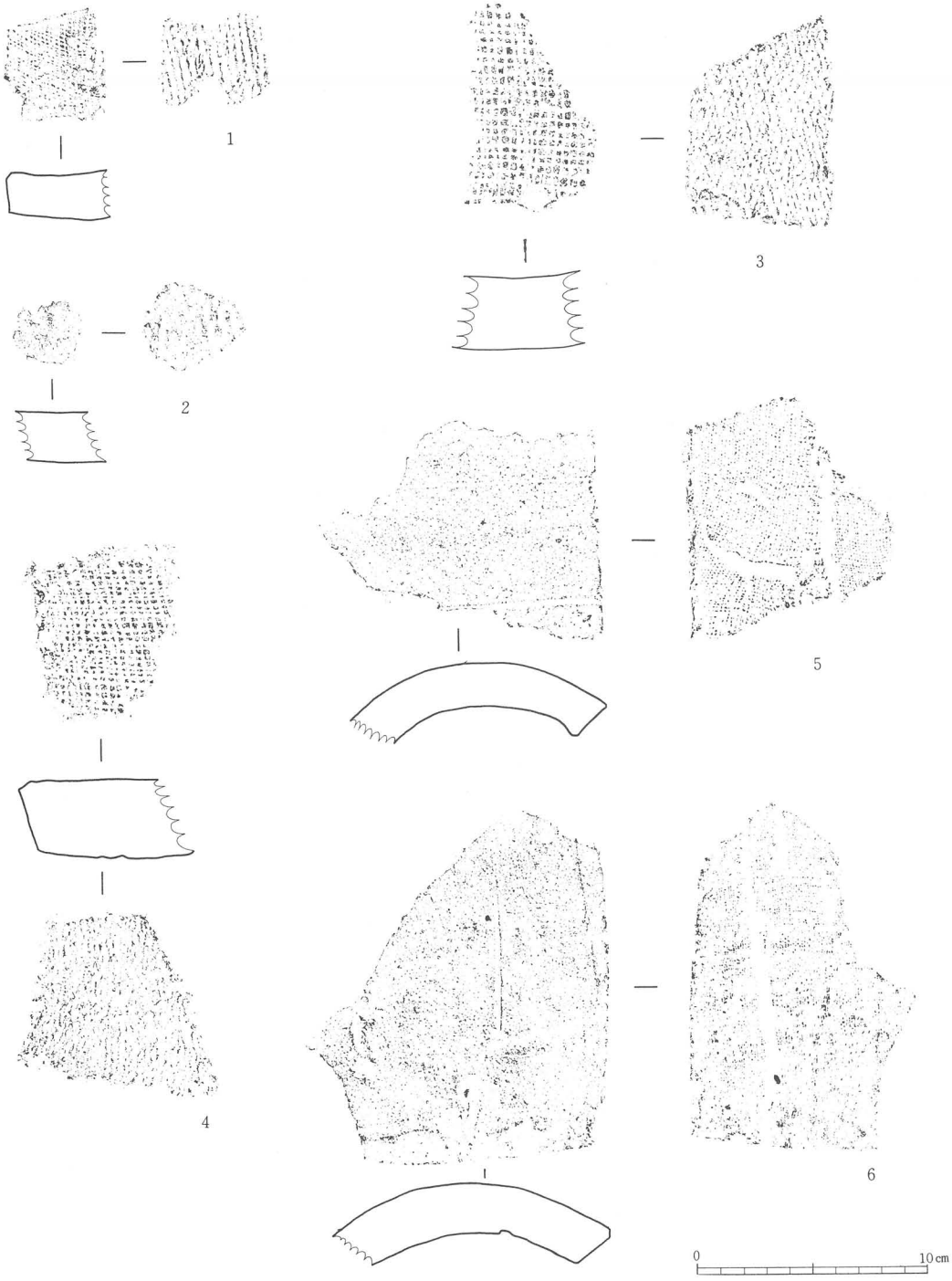
層No.	土色	土性	その他
1a	10YR3/2 黒褐色	シルト	酸化鉄・炭を少量・遺物も含む
1b	10YR3/2 黒褐色	シルト	酸化鉄・炭を少量含む
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	酸化鉄・炭及び土師器を含む
3	10YR1/1 黒色	シルト質粘土	酸化鉄・炭を少量含み土師器片含む
4	10YR7/3 にぶい黄橙色	粘土質砂	炭を少量・酸化鉄・土師器を含む
5	2.5Y3/2 黒褐色	シルト質砂	炭・酸化鉄を少量含む
6	10YR3/1 黒色	シルト質砂	酸化鉄・炭を少量含む

第22図　11・12井戸跡平面図・断面図



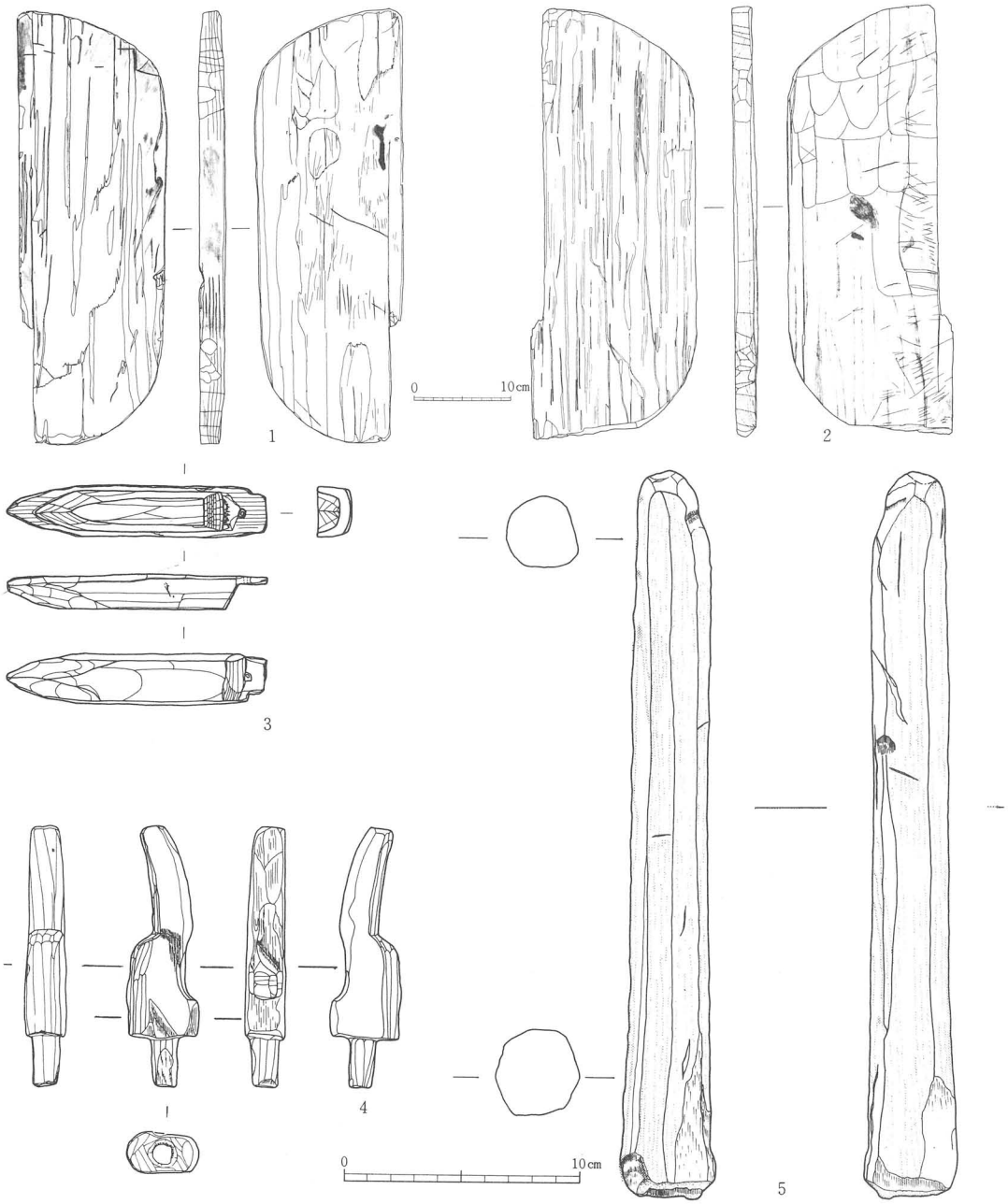
番号	登録No.	種別	器形	遺構名	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	C－76	土師器	高坏	SE－1	堆 3										¼	——
2	C－14	土師器	甕	SE－12	堆 1			ヘラケズリ			ヘラナデ			9.0	⅓	——
3	D－69	土師器	坏	SE－5	堆 土									4.4	⅓	——
4	D－52	土師器	坏	SE－1	底面上	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.2	12.1	4.4	½	37－2
5	D－53	赤焼土器	皿	SE－8	堆 土	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ				1.8	9.6	4.3	完形品	38－8
6	D－70	土師器	坏	SE－8	堆 土									4.8	⅓	——
7	D－1	土師器	甕	SE－8	堆 土	ロクロナデ	ロクロナデ						15.6		½	——
8	E－4	須恵器	坏	SE－2	堆										⅛	——
9	J－1	中世陶器	壺(三筋壺)	SE－2	堆 2		ヨコナデ 一部ナデ			あらいナデ					⅛	42－4a・b
10	K－1	石製品	砥石	SE－2	堆 土										——	43－3 a
11	J－2	中世陶器	大甕	SE－4	堆 土	ロクロナデ			ロクロナデ				34.0		⅙	41－2

第23図　SE井戸跡出土遺物実測図（1）



番号	登録No.	種別	器形	遺構名	層位	外面調整			内面調整			法量	残存	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器厚		
1	G－4	平瓦		SE－1	堆3		ヌノメ			ナワメ		1.8～2.1	——	——
2	G－1	平瓦		SE－3	堆3～堆4		スリ消			タタキメ		2.1～2.2	——	——
3	G－5	平瓦		SE－1	堆土		ヌノメ			タタキメ		2.6～3.5	——	——
4	G－3	平瓦		SE－1	堆1		ヌノメ			タタキメ		3.3～3.8	——	——
5	F－2	丸瓦		SE－11	堆土		スリ消			ヌノメ		1.7～2.1	——	——
6	F－1	丸瓦		SE－10	堆土		スリ消			ヌノメ		2.0～2.5	——	——

第24図　SE井戸跡出土遺物実測図（2）



番号	登録No.	種別	遺構名	層位	法量			残存	写真図版
					幅	長さ	厚さ		
1	L－4①	木製品	SE－6	最下層	17.1	44.9	2.4	½	44－2
2	L－4②	木製品	SE－6	最下層	15.1	45.0	2.7	½	44－3
3	L－2	木製品	SE－4	最下層	2.2	10.9	0.3	完形品	44－5a・b
4	L－5	木製品	SE－6	最下層	3.0	11.1	1.8	完形品	44－4a・b
5	L－7	木製品	SE－9	最下層	4.0	31.3	3.7	完形品	44－1

第25図　SE井戸跡出土木製品実測図

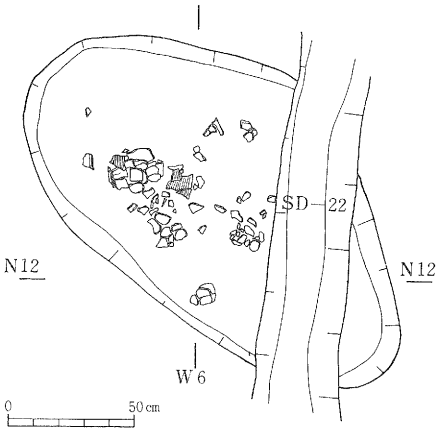
5．土　　壙

調査Ⅰ、Ⅱ区から計14基の土壙が検出された。

ＳＫ－１土壙　欠番

ＳＫ－２土壙　調査Ⅰ区南半で検出され、平面形は不整楕円形で、長軸180cm、短軸100cm程、深さは５～10cm程である。堆積土は暗褐色シルトである。SD—22溝跡に切られる。

〈出土遺物〉　土師器甕の細片が多量に出土している（第38図８）。



第26図　ＳＫ－２　土壙遺物出土状況平面図

ＳＫ－３土壙　SD—１溝跡に切られ、全形は不明である。残存長軸110cm以上、深さは20cm以上である。堆積土は灰黄褐色シルトである。

ＳＫ－４土壙　欠番

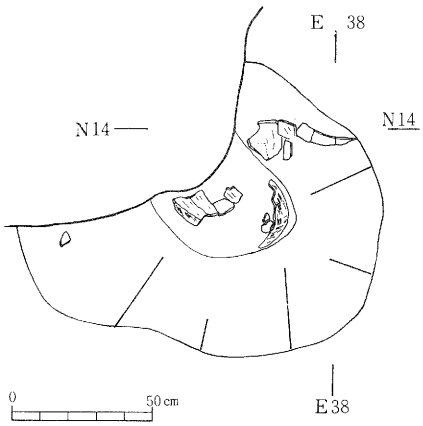
ＳＫ－５土壙　調査Ⅰ区南半で検出され、平面形はほぼ円形で、直径200cm程、深さは60cm程である。断面形は逆円錐形状を呈している。堆積土は２層に分けられ、１層は褐灰色粘土、２層は灰黄褐色シルト質粘土である。遺構確認面では他の井戸跡とほぼ同一の掘り方平面形を呈していたが、深さ、断面形等を観察すると、壁面の立ち上がりが緩やかで井戸として機能していた痕跡は認められない。SD—21溝跡を切っている。

〈出土遺物〉　土師器片を出土している。

ＳＫ－６土壙　Ⅵ６(2)を参照

ＳＫ－７土壙　調査Ⅱ区の東半で検出され、平面形は楕円形で、長軸120cm以上、短軸100cm程、深さは50～60cm程である。断面形はU字形である。SE—11井戸跡、SD—14溝跡に切られている。

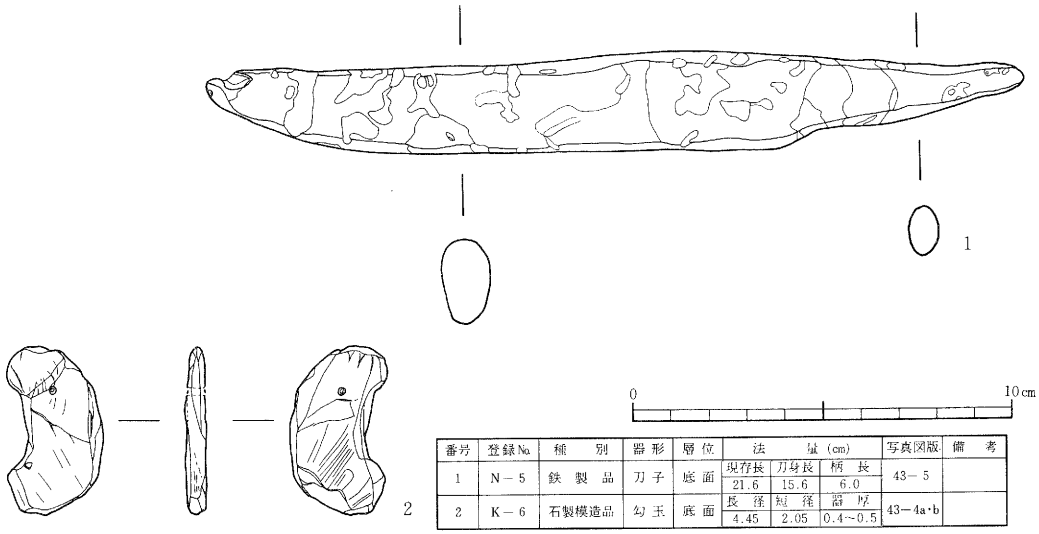
〈出土遺物〉　土師器、木片、粘土塊である。土師器はいずれも製作に際しロクロを使用しないものである。高坏、脚部片で円錐台状にひらき、孔を有するもの（第30図２）、甕、頸部から口縁部に「く」の字状にひらくもの（第30図３、４）、平底の底部で籾痕のあるもの（第30図１）である。



第27図　ＳＫ－７土壙遺物出土状況平面図

ＳＫ－８土壙　調査Ⅱ区東半で検出され、平面形は円形で、深さは10cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は大別して２層に分けられ、１層は黒褐色シルト及び粘土質シルト、２層は灰黄褐色シルトである。SB—４掘立柱建物跡を切っている。

〈出土遺物〉　土師器の小破片のみである。



番号	登録No.	種　別	器形	層位	法　量（cm）			写真図版	備　考
					現存長	刀身長	柄　長		
1	N－5	鉄製品	刀子	底面	21.6	15.6	6.0	43－5	
					長　径	短　径	器　厚		
2	K－6	石製模造品	勾玉	底面	4.45	2.05	0.4～0.5	43－4a・b	

第28図　SK－6　土壙出土遺物実測図

SK－9土壙　欠番

SK－10土壙　欠番

SK－11土壙　調査Ⅱ区の北半で検出され、平面形は円形で直径90cm程、深さは15cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は3層に分けられ、1層は褐灰色シルト、2層はにぶい黄褐色シルト、3層は黒褐色シルトである。SD—16溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　土師器片1点のみである。

SK－12土壙　調査Ⅱ区の南半で検出され、調査区外に延びる為平面形等については不明で、深さは10cm程である。堆積土は灰黄褐色及びにぶい黄褐色砂質シルトである。

〈出土遺物〉　土師器甕体部片のみである。

SK－13土壙　調査Ⅱ区のほぼ中央で検出され、平面形は円形で、直径90～100cm程、深さは90cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は大別して2層に分けられ、1層は黒褐色シルト、2層は黒褐色粘土質シルト及びシルト質粘土である。SD—12溝跡に切られている。

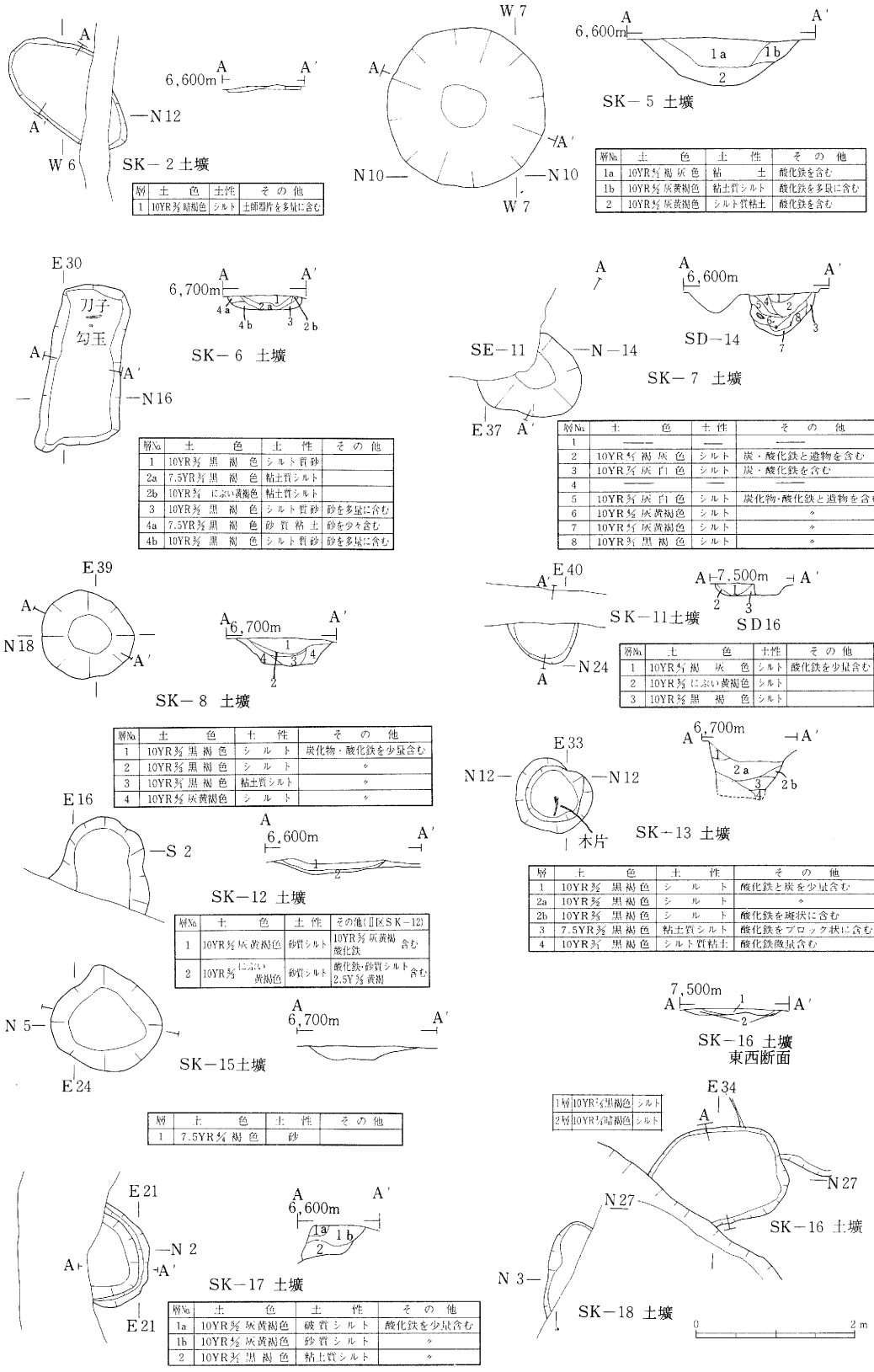
〈出土遺物〉　土師器甕片、須恵器片のみである。

SK－14土壙　調査Ⅱ区の北半で検出され、平面形は不明で、深さは80cm程である。断面形はほぼV字形である。堆積土は3層に分けられ、1層は黒褐色粘土質シルト、2層は黒色粘土、3層は緑灰色砂である。SE—1井戸跡を切っている。

〈出土遺物〉　土師器坏片、須恵器坏、甕片、平瓦片（第40図5）等である。

SK－15土壙　調査Ⅱ区の南半で検出され、平面形は不整楕円形で、直径60～70cm程で、深さは25～30cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は褐色砂である。

SK－16土壙　調査Ⅱ区の北半で検出され、平面形は方形である。長軸は140cm以上、短軸



層	土　色	土性	その他
1	10YR 3/4 暗褐色	シルト	土師器片を多量に含む

層No.	土　色	土　性	その他
1a	10YR 4/4 褐 灰 色	粘　土	酸化鉄を含む
1b	10YR 4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む
2	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む

層No.	土　色	土　性	その他
1	10YR 3/2 黒 褐 色	シルト質砂	
2a	7.5YR 3/1 黒 褐 色	粘土質シルト	
2b	10YR 3/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
3	10YR 3/2 黒 褐 色	シルト質砂	砂を多量に含む
4a	7.5YR 3/2 黒 褐 色	砂 質 粘 土	砂を少々含む
4b	10YR 3/2 黒 褐 色	シルト質砂	砂を多量に含む

層No.	土　色	土　性	その他
1	――	――	――
2	10YR 4/4 褐 灰 色	シルト	炭・酸化鉄と遺物を含む
3	10YR 7/1 灰 白 色	シルト	炭・酸化鉄を含む
4	――	――	――
5	10YR 7/1 灰 白 色	シルト	炭化物・酸化鉄と遺物を含む
6	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	〃
7	10YR 4/1 灰黄褐色	シルト	〃
8	10YR 3/1 黒 褐 色	シルト	〃

層No.	土　色	土　性	その他
1	10YR 3/2 黒 褐 色	シ ル ト	炭化物・酸化鉄を少量含む
2	10YR 3/2 黒 褐 色	シ ル ト	〃
3	10YR 3/1 黒 褐 色	粘土質シルト	〃
4	10YR 4/2 灰黄褐色	シ ル ト	〃

層No.	土　色	土性	その他
1	10YR 4/1 褐 灰 色	シルト	酸化鉄を少量含む
2	10YR 3/4 にぶい黄褐色	シルト	
3	10YR 3/2 黒 褐 色	シルト	

層No.	土　色	土性	その他(Ⅱ区SK－12)
1	10YR 4/2 灰黄褐色	砂質シルト	10YR 3/1 灰黄褐 含む 酸化鉄
2	10YR 5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄・砂質シルト 含む 2.5Y 5/3 黄褐

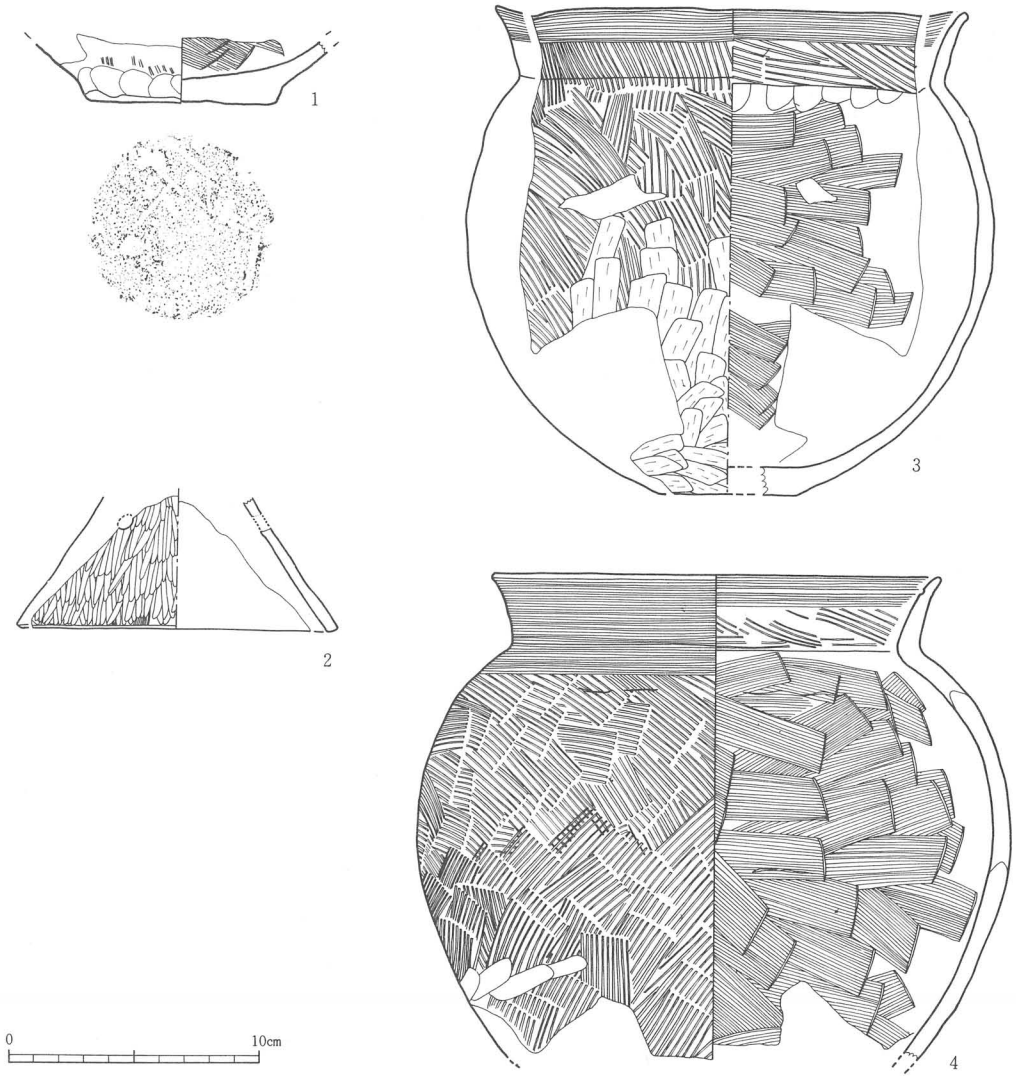
層	土　色	土　性	その他
1	10YR 3/2 黒 褐 色	シ ル ト	酸化鉄と炭を少量含む
2a	10YR 3/2 黒 褐 色	シ ル ト	〃
2b	10YR 3/2 黒 褐 色	シ ル ト	酸化鉄を斑状に含む
3	7.5YR 3/2 黒 褐 色	粘土質シルト	酸化鉄をブロック状に含む
4	10YR 3/1 黒 褐 色	シルト質粘土	酸化鉄微量含む

層	土　色	土　性	その他
1	7.5YR 5/4 褐 色	砂	

1層	10YR 3/3 黒褐色	シルト
2層	10YR 3/3 暗褐色	シルト

層No.	土　色	土　性	その他
1a	10YR 5/2 灰黄褐色	破 質 シ ル ト	酸化鉄を少量含む
1b	10YR 5/2 灰黄褐色	砂 質 シ ル ト	〃
2	10YR 3/1 黒 褐 色	粘土質シルト	〃

第29図　土壙平面図・断面図



番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	C−145	土師器	甕	堆 5		ハケメ→ナデ	モミ痕有り		ヘラナデ	ヘラナデ			7.5		41−2a・b
2	C− 70	土師器	高坏	堆 6			脚部			脚部			12.8		——
3	C− 16	土師器	甕	堆 6	ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ケズリ	ヘラミガキ	ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	19.4	18.7	5.4	1/6	40−5
4	C− 17	土師器	甕	堆7～8	ヨコナデ	ハケメ		ハケメ→ヨコナデ	ヘラナデ			17.8			40−4

第30図　SK－7土壙出土遺物実測図

は120cm程、深さは5cm程である。堆積土は3層に分けられ、1層は黒褐色シルト、2層は明褐色シルト、3層はにぶい黄褐色シルトである。SX—2性格不明遺構を切り、SD—10溝跡に切られている。

〈出土遺物〉　土師器坏、壺、甕片等である。

SK－17土壙　調査Ⅱ区の南半で検出され、SD—11溝跡に切られている為平面形は不明である。深さは40cm程である。堆積土は2層に分けられ、1層は灰黄褐色砂質シルト、2層は黒

褐色粘土質シルトである。SD—11溝跡に切られている。また、ピット127とSK—17が同遺構の可能性もある。

ＳＫ－18土壙　調査Ⅱ区の東半で検出され、調査区外に延びる為平面形等については不明である。深さは20～25cm程である。堆積土は５層に分けられ、１層はにぶい黄褐色砂質シルト、２層は暗灰黄色シルト質砂、３層は灰黄褐色砂、４層は褐灰色粘土質シルト、５層は暗褐色砂である。

６．その他

(1)　**ＳＸ－１性格不明遺構**　調査Ⅱ区南側で検出され、東西540cm、南北240cmを中心に黒褐色砂質シルトが堆積し、土師器片が多数含まれる。とくに東側に集中している。堆積土は大別して２層に分けられ、１層は黒褐色砂質シルト、２層はにぶい黄褐色及び褐色砂である。大半の遺物は１層からの出土である。堆積土の厚さは地山上面から10～25cm程である。ＳＤ—12溝跡に切られている。またSX—１性格不明遺構堆積土を除去したのち、SI—１竪穴住居跡、Ｐ—４、５、６を検出した。

〈出土遺物〉　縄文土器、土師器、瓦片でいずれも破片である。

縄文土器　体部に単節ＬＲ縄文の施された小破片である（第32図１）。

土師器　いずれも製作に際しロクロを使用しないものである。図化できたものはわずかである。

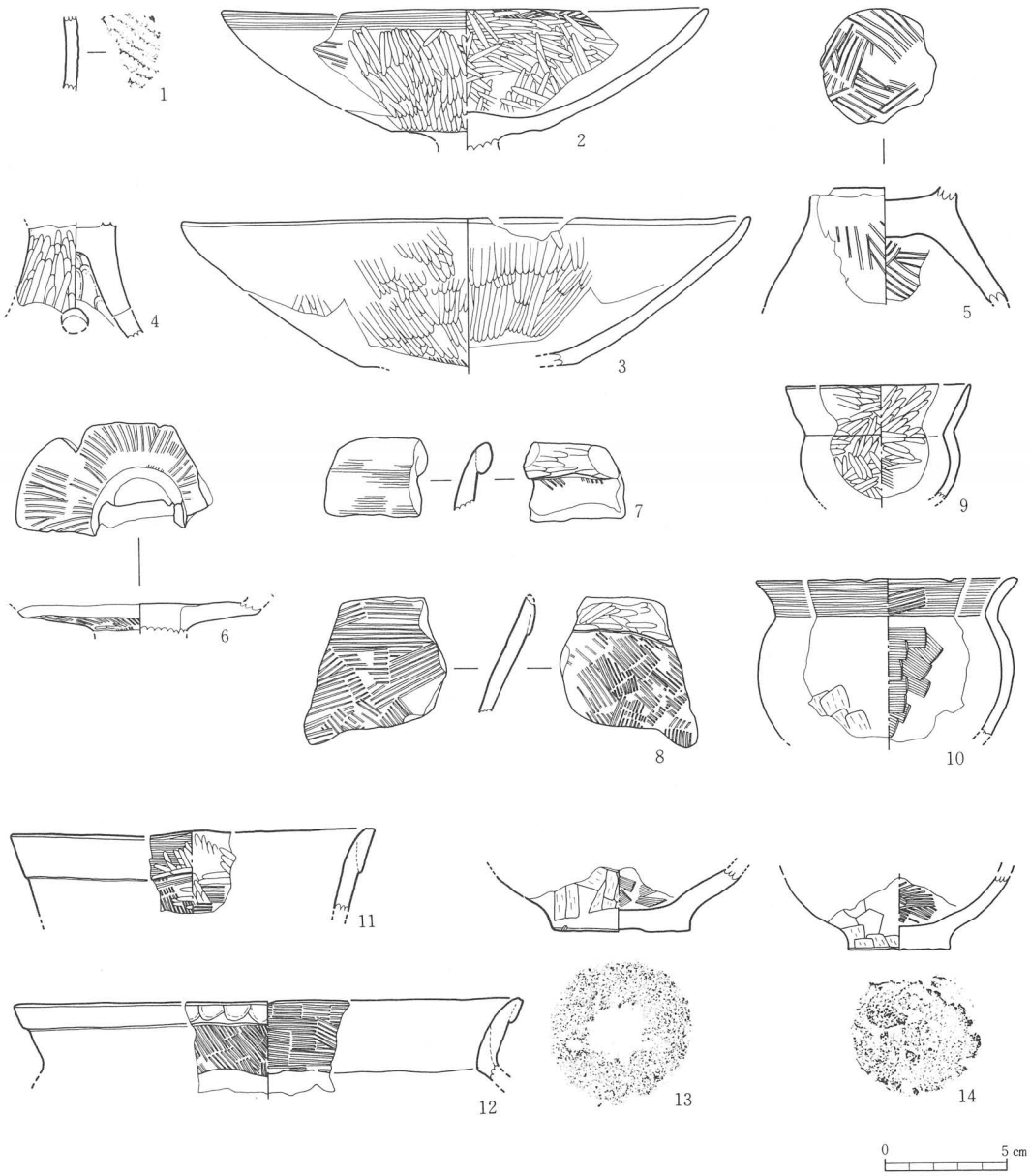
坏　体部が丸味を持って立ち上り、頸部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（第32図９）、頸部から口縁部にかけて緩く外反するもの(第32図10)などがある。

高坏　体部から口縁部まで直線的に外傾するもの(第32図２、３)、坏部底面にハケメの入るもの(第32図６)、脚部で孔を有するもの(第33図４)などがある。

壺　複合口縁を有するもの(第32図７、11、第33図１)がある。

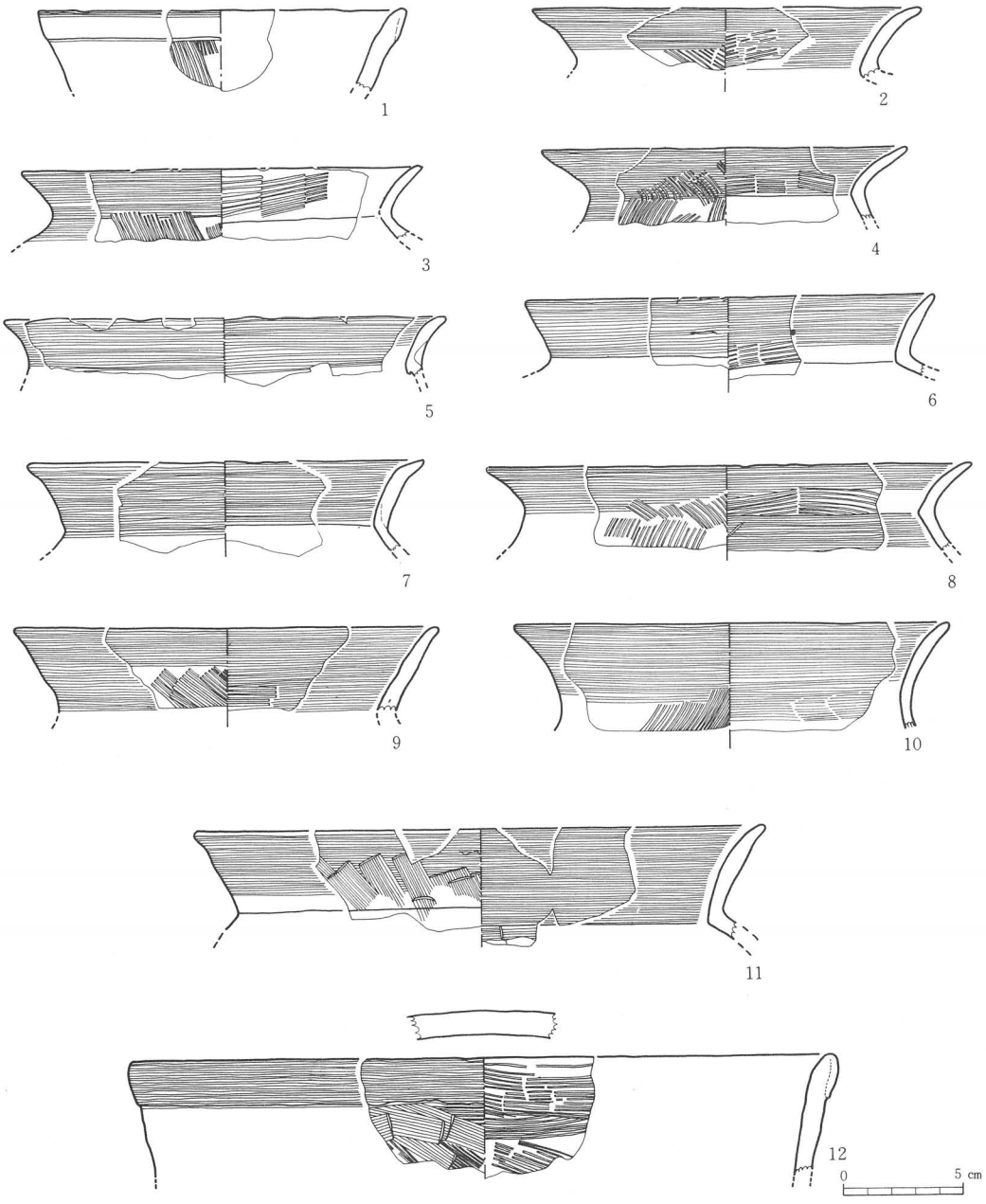
甕　複合口縁を有するもの(第32図12)と単純口縁で頸部から「く」の字状に屈曲するもの

第31図　ＳＸ－１　性格不明遺構遺物出土状況平面図



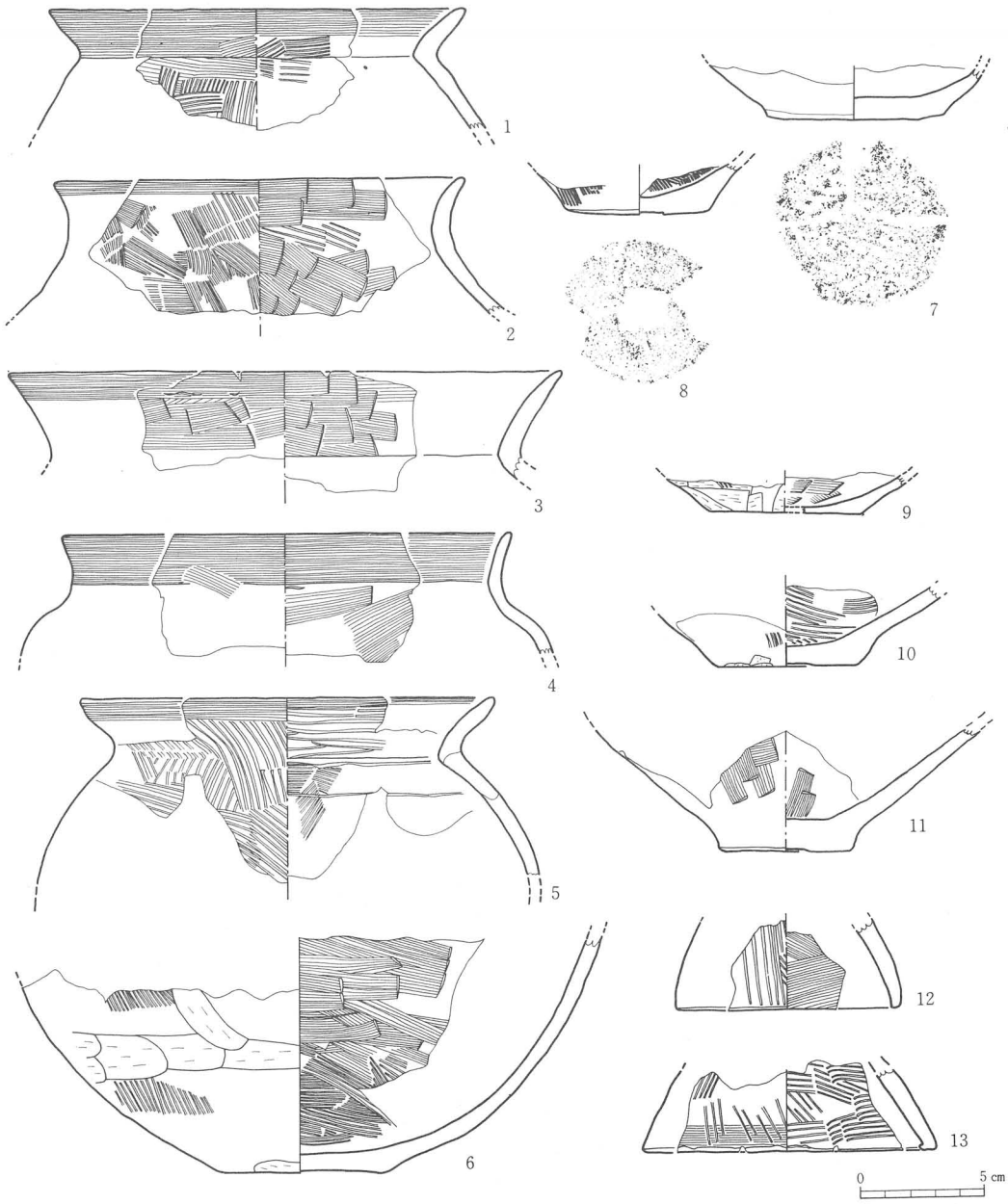
番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	A－5	縄文土器		堆 1		単節LR								1/6	
2	C－105	土師器	高坏	堆 1	ヨコナデ	ハケメ→ミガキ	ケズリ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ		19.7		1/6	
3	C－106	土師器	高坏	堆 1		ヘラミガキ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		23.2		1/5	39－2
4	C－79	土師器	高坏	堆 1		ミガキ			ナデツケ					1/2	
5	C－77	土師器	台付甕	堆 1		ハケメ			ハケメ					1/4	39－9
6	C－104	土師器	高坏	堆 1		ハケメ			ミガキ					1/2	39－3a・b
7	C－126	土師器	壺	堆 1	ヨコナデ			ミガキ	ハケメ						39－8a
8	C－125	土師器	壺	遺構検出面	ハケメ	ハケメ		ミガキ	ハケメ						
9	C－140	土師器	坏	遺構検出面	ミガキ	ミガキ		ミガキ	ヘラナデ→ミガキ			7.5		1/8	39－1c
10	C－109	土師器	坏	堆 1	ヨコナデ			ヨコナデ→ハケメ	ヘラナデ			10.6		1/6	39－1a
11	C－138	土師器	壺	遺構検出面	ナデ→ミガキ	ハケメ→ミガキ		ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ			14.8		1/12	
12	C－137	土師器	甕	堆 1	ナ デ	ハケメ		ハケメ				20.4		1/12	39－8b
13	C－132	土師器	壺	堆 1			ヘラケズリ			ヘラナデ			5.8		41－1a・b
14	C－80	土師器	壺	堆 1			ナデ→ケズリ			ハケメ			4.2	1/6	

第32図　ＳＸ－１出土遺物実測図（１）



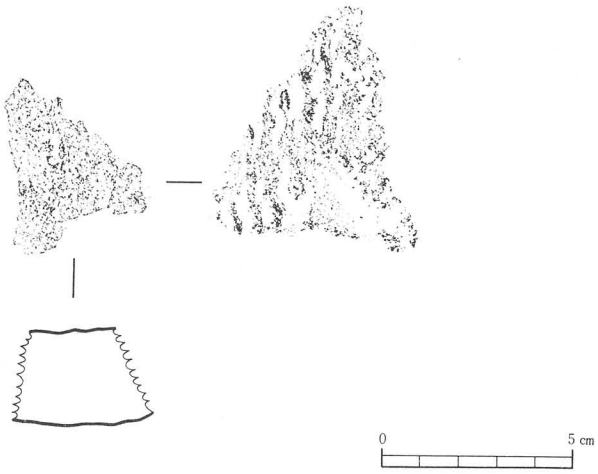
番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	C−123	土師器	壺	堆 1	ヨコナデ	ハケメ						15.7			
2	C−94	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ	ハケメ		ハケメ→ヨコナデ	ハケメ→ヨコナデ			16.2			
3	C−133	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ→ハケメ	ヨコナデ→ハケメ		ヨコナデ→ハケメ	ヨコナデ→ハケメ			16.7			
4	C−135	土師器	甕	遺構検出面	ヨコナデ→ハケメ	ヨコナデ→ハケメ		ヨコナデ→ハケメ	ヘラケズリ			15.3			
5	C−90	土師器	甕	堆 1	ハケメ→ヨコナデ			ヨコナデ				18.4			
6	C−93	土師器	甕	堆 1	ナデ→ヨコナデ			ハケメ→ヨコナデ				17.8			
7	C−136	土師器	甕	遺構検出面	ヨコナデ			ヨコナデ				16.4			
8	C−92	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ→ハケメ			ヨコナデ→ハケメ				22.0			
9	C−118	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ→ハケメ			ヨコナデ→ハケメ				17.7			
10	C−89	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ			18.1			
11	C−91	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ→ヘラナデ			ヨコナデ	ヘラナデ			23.4			
12	C−110	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ	ハケメ→ヘラナデ		ハケメ	ハケメ			29.3			

第33図　SX−1出土遺物実測図（2）



番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	C－84	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ→ハケメ			ヨコナデ→ハケメ				17.6			
2	C－85	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ→ハケメ			ハケメ→ヨコナデ				19.7			
3	C－116	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ			ヘラナデ				22.6			
4	C－20	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ			ヨコナデ				18.4			
5	C－143	土師器	甕	堆 1	ヨコナデ→ハケメ	ハケメ		ヨコナデ→ハケメ	ハケメ			17.0			40－6
6	C－19	土師器	甕	堆 1		ハケメ→ヘラケズリ			ヘラナデ→ハケメ				6.45	1/3	40－2
7	C－98	土師器	甕	堆 1									7.2		
8	C－97	土師器	甕	堆 1			ハケメ→ナデ			ハケメ			6.0		
9	C－100	土師器	甕	堆 1			ハケメ→ヘラケズリ			ヘラナデ			6.2		
10	C－99	土師器	甕	堆 1						ハケメ			5.9		
11	C－82	土師器	甕	遺構検出面			ヘラナデ			ヘラナデ			5.3		
12	C－107	土師器	台付甕	堆 1			ハケメ			ヘラナデ			9.2		
13	C－83	土師器	台付甕	堆 1			ハケメ→ヨコナデ			ハケメ			11.8		

第34図　SX－1出土遺物実測図（3）



番号	登録No	種別	層　位	調　整		器　厚	写真図版	備　考
				表	裏			
1	G－9	平瓦	遺構検出面	スリ消シ	タタキメ	2.4～2.6	—	

第35図　SX－1出土遺物実測図(4)

(第33図2、3、4、6、9、11、第34図1、3、5)や単純口縁で頸部から緩やかに外反するもの(第33図10、第34図2、4)、平底の底部で籾痕のあるもの(第32図13、14)などがある。

台付甕　円錐台状の台部のもの(第32図5、第34図12、13)のみである。

瓦　凹面にスリ消し、凸面は縄タタキメが施されるもの(第35図)がある。

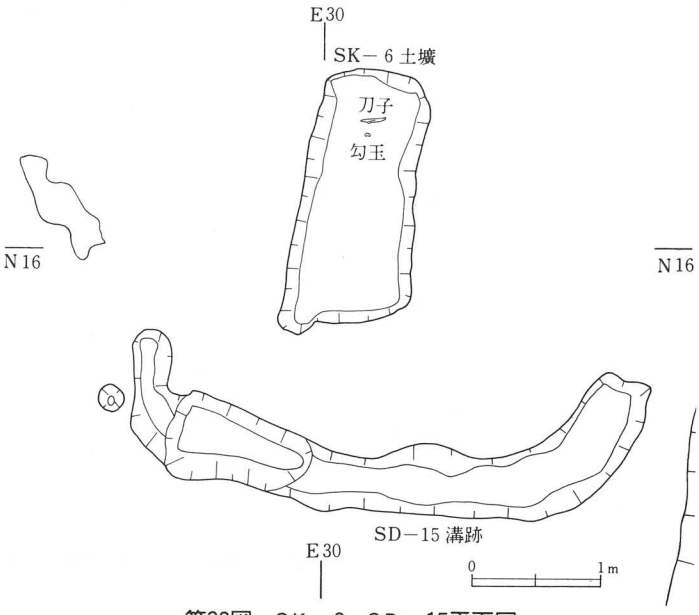
(2)　周溝墓(SK－6土壙、SD－15溝跡)

調査Ⅱ区のほぼ中央で検出され、方形の土壙(SK－6)の囲りを「コ」の字形の溝(SD－15)がめぐるものである。

SK－6土壙　土壙の平面形は長方形で、長軸は200～220cm、短軸は80～100cmで、深さは10～20cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は4層に分けられ、1層は黒褐色シルト質砂、2層は黒褐色及びにぶい黄褐色粘土質シルト、3層は黒褐色シルト質砂、4層は黒褐色粘土及びシルト質砂である。

〈出土遺物〉　堆積土中より土師器片が出土している。ハケメ調整の顕著なものがある。底面北隅より石製模造品と刀子が出土している。石製模造品(第28図2)は勾玉で小孔が穿たれている。刀子(第28図1)は錆が著しいが切先より茎尻まで残存している。

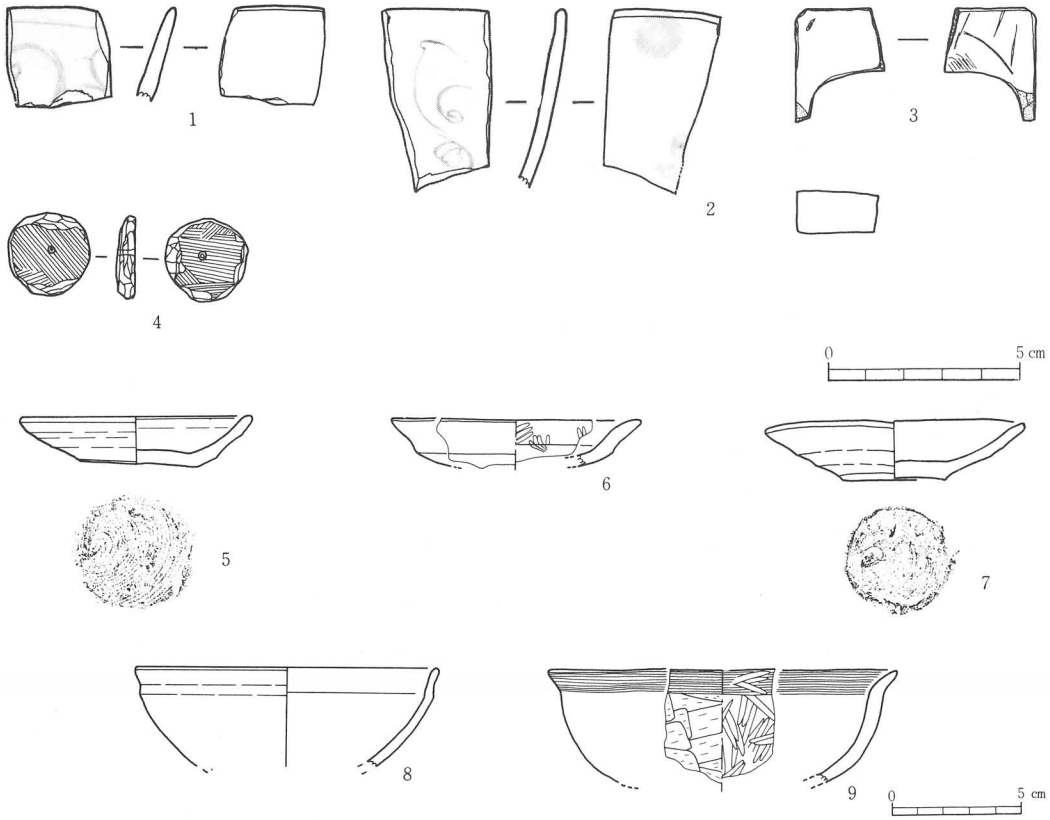
SD－15溝跡　溝跡は「コ」の字状に検出され、上端幅は30



第36図　SK－6　SD－15平面図

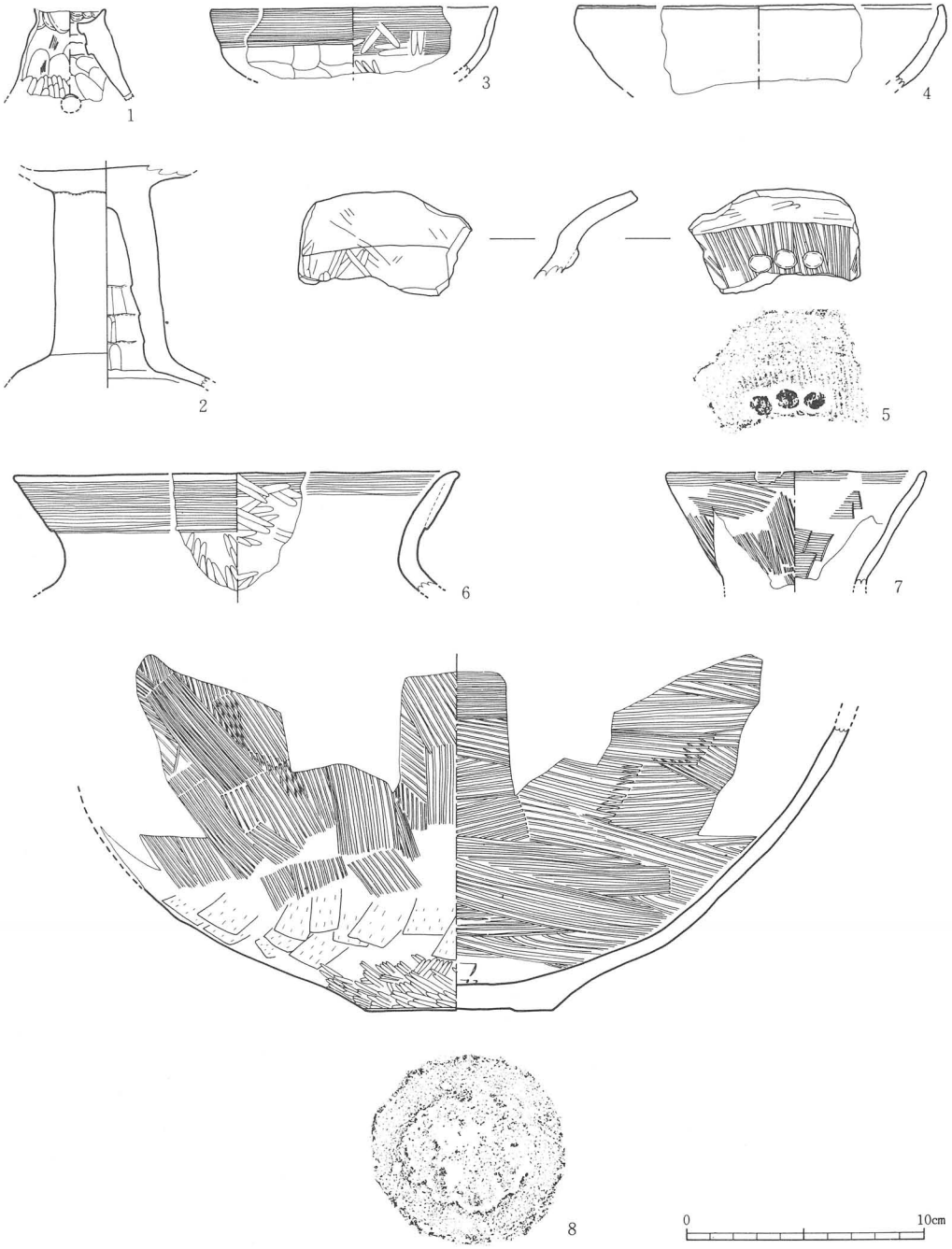
～70cm程、底幅は10～30cm程、深さは５～20cm程である。断面形はＶ字形及び逆台形である。堆積土は３層に分けられ、１層は黒褐色砂質シルト及びシルト質砂、２層は暗褐色砂、３層はにぶい黄橙色砂である。SK－６土壙西側に一部土色の変化があり、SD－15溝跡が延びていた可能性がある。

〈出土遺物〉　堆積土中より土師器片が出土し、ハケメ調整の顕著なものがある。



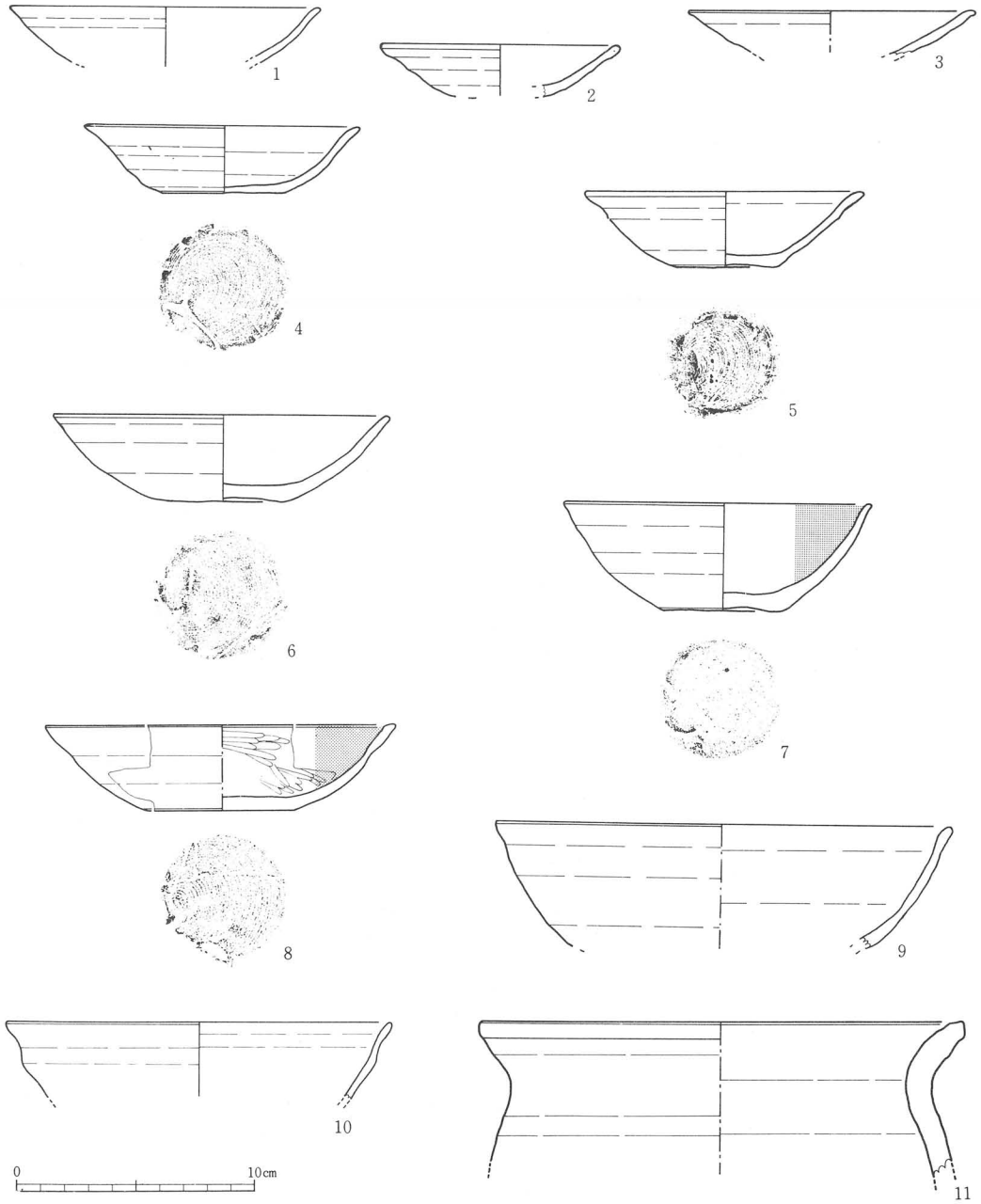
番号	登録No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	J－8	施釉陶磁器	碗	遺模検出面											42－3a・b
2	J－10	施釉陶磁器	碗	遺構検出面											42－2a・b
3	K－3	石製品	硯	遺構検出面									器厚 1.1～1.2		43－3 b
4	K－4	石製模造品	有孔円板	遺構検出面		擦痕			擦痕		長径 2.2	小孔径 0.15	器厚 0.2～0.25		43－2 b
5	D－51	赤焼土器	皿	遺構橋出面	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	1.9	9.2	4.4	完型品	38－7
6	C－68	土師器	壺	遺構検出面				ヘラミガキ				9.7			
7	D－50	赤焼土器	皿	遺構検出面	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.3	10.1	4.0		38－6
8	D－49	土師器	坏	遺構検出面	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			11.9			
9	C－10	土師器	坏	遺構検出面	ヨコナデ	ヘラケズリ		ヨコナデ↓ヘラミガキ	ヘラミガキ			13.8			

第37図　遺構検出面出土遺物実測図



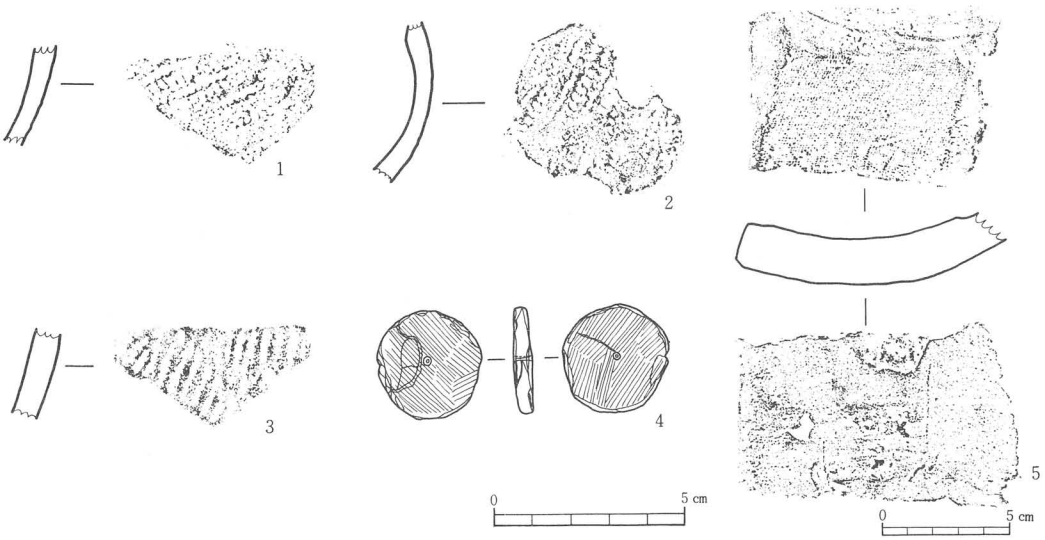
番号	登録No.	種別	器形	遺構	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	C−43	土師器	器台	SD−23	堆1		ヘラケズリ	脚部、ハケメ→ナデ、ヘラミガキ			脚部、ナデ					
2	C−75	土師器	高坏	SD−12	堆2			脚部			脚部、ナデ					39−4
3	C−11	土師器	坏	SD−12	堆1	ヨコナデ	ヘラケズリ		ヨコナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ			12.1		1/6	
4	C−12	土師器	坏	SX−2	堆1								15.5		1/7	
5	C−30	土師器	壺	SK−16	堆1	ヘラミガキ，ハケメ			ヘラミガキ							39−6
6	C−25	土師器	甕	SD−11	堆1	ヨコナデ→ハケメ			ヨコナデ→ヘラミガキ				18.9			39−8 c
7	C−18	土師器	壺	SD−12	堆2	ヨコナデ→ハケメ			ヘラナデ、ヨコナデ				11.0			39−7
8	C−1	土師器	甕	SK−2	堆1		ハケメ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラケズリ		ハケメ	ハケメ			8.0		40−3

第38図　その他各遺構出土遺物実測図（1）



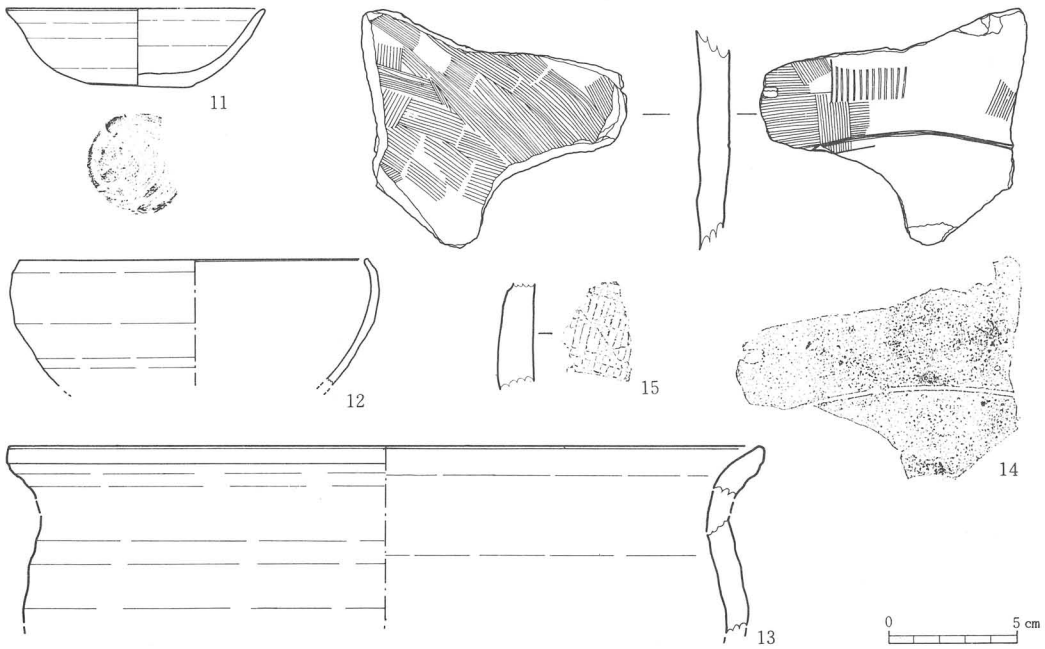
番号	登録No	種別	器形	遺構	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
1	D－68	土師器	坏	P40	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			13.0		1/6	——
2	D－59	土師器	坏	SD－17	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			9.9		1/3	——
3	D－58	土師器	坏	SD－12	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			12.2		1/6	——
4	D－46	赤焼土器	坏	P12	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.0	11.6	5.2	1/6	38－4
5	D－62	赤焼土器	坏	SD－20	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.2	11.7	4.1	5/6	38－5
6	D－63	土師器	坏	P87	堆	ロクロナデ	ロクロナデ					3.7	14.2	5.4	2/3	37－9
7	D－45	土師器	坏	P12	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ					4.6	12.7	5.0	3/4	37－4
8	D－56	土師器	坏	SD－11	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.6	14.7	6.3	1/4	——
9	D－60	赤焼土器	坏	SD－19	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			19.1		1/8	——
10	D－67	土師器	坏	P16	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			16.2		1/3	——
11	D－65	土師器	甕	P87	堆1	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			20.2		1/12	——

第39図　その他各遺構出土遺物実測図（2）



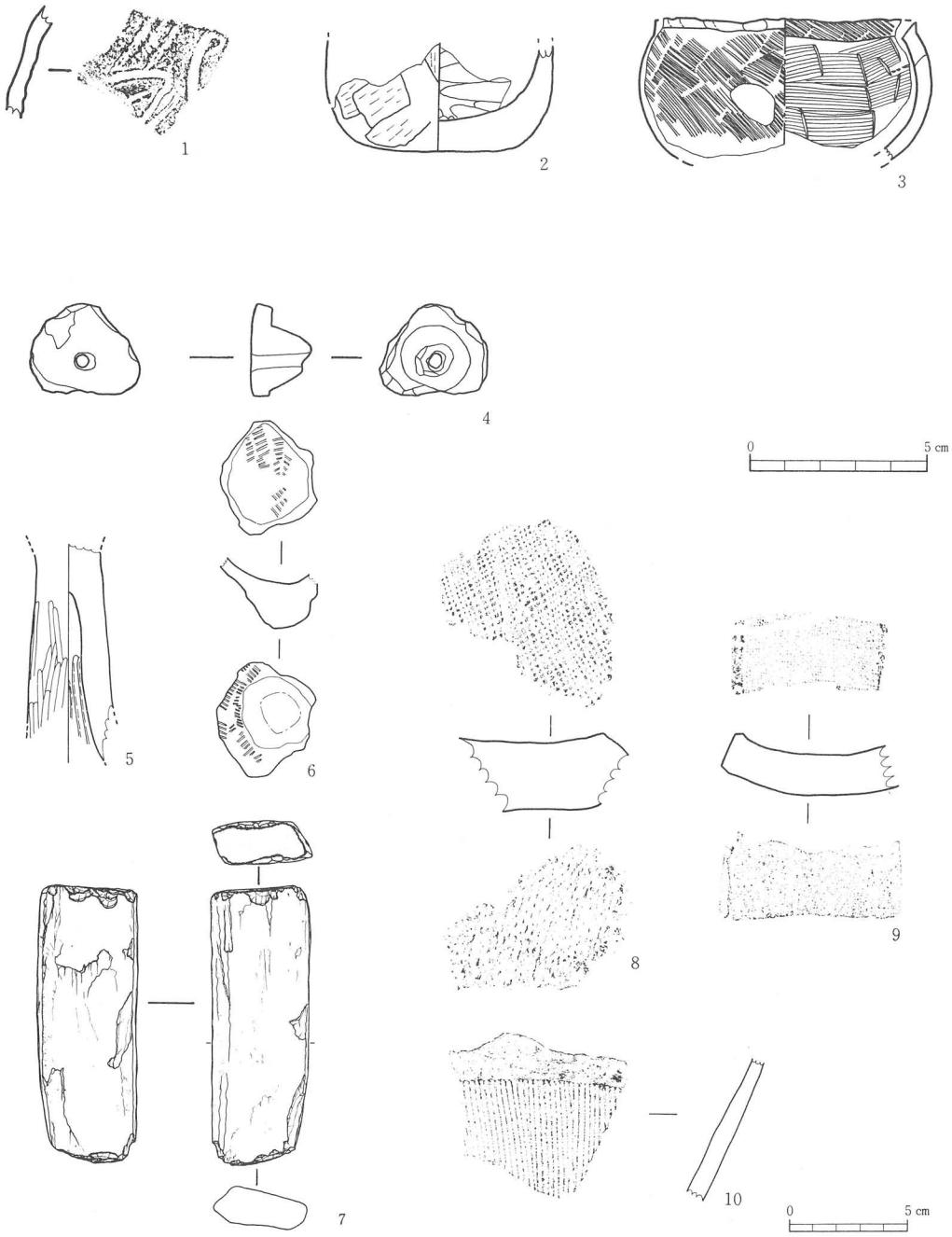
番号	登録No	種別	器形	遺構	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	器厚			
1	A－2	縄文土器		SD－10	堆1		単節LR									—
2	A－4	縄文土器		SD－19	堆1		単節LR									—
3	A－3	縄文土器		SD－12	堆1		単節LR									—
4	K－5	石製模造品	有孔円板	SD－11	堆1		擦痕			擦痕		長径 2.9	器厚 0.3 0.5	孔径 0.2		43－2 a
5	G－6	平瓦		SK－14	堆1		ヌノメ			スリ消し			1.4～7.0			—

第40図　その他各遺構出土遺物実測図（3）



番号	登録No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	写真図版
					口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径		
11	D－48	赤焼土器	坏	表土層	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.0	10.2	4.1	$\frac{1}{2}$	37－10
12	D－47	土師器	盌	表土層	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			13.8		$\frac{1}{5}$	—
13	D－66	土師器	甕	表土層	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ	ロクロナデ			29.8			—
14	J－20	陶器	壺(三筋壺)	表土層		ヨコナデ ハケメ			ナデ				厚さ 1.2 1.3		42－5 a・b
15	J－6	陶器	大甕	表土層		タタキメ			ナデ						—

第41図　耕作土中出土遺物実測図（1）



番号	登録No	種　別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量			残　存	写真図版
					口縁部	体　部	底　部	口縁部	体　部	底　部	器　高	口　径	底　径		
1	A－1	縄文土器		表土層		単節ＬＲ施文			ナ　デ						41－8
2	C－146	土 師 器		表土層		ヘラケズリ	ヘラケズリ		ヘラミガキ	ヘラミガキ			2.6	¼	
3	C－9	土 師 器	坏	表土層	オサエ	ハケメ→ナデ		ハケメ	ヘラナデ			7.4			39－1b
4	P－4	土 製 品		表土層											41－6a
5	C－57	土 師 器	高坏	表土層			脚　部 ヘラミガキ			シボリメ					39－5
6	C－45	土 師 器		表土層		ハケメ			ハケメ						41－5a・b
7	K－2	石製品(粘板岩)		表土層							長　さ 11.8	幅 4.1	厚　さ 1.0　2.0		43－1a・b
8	G－2	平　瓦		表土層		ヌノメ			タタキメ				厚　さ 2.8　3.0		
9	G－8	平　瓦		表土層		ヌノメ			ヌノメ→スリ消し				厚　さ 1.6　1.8		
10	J－12	陶　器	擂鉢	表土層		ナ　デ			筋　目				厚　さ 0.6　0.9		

第42図　耕作土中出土遺物実測図（2）

Ⅶ　遺構・遺物の検討

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡４棟、掘立柱列１列、井戸跡12基、溝跡31条、土壙13基、性格不明遺構２等である。主たる遺構、遺物について検討する。

１．遺　構

(1)　竪穴住居跡

調査区内で１軒のみ検出されたが、壁、床面、カマド等の施設が残っておらず、住居跡と認定するのに困難な面もある。しかし、検出された柱穴は、住居のプランを想定した場合、その対角線上に載るようである。柱穴の配列関係も２通り考えられるが、どちらの場合でも柱穴間の距離が200～310cmで、基本的には台形を呈する配置関係におさまる。

このような例は、仙台市中田に所在する栗遺跡の２号住居跡（昭和56年調査）等にあり、本遺跡の場合も住居跡と考えられる。住居跡の年代等については不明である。

(2)　掘立柱建物跡

調査区内より５棟分検出されている。これまで確認された掘立柱建物跡以外にも柱痕跡と思われるピットを検出していることから、さらに検討を加えれば、掘立柱建物跡は増える可能性がある。第１表で示すように各掘立柱建物跡の桁列、梁列が調査区外に延び、及び他の

第１表　掘立柱建物跡一覧表

No	棟方向　桁行×梁行 N－0－S	桁行 柱間	縦長	平均	梁行 梁間	縦長	平均	掘り方 形状
1	東西棟　2間以上 N－5°－E　×２間	南列 2.6+2.9+1.5以上 北列 2.4+3.1+　以上	7以上 8以上	2.7	西列 2.4+2.4 東列　不明	4.8	2.4	円形
2	東西棟　4間×２間 N－9°－E	南列 2.4+1.7+1.7+2.4 北列 2.2+1.8+1.5+2.4	8.2 7.9	2 2	西列 2.3+2.4 東列 2.0+(2.3)	4.7 4.3	2.4 2.2	円形
3	東西棟　2間以上 N－8°－E　×３間	南列　+4.0+ 北列　+4.3+	(5.2) (6.4)		西列 (2.1)+2.4+2.5 東列　不明	7	2.3	円形
4	東西棟　4間×２間 N－11°－E	南列 2.4+2.4+2.8+(2.8) 北列 (2.4)+(2.4)+(2.8)+2.6	10.4 10.2	2.6 2.6	西例　不明 東列 (2.6)+1.9	4.5	2.3	円形
5	一本柱列 南北　5間 N－5°－E	南より 1.4+1.4+(1.4)+(1.4) +(1.4)	7	1.4				円形

単位：m　( )は推定

遺構との重複から、全容は明らかではない。各建物跡の方向はほぼ同一で、E－5°～10°－Nの東西棟である。桁行、梁行の柱間寸法は不揃いであるが、柱穴掘り方の形状、規模はほぼ同じである。各掘立柱建物跡の重複は検出されなかった。しかし、他の遺構との重複関係、及びSB－１、２建物跡の間隔が50cmと近接し、建物の配置からも同一時期の建物跡とは考えられない。これらの掘立柱建物跡の囲りからは井戸跡、溝跡が検出され、何らかの関連を含んでおり、

持長地遺跡	１号掘立柱建物跡	桁行５間×梁行１間	13世紀後半～14世紀前半
駒馬小屋館	掘立柱建物跡	桁行５間×梁行１間	中世末
宇南遺跡	２号掘立柱建物跡	桁行５間×梁行１間	中世

特に井戸跡は同一箇所に集中して検出され、出土する遺物等から掘立柱建物跡とほぼ同時期と考えられる。SB－１建物跡の柱穴掘り方から平安時代末～鎌倉時代初期の陶器片を出土しており、また井戸跡からも三筋壺、陶器片等を出土していることから、これらの掘立柱建物跡は中世のものと思われる。SB－1は三面疵あるいは四面疵の掘立柱建物跡で、これまで県内で中世の館跡、集落跡から数例四面疵の建物跡が発見されている。本遺跡の他に、蔵王町持長地遺跡、大衡村駒馬小屋館、志波姫町宇南遺跡寺である。

中世の掘立柱建物跡は数多く発見されているが、四面疵の建物跡は類例が少ないようである。これら建物跡は、駒馬小屋館では丘陵に立地し、館跡の可能性が指摘されている宇南遺跡では、舌状台地に立地し、館跡と何らかの関連があるとされる持長地遺跡は段丘平坦地に立地している。本遺跡では沖積面の自然堤防上に立地していて、自然地形に囲まれた他の遺跡と比較して、立地条件等から建物の性格を異にしていると思われる。高清水町観音沢遺跡、秋田市下夕野遺跡は掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙が広い範囲にみられる集落跡と考えられている。本遺跡はこれらと同様の遺構の分布を示している。本遺跡は過去２回調査が行なわれ、今回の調査区から400m北西地区でも同様の遺構を発見しており広範囲な遺構の分布が認められる。また青磁、三筋壺を出土する例は少なく、特定の階級層のみが所有していたと考えられている。本遺跡の掘立柱建物跡は、一般階層ではなく上層階級の建物跡の可能が考えられる。

掘立柱建物跡の年代は、出土遺物が乏しく明らかにするのは難しいが、SB－1掘立柱建物跡出土の陶器片、重複するSD－1溝跡出土の遺物から鎌倉時代以降と考えられる。

(3) 溝　跡

調査区から検出された溝跡は、ほぼ南北方向、及びほぼ東西方向に延びている。SD－５，SD－22溝跡はSD－１溝跡に切られているため明らかではないが、ほぼ同時期の溝跡と思われる。また北半で東へ屈曲し、何らかの施設に関連するものと思われる。

SD－11溝跡は、Ⅱ区の北側から南北方向に延び、南側で東に「L」字状に屈曲する溝である。推積土中からは、古墳時代の石製模造品、及び、中世陶器片を出土し、溝が機能していた年代を正確におさえることは難しい。この溝跡は、Ⅱ区で検出したＳＢ－４掘立柱建物跡、ＳＢ－５掘立柱列を取り囲むように巡っており、掘立柱の柱筋とほぼ同一方向を示している。また、SD－11溝跡より西側と南側では、掘立柱建物跡は検出されず、ピットの数も減少する。このような例は、昭和55年仙台市教育委員会の調査で検出した１号溝にも見られ、「L」字状の溝に囲まれた中に掘立柱建物跡が集中するものである。これらのことから、ＳＤ－11溝跡も、掘立柱建物群を取り囲む施設と考えられる。よってＳＤ－11溝跡の年代も掘立柱建物と同じ年代と考えられる。

溝跡は、殆ど井戸跡に切られており、SD－1溝跡出土遺物等から平安時代後半と考えられる。またSD－21溝跡は調査区内では、塩釜式～南小泉式の遺物を出土していることから、溝跡の

第２表　溝跡一覧表

単位　cm

No	上端幅	底幅	深さ	断面形	その他
1	120～210	30～70	60～80	逆台形	土師器・須恵器・馬の歯
2	120～130	30～60	50	逆台形	土師器・須恵器
3	80～100	30	20～30	V字型	土師器片
4	30		5	逆台形	
5	30～40	10～20	15～20	U字型	
6	20～30	10	10	U字形	土師器片
7	30～40	10	10～15	逆台形	土師器片
8	20	15	10	逆台形	
9		欠		番	
10	100～120	60～80	10～20	逆台形	縄文土器片・土師器片・須恵器片
11	70～100	20～30	20～40	舟底型	土師器・須恵器・瓦・中世陶器・石製模造品・粘土塊
12	100～130	20～40	20～60	舟底形	土師器・赤焼土器・中世陶器・粘土塊
13	40～50	20～35	5～20	U字型	土製品
14	40～70	20～30	10～20	逆台形	土師器片
15	30～70	10～30	5～20	U字形・逆台形	土師器片
16	40～100	20～80	10	逆台形	土師器片
17	60～100	30～40	30～40	逆台形	土師器片
18	30	20	10	U字形	土師器片
19	80～120	20	30～50	舟底形	縄文土器片・土師器・中世陶器・粘土塊
20	280～300	100	70～80	扁平逆台形	土師器・中世陶器・木片・種子・骨片
21	250	—	30	—	
22	30～40	15	10～20	扁平逆台形	土師器片・須恵器片
23	30～40	10～20	5	U字型	土師器
24	40～60	10～40	10	U字型	
25	30～40	20	10	U字型	土師器片
26	20～30	10～20	5	U字形	
27	20	10	3～7	U字形	
28	20～30	5～10	2～10	U字形	
29	30～50	10～25	2～8	U字形	
30	50～60	30～45	5	—	
31	40～95	25～75	5	—	

中では最も古い時期に位置づけられる。

(4)　井戸跡

調査区Ⅰ、Ⅱ区から合計12基検出された。形態的に３つに分類される。分類の形態の項目は昭和55年度仙台市教育委員会（第32集鴻ノ巣遺跡調査報告書）に準じて分類する。新たな分類項目はないが、Ｄ類を掘り方上端幅の大きさと深さによって細分を新たに加えた。

Ａ　類……円形の掘り方に井戸枠を組んでいるもの。

Ｂ　類……円形の掘り方の中に方形の素掘りがあるもの。

Ｃ　類……円形、楕円形の掘り方で円筒形の素掘りのもの。

Ｄ　類……円形、楕円形の掘り方で底に近づくに従って段々にすぼまっていく素掘りのもの。

１．掘り方上端幅が深さより大きいもの。

２．掘り方上端幅が深さより小さいもの。

本遺跡の井戸跡はＣ類、Ｄ類が多く検出され、Ｂ類は１基のみである。Ａ類の井戸枠を伴うものは検出されなかった。Ｃ類はSE－３、４で掘り方を比較すると、平面径はSE－3が 110cm

第３表　井戸跡一覧表

No	平面形	分類	大きさ（cm）	深さ（cm）	その他
1	円形	Ｄ１	360～380	100	土師器片・須恵器片・瓦
2	円形	Ｄ１	250～270	1.10	中世陶器・三筋壺・須恵器・砥石・木片
3	円形	Ｃ	110～130	95	
4	楕円形	Ｃ	140～170	100	木製品舟形・中世陶器・土師器片
5	円形	Ｄ１	200～220	120	土師器・馬の歯
6	楕円形	Ｄ１	210	90	木製品・桶底板
7	円形	Ｄ１	160～170	70	土師器片
8	楕円形	Ｄ１	170～210	125	土師器片・須恵器片
9	円形	Ｂ	200	100	土師器片・須恵器片・炭化物・木片・粘土塊
10	円形	Ｄ１	240	60	土師器片・瓦片
11	楕円形	Ｄ１	200～240	60～100	土師器片・中世陶器・炭化物・粘土塊
12	楕円形	Ｄ１	200～210	70～90	土師器片・木片

～130cm、SE－4が140～170cmと小型であるが、深さは１ｍ前後と同じである。Ｂ類は掘り方平面径が200cm、深さ100cmである。Ｄ類は９基と多く、掘り方平面形が円形、楕円形で、上端幅がまちまちであるが、SE－7、8が160～200cm、SE－2、5、10、11、12が200～270cmと大きくなり、SE－1は360～380cmと検出されたうちで最も大きい。深さはほぼ各遺構共通して 100cm前後である。形状は掘り方上端から徐々にすぼまっていくものである。SE－１は掘り方平面形、深さ、底幅等の形状からみれば土壙とも考えられる。出土遺物はSE－２、４、６から中世陶器、SE－４から舟形木製品、SE－６から桶の底板、また他の井戸跡から中世陶器等が出土し、近世以降の遺物を共伴していないことから井戸跡の年代は、鎌倉時代以降と考えられる。またⅠ区からは多数の井戸跡が隣接して検出され、重複関係は認められないが同時期に使用したとは考え難く、溝跡との重複関係から少なくとも二時期以上と考えられる。これから井戸跡は、数回にわたり掘り替えられたと思われる。

(5)　土　壙

調査区から計14基の土壙が検出されている。殆が遺構の重複関係で切られており、全容は明らかではない。特にSK－５土壙は、平面形が円形で、直径200cm、深さ60cm程である。土壙としては大型のものであり、堆積状況を見ると自然堆積と思われ、性格を決定づけられない。またSK－７土壙は、平面形は楕円形で、長径120cm以上、短径100cm、深さ50～60cm程であり、土師器器甕、高坏片が出土している。高坏脚部片は、孔を有するものである。甕片は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲するものであり、体部がハケメ調整の顕著なものである。また、坏片にはヘラケズリが施されているものもある。これらの破片は塩釜式期の特徴をもつものであり、それ以外の破片を含まないことから塩釜式期のうちに埋まりきったと思われる。人為的な堆積かどうかは不明である。

(6)　ＳＸ－１

出土遺物は全て破片で復元出来るものはきわめて少ない。SI －1竪穴住居跡との関連も考えられるが、出土状況等から人為的な廃棄と考えるのが適当と思われる。

第４表　SX－１性格不明遺構
出土土師器破片集計表

器形	部位	特徴	遺構検出面	堆積土１層	計
坏	口縁部		5	42	47
	口縁部～体部		1	1	2
	体部		0	13	13
	体部～底部		0	0	0
	底部		0	1	1
	口縁部～底部		0	0	0
高坏・器台	坏部		0	10	10
	脚部		2	4	6
	坏部～脚部		0	0	0
甕・壺・台付甕	口縁部	複合口縁	3	8	11
		単純口縁	10	145	155
		複合口縁	0	0	0
		単純口縁	0	2	2
	体部		184	2059	2243
	体部～底部		0	2	2
	底部		2	26	28
	口縁部～底部	複合口縁	0	0	0
		単純口縁	0	0	0
	台部		1	5	6
土製品			0	17	17
計			208	2335	2543

遺物は、ロクロ未使用の土師器片によって占められている。塩釜式の特徴を持つものが多い。しかし坏の中には南小泉式と考えられるものもある（Ⅶ２(2)参照）。また遺構確認の際に瓦片を一点出土しているが、古墳時代中期以降の遺物は他にないことから、旧耕作土中からの混入と考えられる。ＳＸ－１性格不明遺構は、出土した遺物から南小泉式期でも早い時期のものと考えられる。

(7)　周溝墓（SK－６土壙、SD－15溝跡）

SK－6土壙は、底面北隅から刀子と石製模造品が出土し、その出土状況や土壙の形態・規模から墓壙と考えられる。SD－15溝跡は、堆積土中から土師器片が出土し、SK－6土壙内堆積土から出土したものと類似する。またSK－6土壙の周囲をめぐるような位置関係にあり、これらのことから、同時期に存在していた周溝と考えられる。周溝の残存形態は「コ」の字形であるが、本遺跡の場合削平のため本来の形態とは断定しがたい。周溝の規模については、SK－6土壙西側の落ち込みも考慮に入れ、円形と推定した場合、溝の心心直径で５ｍ前後である。このような土壙の長軸長および周溝の規模からみて群集化する古墳時代末期の古墳と類似するが、墓壙内出土遺物は後述する様に古墳時代中期のものと考えられることや、墓壙と周溝が近接することにより、墳丘を成し得るような高い封土があったとは考え難い。よってSK－6土壙とＳＤ－15溝跡を古墳とみるよりも周溝墓とみる方が妥当であると思われる。

次にこの周溝墓の年代であるが、SK－6土壙より出土した石製模造品によって検討してみたい。このような石製模造品は、丸森町矢ノ目、亘理町宮前、大河原町台ノ山、多賀城市山王遺跡などで、南小泉式の土師器と共伴している。しかし、石製模造品の中でも剣形、有孔円板が主であって、本遺跡のような勾玉形のものは出土例が少ないようである。勾玉形の石製模造品で南小泉式の土師器と共伴して出土している例としては、仙台市遠見塚古墳の第12トンチ（註５）において出土したものを上げることができる。土師器坏、高坏、坩、甕、須恵器坏と共に勾玉形の石製模造品が共伴している。これらのことから、周溝墓の年代も南小泉式期と考えられる。

このような周溝墓あるいは墓と考えられる周溝の調査例は、宮城県内において名取市今熊野、西野田、仙台市安久東、多賀城市多賀城跡五万崎地区、高清水町東館、志波姫町鶴ノ丸、宇南遺跡などがあり、総数22基を数える（第５表）。本遺跡のものと比較すると、規模において鶴ノ丸遺跡発見の円形周溝に近似するものがあるが、直径は一辺が10ｍを超えるものが一般的

第5表　宮城県内発見方形周溝墓、円形周溝一覧

（昭和57年10月現在）

遺物名(数)	No	立　地	周溝						土壙
			形　態	規　模	上端巾	底面巾	深　さ	出土遺物	
今熊野（9基）	1	低丘陵	コーナー3ヶ所にブリッチを有する方形	21～23			0.5～1.5で一定しない	土師器壺(底部穿孔)	無
	2	〃							
	3	〃							
	4	〃	コーナー1ヶ所にブリッヂを有する方形	8.5×8.5			0.7	土師器坏	有
	5	〃		（4号にほぼ同じ）					無
	6	〃		（1号にほぼ同じ）				土師器甕	無
	7	〃							
	8	〃							
	9	〃						土師器壺	
東館（1基）	1	台　地	隅形長方形(全周)	15.4×13.2	1～2.2	0.4～1.4	0.7	土師器壺(体部穿孔)	無
多賀城五万崎（1基）	1	丘陵の先端平担部	コーナー1ヶ所にブリッチを有する方形	19.5×17			0.8	土師器壺甕（複合口縁、底部穿孔なし）	有
鶴ノ丸（8基）	1	台　地	隅丸長方形(全周)	10.4×9.2	0.7～1.3	0.2～0.9	0.3～0.4	土師器壺（体部穿孔）甕	有
	2	〃	隅丸長方形(全周)	10.3×9.5	1～1.6	0.5～1	0.2～0.4	無	無
	3	〃	隅丸長方形(全周)	14.5	1.7～1.9	0.8～1.6	0.25～0.5	土師器甕	有
	4	〃	円形（推定）	10.5	0.8～1.1	0.3～0.8	0.3～0.45	縄文土器・弥生土器・土師器	有
	5	〃	楕円形（全周）	6.65×6.05	0.2～0.7	0.1～0.4	0.1～0.5	土師器甕壺	無
	6	〃	円形（推定）	7.5	0.6～1	0.4～0.6	0.1～0.4	無	無
	7	〃	円形（推定）	12	1.2～2.2	0.6～1.8	0.35～0.4	無	無
	8	〃	円形(全周しない)	12.2	0.6～1.5	0.3～1.1	0.1～0.65	土師器	無
安久東（1基）	1	沖積地	1ヶ所にブリッヂを有する長方形	24.5×18	1.8～2.6	1.4～3	0.2～0.9	土師器壺（底部穿孔）、甕、高坏	無
西野田（2基）	1	台　地	円　形	14.5～15.5	0.8～2.7	0.4～1	0.45	弥生土器・土師器	有
	2	〃	円　形	11.5～12.0	0.9～1.8	0.5～1.2	0.05～0.1	弥生土器・土師器	無
宇南（1基）	1	〃	隅丸方形(全周)	10.2×9.5	0.3～0.9	0.1～0.4	0.1～0.5	無	有

（単位　m）

であり、築造年代も古墳時代前期―塩釜式期とみられていることなど、本遺跡のものとは様相を異にしている。

このような墓と集落との関係については、今熊野、宇南、西野田遺跡などで、両者が位置的な隔たりを示し、住居を造り生活を営んだ「場」と墓を営んだ「場」とに違いのあることが指摘されている。しかし鶴ノ丸遺跡などではその違いは見られない。本遺跡の場合、南小泉式期の竪穴住居跡は、本調査区の北方約250m で2軒検出されているが、今回の調査区からは発見されなかった。また南小泉式期の遺物の出土量も少なく、居住の場として使用されていた跡は認められない。しかし、生活の営まれた「場」と墓の営まれた「場」の検討は、鴻ノ巣遺跡内の遺構の広がりを明確に把握していない以上、資料の増加を待ってすべきであると思われる。

また、ここで注目したいのは、調査区の東北東1.8kmの多賀城市山王遺跡についてである。山王遺跡については、概報のみで本報告が未刊なため詳細を知り得ないが、遺跡内で石製模造品が製作され、さらにそれらの石製模造品が「墓」と考えられる遺構より出土している。(石製模造品については(Ⅶ－2(8)を参照)山王遺跡において墓と考えられる遺構は、楕円形状及び溝状を呈し、石製模造品の他に臼玉、ガラス玉、琥白玉などの玉類、古墳時代中期の土師器（調査者より南小泉式との御教示を得た）を出土し、木炭の含まれているものもある。これらの楕円形状及び溝状の遺構を墓とすると、同じ南小泉式期と考えられる本遺跡の周溝墓とは形態、副葬品等に違いが見られる。山王遺跡の土壙墓の場合、平面形にばらつきがあり、かならずしも一定ではない。また、出土遺物を見ても、多量の土師器が出土していることや、石製模造品が剣形、有孔円板によってしめられ、勾玉形は見られない。

このような墓の形態、副葬品等の違いが、何に起因するものなのかは、現時点では不明である。南小泉式期の集落における墓の位置、形態についての類例の増加を待たなければ、明言することはできない。

2．遺　物

今回の調査で出土した遺物は縄文土器、土師器（坏・高台付坏・高坏・器台・壺・甕・台付甕・段皿)、須恵器甕、赤焼土器、瓦、自然遺物、陶磁器、石製品、木製品、鉄製品、土製品、動物遺存体等で、平箱に13箱程である。

この中で土師器甕、赤焼土器坏の出土量が多い。これらの土器は各遺構内から出土しているが、特にSD－1溝跡、SD－21溝跡、SX－1性格不明遺構、SK－7土壙からの出土量が最も多い。その中でSD－1溝跡、SX－1性格不明遺構出土の土器を図示したものだけで全体の60%にも及ぶ。

次に各器種、器形の特徴について記述する。

(1)　縄文土器

縄文土器は細部の破片５点が出土し、SD－10、12、19溝跡、SX－１性格不明遺構から出土している。器形や文様構成が判明するものはほとんど認められない。（第32図１、第40図１・２・３、第42図１）は単節ＬＲ縄文が横位に回転施文されている。(第42図１）は単節ＬＲ縄文が横位に回転施文された後、工具により沈線が描かれている。

(2)　土師器

土師器には坏、高台付坏、高坏、器台、壺、甕、鉢、台付甕、段皿等の器種がある。製作に際し大きく２つに分類され、ロクロ未使用とロクロ使用のものがある。ロクロ未使用のものはＡ類、ロクロ使用のものはＢ類とする。

坏

製作技法の相違により、大きく２つに分類できる。

Ａ類……製作に際し、ロクロを使用しないもの

Ａ類は体部の器形によって３類に分類される。

ＡⅠ類―体部が丸味をもって立ち上がるものであるが、その形態には、(1)口縁端部がわずかにくびれて、内面に稜をつくるもの(第43図１)、(2)口縁部が緩く外反し、内面に稜をつくるもの(第43図２)、(3)口縁部が直線的に外傾し、内面に稜を有するものがある(第43図３)。ＡⅠ(1)類は体部外面と口縁部内面にハケメ、体部内面はヘラナデが施される。ＡⅠ(2)類は体部外面ヘラケズリ、内面にヘラナデ口縁部は内外面ヨコナデ、一部ハケメが施される。ＡⅠ(3)類は内外面ヘラミガキで、体部内面ヘラナデ後ヘラミガキが施される。

ＡⅡ類―体部が緩やかに立ち上がるもので、口縁部はほぼ直立気味となる。磨滅が激しく器面調整は不明である(第43図４)。

ＡⅢ類―体部外面中位に段を有するものである。外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけヘラケズリ、内面はヨコナデ後ヘラミガキが施され、黒色処理は施されていない(第43図５)。

Ｂ類……製作に際しロクロ使用のもの

Ｂ類は体部から口縁部まで大きく外傾するもので、細かな器形の変化により２類に分類される。

ＢⅠ類―体部から口縁部まで緩やかに外傾するもの、底部は平底、底部切り離しは回転糸切りである。外面ロクロ調整、内面は横方向ヘラミガキで黒色処理されている(第43図６)。

ＢⅡ類―体部から口縁部まで緩やかに外傾する。ＢⅠ類と比して、口径に対し器高が低い(第43図７)。

高台付坏

いずれも製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、底部切り離しは回転糸切りで高台を貼りつけている。外面ロクロ調整、内面はヘラミガキで黒

色処理されている(第11図６、第12図28)。

高　　坏

全てロクロ未使用のものである。全体の器形のわかるものは出土しなかった。

坏　部―坏部で図化しえたのは僅か３点である。口縁部まで残存しているのは一点のみで、体部から口縁部まで直線的に外傾するものである(第32図２・３)。内外面ハケメ後ヘラミガキが施されている。

脚　部―円錐台状の脚部で孔を有するもの(第30図２)と、筒状の脚部で裾部に至って広がるもの(第38図２)とがある。

器　　台

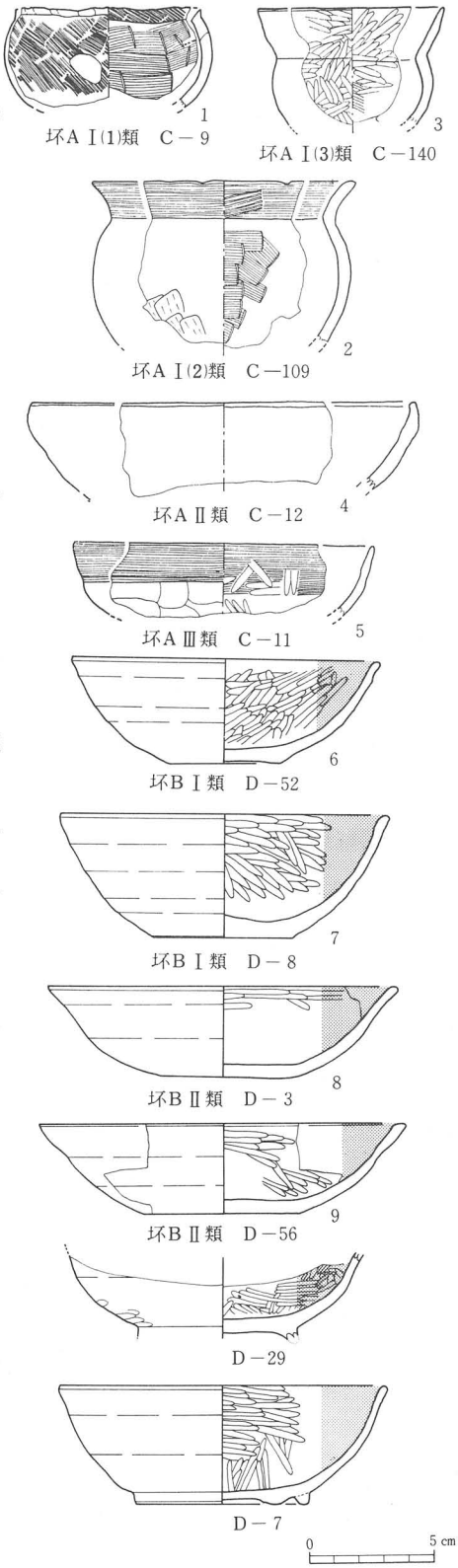
図化しえたのは１点のみである。脚部下半を欠損しているが、脚部に比して受部がきわめて小さく浅いものである(第38図１)。器形は円錐台状に開くもので、受部から脚部に貫通孔を有している。脚部には、孔が１個穿たれた痕跡がある。外面はハケメ後ヘラミガキ、さらに内外面ともナデが施されている。

壺

壺として扱ったものは、頸部から口縁部までが甕に比して長いものである。口縁部の形態によって３類に分類される。

Ⅰ　類―複合口縁を有するもので、内外面ハケメ、一部ヘラミガキ、ヨコナデが施されているもの(第44図１)である。

Ⅱ　類―有段口縁を有するもので、(1)ボタン状の浮文がつくものと、(2)そうでないものとがある。Ⅱ(1)類は内面ヘラミガキ、外面ハケメ後ヘラミガキが施され浮文をつけるものである(第44図２)。Ⅱ(2)類は内面ヘラミガキ、外面は



第43図　土師器・坏

磨滅のため不明である。(第44図３)

Ⅲ　類―単純口縁を有するもので、口縁端部はヨコナデ、外面ハケメ、内面ヘラナデが施されているものである（第44図３)。

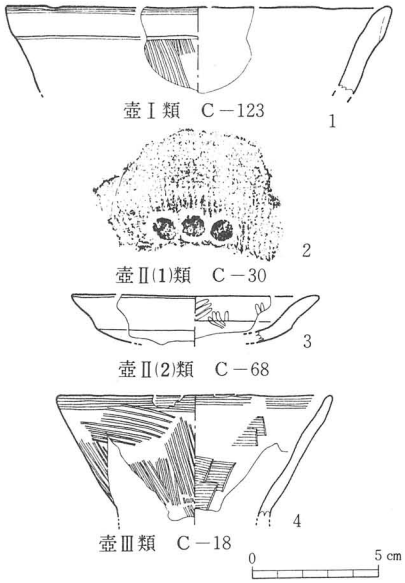
甕

A類……製作に際しロクロを使用しないもの

A類は口縁部の形態によって２類に、体部から底部の器面調整によって３類に分類される。

AⅠ類―複合口縁を有するもので、口縁端部はヨコナデ、内外面ハケメが施されるものが多い（第45図１)。

AⅡ類―単純口縁を有するもので、その形態には(1)頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲して外反するもの（第45図２)、(2)頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するものがある（第45図３)。AⅡ(1)類は体部外面ハケメ、内面ヘラナデ一部ハケメ、口縁部はヨコナデが施されるものが多い。AⅡ(2)類は内外面ヨコナデ後ハケメ、あるいはヘラナデが施されている。



第44図　土師器・壺

AⅢ類―体部外面はハケメ後一部ヘラケズリ、内面はヘラナデ一部ハケメが施されている。(第45図４)。口縁部がAⅡ(1)類の形態を示すものがある。

AⅣ類―体部外面はハケメ後一部ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面はハケメが施されている(第45図５)。

AⅤ類―体部内外面ヘラミガキが施されるもの（第45図６)。

基本的には、AⅢ～AⅤ類は平底で、体部が球形を呈する甕と考えられる。

B類……製作に際しロクロ使用のもの

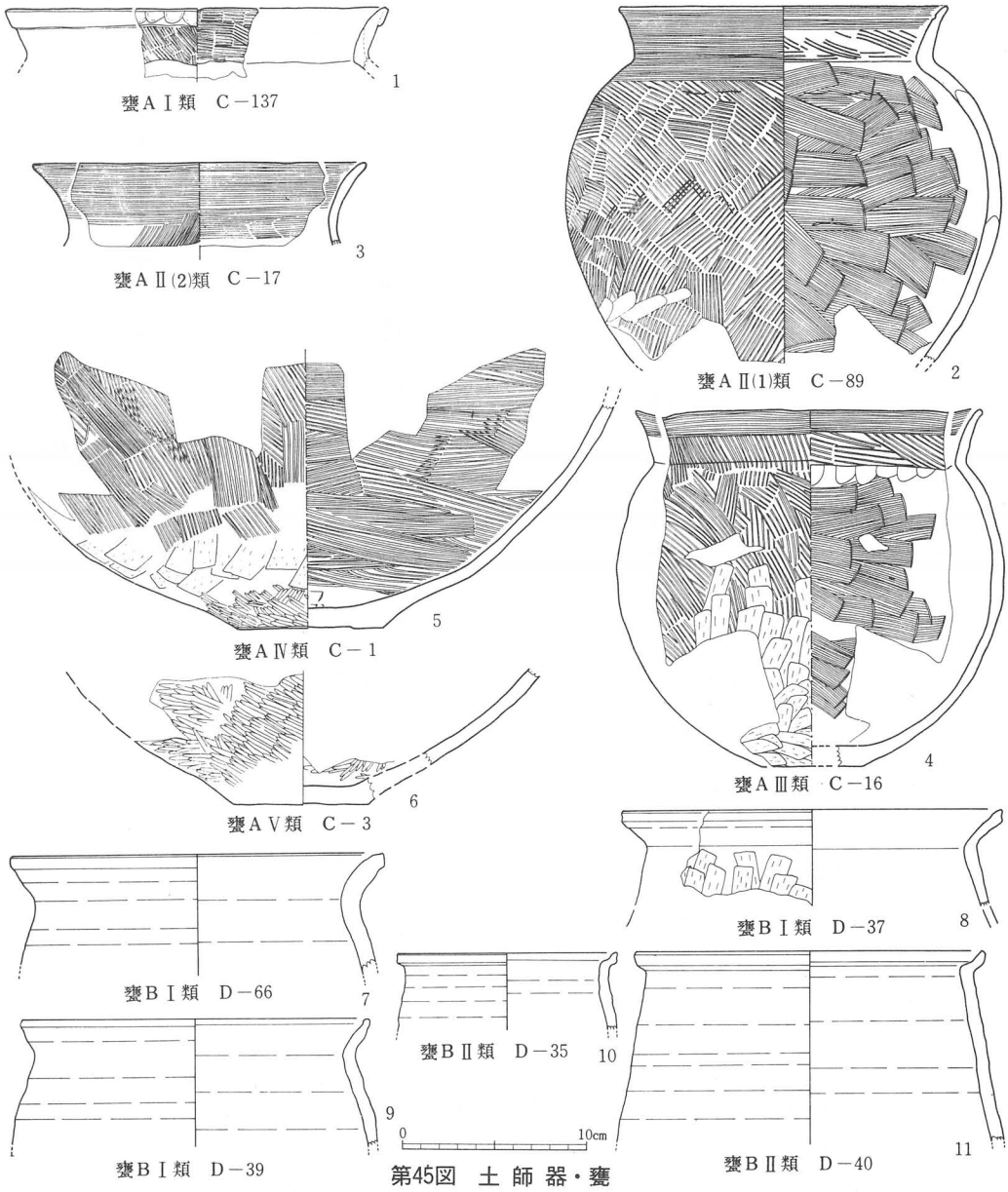
B類は最大径の位置によって２類に分類される。

BⅠ類―最大径が口縁部にあり、頸部でくびれて口縁部で外反する。頸部、体部下半欠損の為、器面調整が不明のものが多い。内外面ともロクロ調整である（第45図７・８・９)。

BⅡ類―最大径が体部にあり、頸部でくびれて口縁部で外反しており、端部は上方に立つ。体部下半欠損の為、器面調整が不明のものが多い。内外面ともロクロ調整である（第45図10・11)。

盌

製作に際しロクロを使用し、体部から内弯して立ち上がり、口縁部は僅かに直立する。口縁



第45図　土師器・甕

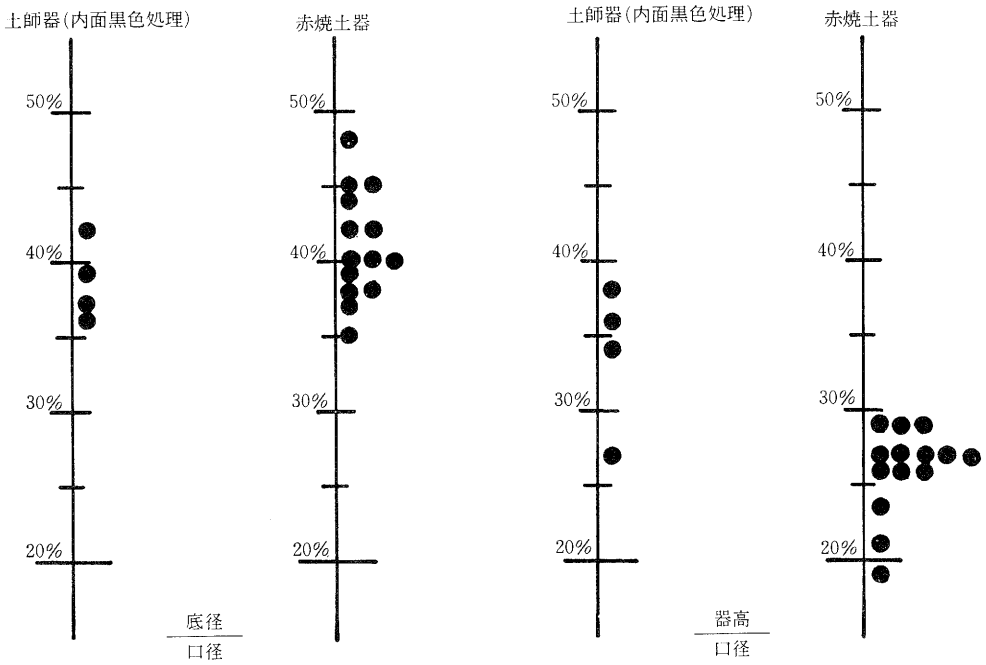
径13.7cmである。(第41図12)

台付甕

台部のみで、口縁部から体部については不明である。図化しえたのは3点で、器形は円錐台状に開くものである。内外面ハケメが施されるもの（第32図5・第34図13）と、外面ハケメ、内面はヘラナデが施されるもの（第34図12）がある。

段　皿

製作に際しロクロを使用し、内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施されている。高台は低く、



第46図　坏口径と底径の比・坏口径と器高の比

底部から直線的に大きく外傾する。内面は中位で段を有し、口縁端部は短く外反している。法量は、口径12.7cm、器高2.1cm、器厚1.1～1.3cmである(第12図27)。

出土土師器の年代について

土師器は前項のように分類されるが、次に製作に際してロクロ未使用、ロクロ使用のものを、一器種ごとに、他遺跡からの出土例を踏まえながら年代を検討する。（尚、文中の“岩切鴻ノ巣遺跡”は昭和48年宮城県教育委員会による調査をさす。）

坏

ＡⅠ(1)類は小形で、精製されたものである。形体的に類似したものに西野田遺跡第10号住居跡ピット1 出土の小形手樫ね土器がある。このピットからは、脚部が中実を呈する高坏や、ハケメ調整の顕著な甕片が出土している。よって塩釜式と考えられる。

ＡⅠ(3)類は、清水遺跡第38号住居跡推積土、ならびに遺物包含層出土の坏(第１群土器)、鶴ノ丸遺跡坏ⅠＢⅱ類と類似するものである。よってこれらは塩釜式と考えられる。

ＡⅠ(2)類は、岩切鴻ノ巣遺跡の坏ＡＩＣ類、塩沢北遺跡Ａ類ときわめて類似するものである。またＡⅡ類も、岩切鴻ノ巣遺跡の坏ＢⅡｄ類と類似するものである。よってこれらは、南小泉式と考えられる。

ＡⅢ類は、体部に段を有し、黒色処理されていない。このような特徴をもったものは、住社

遺跡、田町裏遺跡、山ノ上遺跡より出土しており、住社式と考えられる。

高　坏

（坏部）体部から口縁部まで直線的に外傾し、ハケメのちヘラミガキが施されている。

この特徴をもつものは、大橋遺跡高坏B類、岩切鴻ノ巣遺跡高坏D類と類似し、塩釜式から南小泉式のものであろう。

（脚部）円錐台状に開き孔を有するのは、大橋遺跡、清水遺跡、安久東遺跡、岩切鴻ノ巣遺跡などから出土し、従来塩釜式期の高坏脚部の特徴とされてきたものである。また筒状の脚部を有するもののうち、脚部内面が中空でヘラケズリを施されたもの（第38図2）は、岩切鴻ノ巣遺跡高坏D類の脚部に類似する。

器　台

受部が小さく浅いものである。脚部に孔が穿たれていることと、器台が南小泉式になると出土例が知られていないことなどから、塩釜式と考えられる。

壺

Ⅰ類は、大橋遺跡の壺A2類、西野田遺跡壺B類に類似している。またⅡ(1)類は同様のものを他遺跡に類例を見い出せないが、壺の中でも装飾的要素が強いものである。このように壺に装飾的要素のあるものは、塩釜式のものでも古いものと考えられる。さらにⅡ(2)類は、今泉城19号土壙、安久東遺跡方形周溝墓出土壺に類似している。Ⅲ類も、大橋遺跡の壺B類、西野田遺跡A類に類似したものである。よってこれは塩釜式と考えられる。

甕

AⅠ類は、複合口縁を有している。またAⅡ類は、大橋遺跡甕B2類、岩切鴻ノ巣遺跡B類安久東遺跡方形周溝墓出土甕に類似する。さらにAⅢ類は、頸部から口縁部にかけてAⅡ(1)類の形態を示すものがある。よってAⅠ、AⅡ(1)、AⅢ類は塩釜式と考えられる。

AⅡ(2)類とAⅤ類はこの特徴だけで年代の検討をするのは困難である。しかしAⅡ(2)類については、共伴する遺物に塩釜式の特徴をもつものが多いことから、塩釜式の可能性がある。

AⅣ類は、内外面のハケメ調整が顕著なものである。また図示した遺物と同一個体と考えられる口縁部が、単純口縁で直線的に直立するきわめて特徴のあるものである。このような形態を示すものに、岩切鴻ノ巣遺跡壺C類を上げることができ、南小泉式のものである。しかし壺C類は器面調整という点において違いがありヨコナデが施され、ハケメ調整は見られない。ハケメ調整は土師器の調整技法上古いという指摘（註6）もあり、ここではAⅣ類を塩釜式から南小泉式と位置づけたい。

台付甕

台付甕は、今泉城19号土壙、西野田遺跡5号住居跡より塩釜式の土師器と共に出土し、南小

泉式になると発見例が知られていないことから塩釜式と考えられる。

ロクロ未使用の土師器は塩釜式のものが多い。とりわけＳＸ－１性格不明遺構からは、坏ＡⅠ(2)、ＡⅠ(3)類、壺Ⅰ類、甕ＡⅠ、ＡⅡ(1)類、台付甕等が出土されている。しかし、それらとともに南小泉式と考えられる坏ＡⅠ(2)類も出土している。土器の組み合わせから考えるなら、坏ＡⅠ(2)類も塩釜式に含まれるべきである。ただ、ＳＸ－１性格不明遺構の遺物出土状況を見る限り、細破片が多く人為的な廃棄によって堆積したものと考えられる。住居跡出土の一括遺物などとは別に扱うべきであろう。よって、坏ＡⅠ(2)類は器形の特徴から南小泉式に位置づけたい。

• 製作に際しロクロを使用しているＢ類土器は、坏、高台付坏、甕、鉢、段皿等で、土師器全体の出土量と比して少量である。

本遺跡ＳＤ－１溝跡から、土師器坏・高台付坏・甕・盌・段皿、赤焼土器坏・高台付坏が共伴して出土している。土師器坏ＢⅠ、Ⅱ類は、底部切り離しが回転糸切りで、再調整の施されていないものである。土師器と共伴して出土している赤焼土器は、底部切り離しが回転糸切り技法で、底部切り離し後内外面に再調整が施されていないもので外面のロクロ目の凹凸が少ないという共通した特徴を持っている。また全体的に見ると、土師器坏は底径に比して口縁径が大きく、器高が高く、赤焼土器は底径に比して口縁径が小さく、器高が低めである。これらの土師器坏、赤焼土器の出土量が多い。

本遺跡出土遺物のＢ類坏は、清水遺跡Ⅷ群土器Ｃ群土器に類似性が見られる。Ｃ群土器の土師器坏は回転糸切り技法、無調整の坏が主体を占め、再調整も含まれる。またＣ群土器は底径が他より小さい。安久東遺跡第２号住居跡出土の土師器坏、赤焼土器についても類似性が見られ、底部切り離し技法が回転糸切り技法、無調整である。坏体部は緩かに立ち上がり、口縁部でわずかに外傾するものが主体を占めている。本遺跡出土の坏Ｂ類は、清水遺跡Ⅷ群土器Ｃ群土器坏、安久東遺跡第２号住居出土の土師器坏と同様の特徴を持っている。また安久東遺跡第２号住居跡から、11世紀に比定されている灰釉陶器が出土していることから、土師器、赤焼土器の年代を11世紀に比定している。さらに清水遺跡Ⅷ群土器Ｃ群土器の年代でも11世紀に比定している。本遺跡出土の土師器坏ＢⅠ～Ⅱ類も、ほぼ同時期のものと思われ、このような特徴を持つ土師器は「氏家和典氏東北地方の土師器型式編年」の中に位置づけると、最終型式にあたる表杉ノ入式に比定され、その中でも平安時代後半のものと思われる。

(3)　須恵器

須恵器は大部分が破片で、全体の器形のわかるものはない。

甕口縁部片は頸部でくびれ、口縁部は外反し、端部が上・下側方に突き出すもの(第13図38)と、体部片で外面平行タタキメ、内面ナデ調整のもの（第13図37）がある。

(4) 赤焼土器

器形は坏、高台付坏、皿で全て製作に際しロクロを使用している。底部切り離し技法は、回転糸切りである。色調は灰白色、橙色、浅黄橙色と様々である。坏・皿は法量で区別でき、口径、底径はほぼ同一であるが、坏の器高は3cm前後、皿の器高は2cmと分かれる。これらの土器は大半がＳＤ－１溝跡出土で、若干他の遺構からも出土している。

坏

全て底部切り離し技法は、回転糸切り技法によるものである。

形態的に分類すると、

Ⅰ類－体部から緩やかに立ち上がり、口縁部で直立ぎみのもの(第47図１)。

Ⅱ類－体部から口縁部まで直線的に外傾するもの(第47図２・３・４)。

Ⅲ類－体部から緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外傾するもの（第47図５・６・７・８・９・10)。

Ⅰ～Ⅲ類の法量はほぼ同一で、口径9.8～11.7cm、器高2.8～3.2cm、底径3.8～4.8の範囲で収る。

Ⅱ類のＤ－63だけは、口径14.2cm、器高3.7cm、底径5.4cmと全体的に法量が大きい。

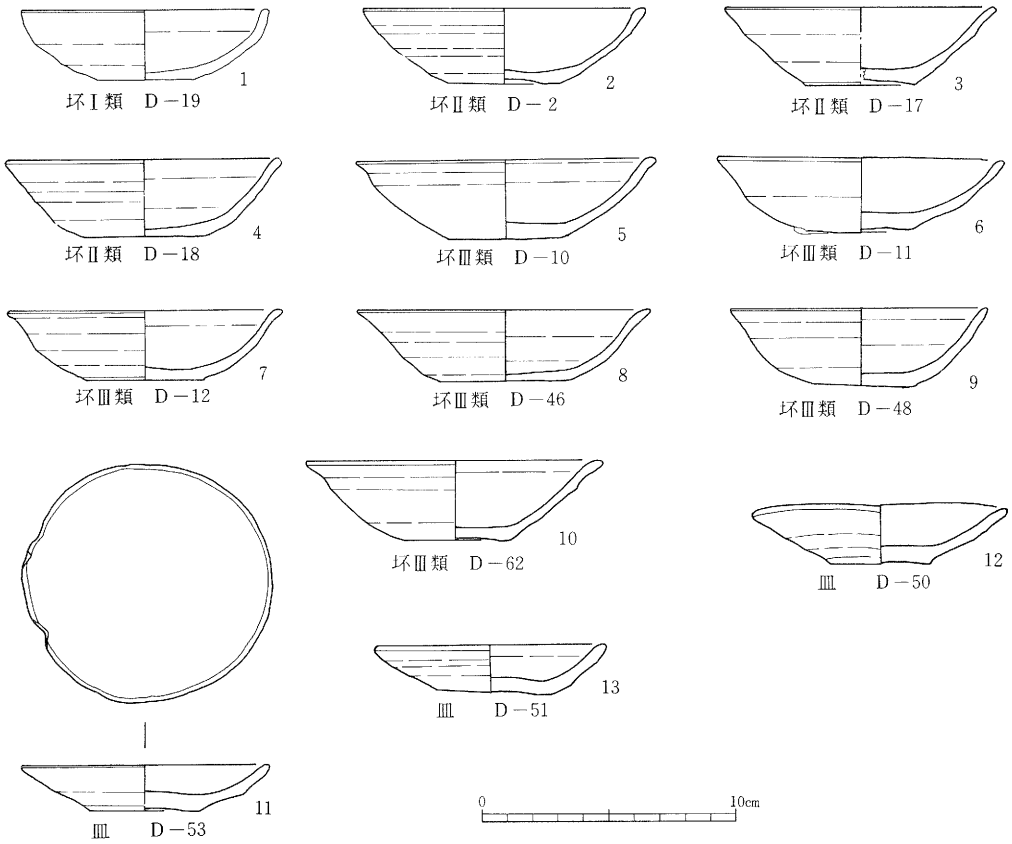
皿

平底で体部から直線的に外傾し、口縁部までが短い。法量は口径が9.2～10.1cm、器高1.8～2.3cm、底径4.0～4.4cmの範囲に収る（第47図13・14・15)。Ｄ－53は口縁部に２つ凹が施されている。

高台付坏

高台付坏は坏部、高台部片５点のみである。高台部（第12図23・24）は僅かに開き、端部でやや細まる。土師器高台付坏より高く、法量は3.5cmを計る。坏部（第12図25・26）は、坏底部から直線的に外傾し大きく開く。口径は16.0～17.8cmを計る。

いわゆる赤焼土器は、器内面にヘラミガキ、黒色処理を行なわず、底部切り離し技法は、回転糸切り技法によって切り離されている。再調整のない土器について、1975年頃から使用されてきた名称である。近年、上新田遺跡、水入遺跡の報告の中で、本来、赤焼土器は土師器の範中に入り、器形は坏類等小形品に限るべきだとして、坏形小形品の中でも両面にヘラミガキ、黒色処理が施されていないものとしている。本遺跡でも、基本的に土師器と色調、胎土とも類似し、異なった焼成方法による土器とは考えられないことから、器内面にヘラミガキ、内面黒色処理されない坏、高台付坏、皿と、内黒土師器を区別する意味で、赤焼土器とした。本遺跡出土の赤焼土器は、製作に際しロクロを使用し、共伴する土師器等から表杉ノ入式に比



第47図　　赤　焼　土　器

定される。また、表杉ノ入式の土師器、赤焼土器については、最近発掘調査が増加するのに伴い、種々検討が加えられて、変遷が指摘されている。最近報告された上新田遺跡第８号住居跡内出土の赤焼土器は、９世紀初頭と考えられる土師器坏、須恵器坏と共伴し、９世紀中葉にはすでにロクロ技術導入の段階で存在していたことが確認されている。また、安久東遺跡第２号住居跡内出土の赤焼土器は、口径に対し底径が小さく、体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾し、底部回転糸切りで、共伴する土師器坏、灰釉陶器から年代を11世紀と考えている。また、五輪Ｃ遺跡第４号、10号住居跡内出土の赤焼土器は体部から口縁部にかけて、やや丸味をもって外傾するもので、底部回転糸切り、無調整である。年代は共伴する土師器坏、また安久東遺跡出土の赤焼土器から平安時代後半と考えられている。また、植田前遺跡第２溝状遺構出土の小形坏は、平底で体部から直線的に外傾し、口縁部までが短いもので、年代を平安時代末期に位置づけている。これら赤焼土器は、平安時代の中で器形、形態が大きく変化したと考えられる。初期から前半にかけては器形、底部切り離し技法が多様であり、後半には器高、底径が小さくなり、器種が限られ、底部切り離し技法が一様化していくようである。

本遺跡出土の赤焼土器は、ＳＤ－１溝跡堆積土１～３層出土で、赤焼土器の他に土師器内黒坏、段皿、高台付坏、甕、須恵器甕等を出土している。出土遺物の中で赤焼土器は主体を占め、須恵器甕片は出土しているが、坏は一点も出土していない。上新田遺跡で指摘しているが、須恵器小形品に変わって赤焼土器が主体になっていくと推察している。

遺物量が少なく資料的にやや乏しい感もあるが、坏Ⅰ～Ⅲ類は、「安久東遺跡」「五輪Ｃ遺跡」「多賀城出土土器Ｅ・Ｆ群」に類似性が求められる。皿は、「植田前遺跡」と比較して、器厚やや薄いと思われるが類似性が認められる。これらから坏Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ類は平安時代後半に位置づけ、皿は12世紀後半に位置づけたい（註７）。

(5) 瓦

瓦はⅠ区から１点、Ⅱ区９点、表採１点、合計11点のいずれも小破片が出土している。溝跡、井戸跡から出土しており、丸瓦が２点、平瓦８点、破片の為不明なものが１点である。丸瓦（第24図５・６）は凸面を縄叩きのちスリ消しているが、部分的に縄叩き目が残るものがある。凹面は布目である。平瓦（第24図１～４、第35図１・第40図５・第42図８・９）は凸面が縄叩き目、凹面は布目であるが、Ｇ１・９は布目をスリ消している。瓦を出土する各遺構からは土師器(ロクロ使用)、中世陶器等を出土していることから、奈良時代～平安時代の瓦が混入したものと考えられる。

(6) 自然遺物

自然遺物は、ほとんどＳＥ井戸跡から出土している。炭化した縄、栗の実等である。

(7) 陶磁器

出土量は少なく全て破片で、合計13点出土している。器形は大甕、壺の二種類で、個体数は甕の口縁部片１点、体部片10点、壺は三筋壺の肩部と体部片各１点である。図化し得たのは４点である。その他は小破片である。

大甕（第23図11）は調査Ⅰ区ＳＥ－４井戸跡、耕作土中出土の肩部、及び口縁部の破片である。口径34cm、頸部から肩部にかけて強い張りが見られ、さらに大きく外反しながら口縁部に至る。調整は頸部、口縁部、内外面とも横ナデ、内面肩部に粘土紐の接合痕の凸凹が観察される。色調は黒褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み、小さな気泡が認められる。

三筋壺（第23図９）は調査Ⅰ区ＳＥ－２井戸跡堆積土２層から出土している。肩部破片であるが肩部に２本の浅い沈線（幅２mm、深さ0.3mm）が巡る。外面は一部ヘラケズリ痕が残り、内面は粗くナデ調整がなされている。色調は外面が暗灰色一部肩部上半は暗オリーブ色、内面が褐灰色を呈する。器厚は1.0cm程で、胎土は砂粒を含み硬い。

三筋壺（第41図14）は調査Ⅰ区耕作土中から出土している。体部下半の破片であるが、体部に一本の浅い沈線（幅1.5mm、深さ0.2mm）が巡る。体部外面は一部ハケメ後ナデ、内面は粗く

ナデ調整されている。色調は外面が赤褐色、内面は灰赤色である。胎土は砂を含み硬い。尚、（第23図９と第41図４）は同一個体の可能性がある。

甕（第41図15）は大甕の体部細片で押印が施されている。細片の為押印の全容は不明であるが簾状格子目の押印に類似している。

中世陶器のうち大甕（第23図11）は口縁部の形態、肩の張り具合い、胎土等から渥美産と推察される。その他の甕については、体部破片である為、生産地、生産時期は不明であるが、その中の１点、内部から噴き出るような気泡のある暗赤褐色の破片は白石市東北窯跡のものと考えられる。

複線で引かれた三筋壺は古式に属するとされ、古常滑の代表的なもので平安末期のものが主で、鎌倉初期が三筋壺の終末とされている。このことから、年代は平安時代末(12世紀後半)とされ、生産地は常滑と考えられる。これまで宮城県内で発見された三筋壺の出土地は次の通りである（註８）。

遺跡名	種類	所所在地
伊達神社	経塚	加美郡色麻町
不動山	経塚	玉造郡岩出山町
田束山	経塚	本吉郡歌津町
原	経塚	玉造郡岩出山町
多賀城跡		多賀城跡大畑地区
高蔵寺		角田市高倉字大門

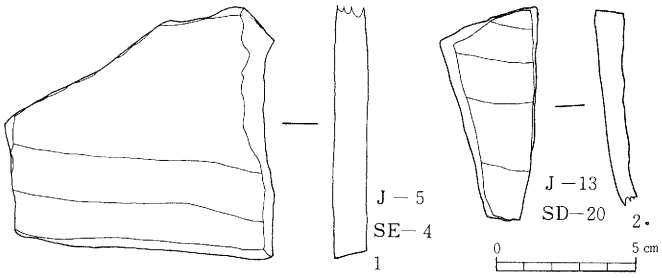
青磁・青白磁

調査区耕作土中より、口縁部片２点出土している。器形は碗形と思われる(第37図１)。釉はオリーブ灰色、胎土は灰色を呈する。(第37図２)は釉は灰白色、胎土は灰色を呈する。各々２点とも文様は認められるが、細片の為全体の文様、年代については不明である。

その他

陶磁器の細片が３点出土している。(第42図10)は近世以降の破片であるが、擂鉢と考えられる。内面に縦の節目がある。色調は暗赤褐色である。

研磨痕のある須恵器片、陶器片



第48図　研磨痕のある須恵器、陶器片

研磨痕のある陶器片はＳＥ－４井戸跡、須恵器片はＳＤ－20溝跡より出土している。これ等の破片は甕片と思われ、(第48図２)は三面の周辺部を研磨している。色調は灰色である。（第48図１）は一面を研磨している。色調は黒色で胎土は砂を含み硬い。いずれも共伴する出土遺物から平安時代後半以降のものと思われる。尚、用途については不明である。

(8) 石製品

石製模造品

石製模造品は、有孔円板２点がＳＤ－11溝跡、調査Ⅱ区遺構検出面から、勾玉がＳＫ－６土壙から出土している。有孔円板（第40図４）は、ほぼ楕円形を呈し、扁平な円板のほぼ中央部に１個の小孔が穿たれているもので、孔は全て一方向から穿たれている。製作にあたっては表裏両面及び側に研磨しており、擦痕が認められる。(第37図４)は直径2.2cm、厚さ0.4cm、孔径0.1cm、(第40図４)は直径2.9cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cmである。石材は結晶片岩である。勾玉(第28図２)は扁平な半円形状を呈し、片端寄りに１個の小孔（直径0.2cm）が穿たれている。表裏両面及び側面に剝離痕跡が認められ、全体が研磨されている。色調は灰色、石材は結晶片岩で一部風化により変質している。

ここで注目したいのは、本調査区の東北東1.8kmの多賀城市山王遺跡についてである。

山王遺跡では、剣形、円板形(有孔円板)、刀子形の石製模造品、さらにその未完成品、原石等が出土し、遺跡内において石製模造品を製作していたと思われる。山王遺跡出土の石製模造品のうち、孔が２個あるものが多い。本調査区から出土した有孔円板は、孔が１個あるもののみである。しかし昭和48年の宮城県教育委員会の調査においては、有孔円板が11点出土し、うち７点までは孔が２個あるものである。これらが山王遺跡内で製作されたものかどうかは、不明であるが、遺跡の位置関係からみて、古墳時代中期における集落内、あるいは集落間の問題として追求して行くべき課題と思われる。

硯

長方形の硯で、海部周縁破片の為、全容は不明である。（第37図３）

砥　石

砥石は１点のみ出土し、ＳＥ－２井戸跡堆積土中からである(第23図10)。石材は灰白色の細粒質凝灰岩である。破損面を除く砥面は、皿状に凹んだ面を呈し滑らかである。砥面として使用された面は、上下両面、両側面の４面で、長さ6.7cm、巾1.4～2.6cm、厚さ1.0～2.7cmと小片になるまで使いこまれ、丁寧な整形を受けていること等から、仕上げ砥的か中砥的なものと考えられる。

(第42図７)は耕作土から出土している。磨面及び打痕が認められる石材は粘板岩で風化している。器形は不明の為、石製品とする。

⑼　木製品

桶、船形、その他の木材片等が出土している。桶はＳＥ－６井戸跡の底面直上で出土している。桶の底板と思われ、（第25図１・２）は１対になる。形は楕円形で最長幅45cm、最小幅30cm、厚さ３cm程で板状の柾目材を使用している。表裏両面、両側面を削りの整形が施された痕跡が見られる。（第25図５）は、木を棒状に削り上げたもので、長さ31cm、断面形はほぼ円形で直径４cm程、面は削りの整形が施され、上下端部は太さが徐々に細くなり、その先端部は使用による摩滅と思われる。農具あるいは生活用品に使用されたと考えられる。（第25図４）は、薄い板状の柾目板を使用している。長さは11.3cm、幅3.0cm、厚さは1.8cmである。表裏両面は削りで整形され、両側面は一部削り取られ加工されている。下端部は直径0.9～1.2cm、長さ2.0cmに突出し、突出先端はやや細く、柄に差し込むもので、家具及び農具の一部に使われたと考えられる。（第25図３）はＳＥ－４井戸跡堆積土中より出土している。船形は全長10.9cm、幅2.2cm、高さ1.5cm程である。船形は長方形の柾目板を削出し、船体内側はノミ状工具で船底を彫り込んでいる。舷側は削出し、舳上部は細く、艫は角形で、張出し部に舵用と思われる孔を穿つ。艫裏面は鋸で切込み段をつけている。船底はほぼ平底である。現在まで井戸跡内からの木製品の発見例は県内で最近多く調査されるようになったが、全体として発見例は少ないと思われる。その中で調査地の土壌、地下水位の関係などから井戸跡出土の木製品は極く限られ、遺存状態等からしても極く少数である。ほぼ定形で出土した船形（第25図３）は、井戸跡からの発見例はあまり知られていない。類例として広島県草戸千軒町遺跡第26次調査ＳＥ－1670、1710井戸跡、第27次調査ＳＧ－1791池跡出土の船形と類似し、調査者は「当時の人々の信仰に関する」ものとし、年代は鎌倉時代～室町時代と考えている。また鳥羽離宮跡調査第59次ＳＤ－５溝跡でも出土している。本遺跡出土の船形の用途については不明であるが、当時の地域性、生活様式を考える上で民俗学的な面からも検討する必要があると思われる。

⑽　鉄製品

刀子は調査Ⅱ区ＳＫ－６土壙底面直上で出土した。全体的に銹化が進み、不明瞭であるが、現存長は21.6cmを計る。刀身長は15.6cm、身幅は刀身中央で2.3cm、棟幅は刀身部で1.2cmを計る。柄の長さは6.0cm、幅は1.4cmである。断面形は楕円形である。（第28図１）

⑾　土製品

調査区内から４点出土している。器形、器種の判るものは２点である。（第18図11）はフイゴ羽口の破片であるが、残存部から推定して直径は４cm程の円筒形である。（第42図４）は、器種、部位等は不明である。

⑿　動物遺存体

馬の歯　調査Ⅰ区ＳＥ－３、５井戸跡、調査Ⅱ区ＳＤ－１、20溝跡等から歯の細片６点出

土したが、遺存状態が不良の為、詳細は不明である。

種別	器形	部位	器面・調整 外面	器面・調整 内面	層位 ℓ1.2	層位 ℓ3.4	計
土師器	坏	口縁部	ロクロ	内黒	40	4	44
		体部	ロクロ	内黒	60		60
		底部	糸切り	内黒	7		7
	甕	口縁部	ロクロ	ロクロ	11		11
		体部	ケズリロクロ	ロクロ	5		5
	高台付坏	底部	糸切り	内黒	6		6
須恵器	甕	口縁部	ナデ	ナデ			
		体部	平行タタキ	ナデ	20		20
赤焼土器	坏	口縁部	ロクロ	ロクロ	120		120
		体部	ロクロ	ロクロ	151		151
		底部	糸切り	ロクロ	33		33
	高台付坏	高台部	ロクロ	ロクロ	2		2
		坏部	糸切りロクロ	ロクロ	3		3
合計					458	4	462

第6表　SD－1 溝跡出土土器破片集計表

Ⅷ まとめ

本遺跡の遺構・遺物については記した通りである。これらの検討から次のような成果と問題が指摘される。

1．掘立柱建物跡は、5棟分検出されたが、ほとんど全容を明らかにすることは出来なかった。SB－1掘立柱建物跡(2間×3間以上)は三面に1.0～1.2mの疵がつく建物跡で、全容は明らかでないが、四面疵の建物跡になる可能性もある。検出された建物跡は、出土する遺物、柱穴掘り方の規模からおおむね鎌倉時代以降と考えられる。

2．周溝墓(SK－6・SD－15)は、出土遺物から南小泉式期と考えられる。南小泉式期の墓としては、古墳を除いてあまり知られていない。このような周溝墓は、東北地方において塩釜式期のものが知られている。本遺跡で検出された周溝墓は、塩釜式期のものと比して規模の小さいものである。また明らかに主体部と考えられる墓壙を検出した例は、福島県須賀川市いかずち古墳群内の方形周溝墓、山形県米沢市八幡堂遺跡内の方形周溝墓(註9)のみである。

3．古墳時代の遺物としては、土師器、石製模造品等が出土している。特に土師器は、SX－1性格不明遺構、SK－2・7土壙より塩釜式期の土師器を出土している。塩釜式の土師器については県内の大橋、西野田、留沼、鶴ノ丸遺跡出土の土師器によって細分が試みられている。本遺跡の場合は、細片のため復元できるものが少ないことや、住居跡等の遺構に伴っていないため、参考資料に留めたい。

古墳時代以降の遺物は、土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器等である。特に県内では、あまり出土例が知られていない三筋壺を出土している。また段皿は、岩手県江刺市瀬谷子遺跡出土の段皿に類似しており、本遺跡出土の段皿と比して、口径、器高は大きいが器形的には、ほぼ同一と思われる。なおこの段皿については、小笠原好彦氏は『東北における平安時代の土師器について2・3の問題』の中で次のように述べている。「同時期に共伴する土師器、あかやき土師の器種には、須恵器と密接な関連をもっているが、中には須恵器にみられない、高台付の小形皿、耳皿、段皿のものがある。これらは須恵器より灰釉陶器、緑釉陶器の影響を受けている」と指摘し、多賀城跡第15次調査区堆積土6層出土の耳皿、瀬谷子遺跡出土の段皿等に見られるとしている。本遺跡出土の段皿も、これらの影響を受けていると思われる。

4．ほとんどの溝跡は、平安時代～中世のものと考えられ、本遺跡が自然堤防上に立地していることから、当時自然堤防上に何らかの区画した溝と考えられる。またSD－21溝跡は、出土する遺物からみて古墳時代前期のものであると考えられる。

5．井戸跡は12基検出され、掘り方は素掘りのものである。これらの井戸跡は、それほど深くはなく、ほぼ近隣し間隔が狭く、特に調査Ⅰ区中央で6基検出されている。また井戸跡堆積土中から中世陶器等の遺物が出土し、近世以降の遺物が共伴して出土していないことから、中世

に営まれた井戸跡と考えられる。

以上のことから本遺跡は、古墳時代前期から集落として営まれていたことがこれまでの調査で知られている。また平安時代末からは、中世史研究上、本遺跡を中心とした岩切周辺の究明が行なわれて、大きな成果を得ている。昭和57年、国指定史跡になった岩切城＝高森城は、本遺跡から北東1.5㎞に位置し、留守氏の居城として周辺一帯を統治していたことで知られている。留守氏の領内を流れる七北田川流域を中心に、商業の中心的地域として栄え「冠屋市場」、「五日市場」等の市場が開らかれ、また官営工場が営まれているなど、中世には、最も進んだ先進商業地域として栄えていたものと考えられている。これらを裏づけるように、今回の調査で、三面疵、あるいは四面疵の掘立柱建物跡を発見し、また、あまり出土例が知られていない三筋壺等を出土している。これらからも本遺跡は、中世に商業を中心とした当時の集落として、七北田川（冠川）流域を中心に、周辺に多くの建物群が建ち並び、政治、商業、文化、交通の重要な地域として、展開していたことが、推察される。また河川流域を中心に発達を遂げた中世の商業地域の特徴等を知る上で、本遺跡は、中世商業活動の拠点として歴史的に位置づけられるものと考えられ、今後の調査に待つものが大きいと思われる。

註

註１．　安田喜憲「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の居住」宮城県文化財調査報告書第52集　1978・3

註２．　紫桃正隆「仙台領内古城・館」第４巻　1974・7

註３．　白鳥良一・加藤道男「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集　1974・3

註４．　金森安孝・工藤哲司「鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第32集　1981・3

註５．　結城慎一・工藤哲司「史跡遠見塚古墳」仙台市文化財調査報告書第15集　1978・3

註６．　太田昭夫「大橋遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集　1980・9

註７．　宮城県教育委員会文化財保護課小井川和夫・加藤道男・森貢喜各氏のご教示を得た。

註８．　名古屋大学教授樽崎彰一氏のご教示を得た。また東北歴史資料館藤沼邦彦氏「中世陶器の紹介」の三筋壺出土地を引用、ご教示を得た。

註９．　川崎利夫「置賜地方の古墳」まんぎり№1　1982・10

参　考　文　献

結城慎一・工藤哲司　「史跡遠見塚古墳」　仙台市文化財調査報告書第15集　1978・3

篠原信彦ほか　「今泉城跡」　仙台市文化財調査報告書第24集　1980・3

岩渕康治・田中則和　「安久東遺跡発掘調査概報」　仙台市文化財調査報告書第10集　1976・3

金森安孝・工藤哲司　「鴻ノ巣遺跡」　仙台市文化財調査報告書第32集　1981・3

結城慎一　「南小泉遺跡」　仙台市文化財調査報告書第13集　1978・3

遊佐五郎　「宇南遺跡」　宮城県文化財調査報告書第69集　1980・2

斉藤吉弘　「宇南遺跡」　宮城県文化財調査報告書第59集　1979・3

小野寺祥一郎　「五輪C遺跡」　宮城県文化財調査報告書第61集　1979・8

森　貢喜　「水入遺跡」　宮城県文化財調査報告書第84集　1982・3

黒川利司　「持長地遺跡」　宮城県文化財調査報告書第72集　1980・9

早坂春一・阿部恵　「西手取遺跡」　宮城県文化財調査報告書第63集　1980・3

丹羽・阿部・小野寺　「清水遺跡」　宮城県文化財調査報告書第77集　1981・3

白鳥良一・加藤道男　「岩切鴻ノ巣遺跡」　宮城県文化財調査報告書第35集　1974・3

小川淳一　「塩沢北遺跡」　宮城県文化財調査報告書第69集　1980・3

加藤道男　「東館遺跡」　宮城県文化財調査報告書第65集

小井川和夫　「上新田遺跡」　宮城県文化財調査報告書第78集　1981・3

太田昭夫　「大橋遺跡」　宮城県文化財調査報告書第71集　1980・9

土岐山武　「安久東遺跡」　宮城県文化財調査報告書第72集　1980・9

「猿投窯・須恵器・瓷から中世陶へ」　愛知県陶磁資料館　1981・10

白鳥良一　「研究紀要Ⅶ・多賀城跡出土土器の変遷」　宮城県多賀城跡調査研究所　1980・3

「草戸千軒町遺跡・第15～17次」　草戸千軒町遺跡調査研究所年報　1975

「草戸千軒町遺跡・第24～26次」　草戸千軒町遺跡調査研究所年報　1978

「下夕野遺跡」　秋田市教育委員会　1979・11

藤沼邦彦　「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」東北歴史資料館「研究紀要第二巻」　1976・3

藤沼邦彦　「宮城県出土の中世陶器について」東北歴史資料館「研究紀要第三巻」　1977・3

藤沼邦彦　「中世陶器の紹介」　東北歴史資料館「研究紀要第四巻」　1978・3

氏家和典　「北奥古代文化第4号」　北奥古代文化研究会　1972・4

石井則孝　「古代の集落」　歴史新書34　1982・1

斎藤　忠　「日本考古学概論」　1982・7

近藤義郎・藤沢長治　「日本の考古学Ⅳ・古墳時代（上）」　1966・6

大塚初重　「日本考古学の現状と課題」　1974・5

地学団体研究会仙台支部　「新編・仙台の地学」　1968・3

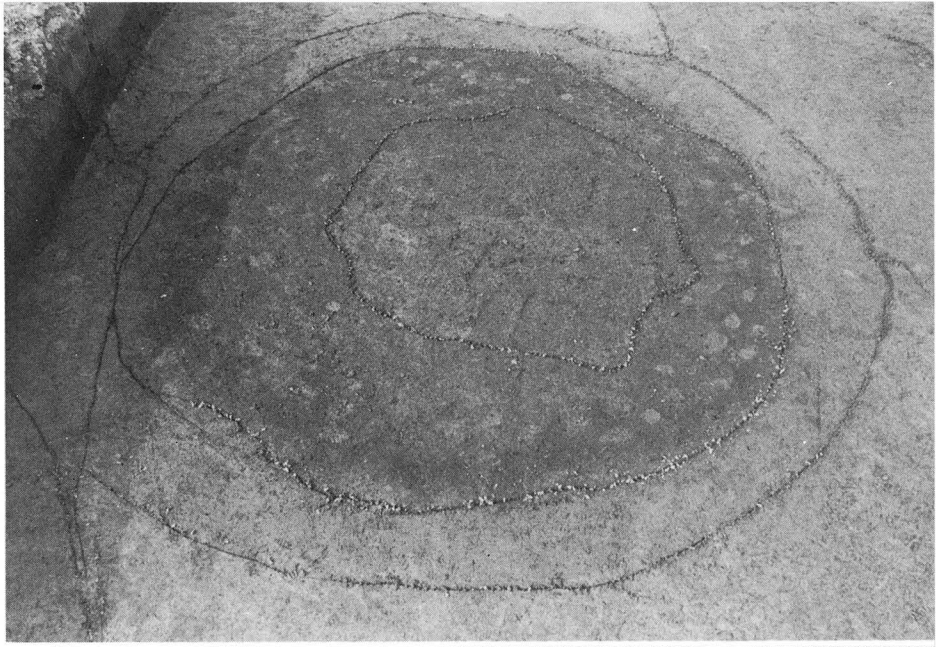
大塚・戸沢・佐原　「日本考古学を学ぶ・3」　1979・7
安田喜憲　「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の居住」
宮城県文化財調査報告書第52集　1978・3
小笠原好彦　「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」東北考古学会　1976・10
氏家和典　「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」第14輯　1957
岡田・桑原　「多賀城周辺における古式杯形土器の変遷」「研究紀要」
宮城県多賀城跡調査研究所　1974
桑原・滋部　「ロクロ土師器坏について」「歴史」第39輯　東北史学会　1969・12
紫桃正隆　「仙台領内古城・館」第4巻　1974・7
川崎利夫　「置賜地方の古墳」まんぎり№1　1982・10

写　真　図　版

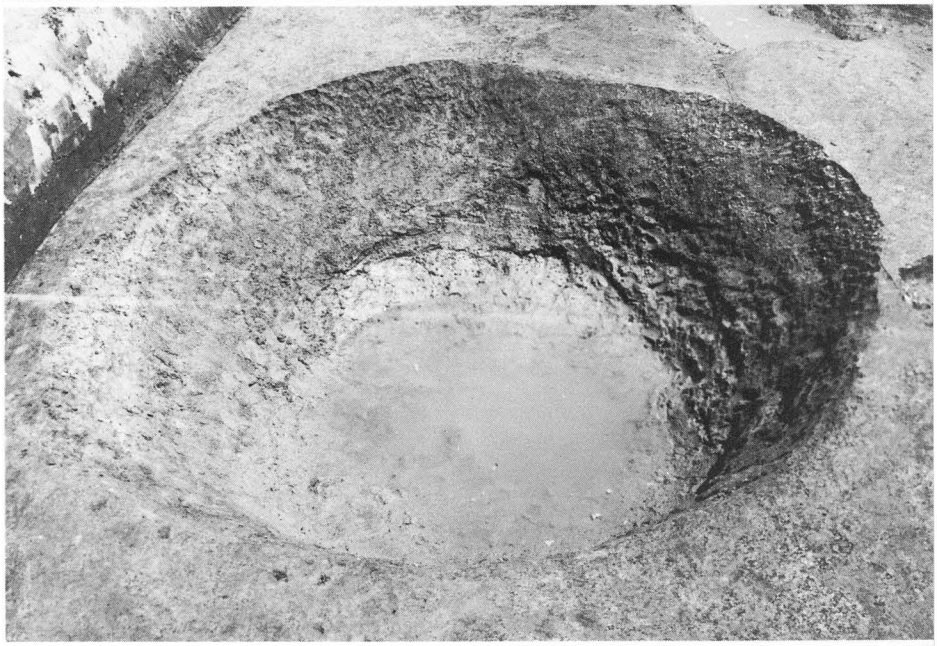
図版1　Ⅰ　区　全　景

図版2　Ⅱ　区　全　景

図版 3
SE－1　井戸跡検出状況



図版 4
SE－1　井　戸　跡



図版 5
SE－1　井戸跡セクション

図版6　上　SE－2　井　戸　跡
図版7　下　SE－2　井戸跡セクション

図版 8
SE－3　井　戸　跡

図版 9
SE－4　井　戸　跡

図版10
SE－5　井　戸　跡

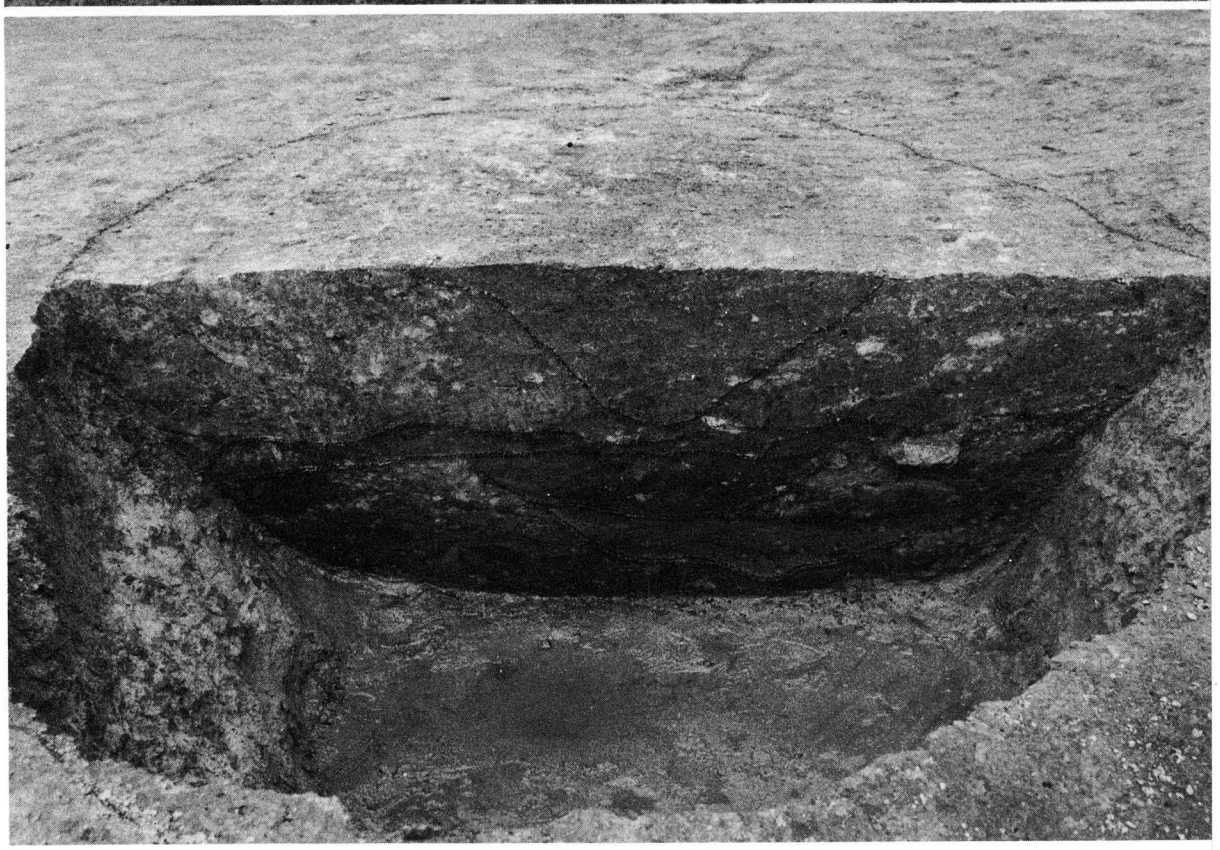
図版11
SE－6　井　戸　跡

図版12
SE－6　井戸跡遺物出土状況

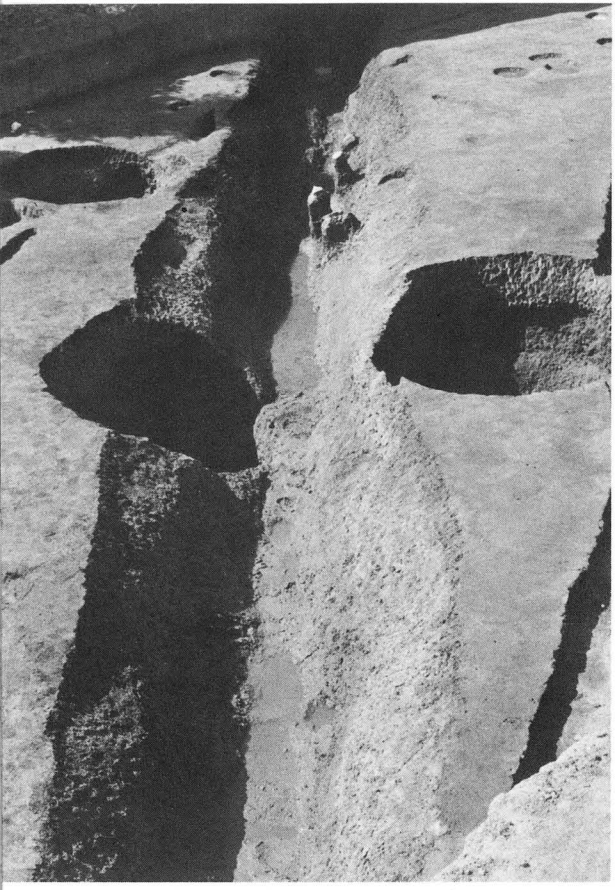
図版13
SE－6　井戸跡セクション

図版14　上　SE－9　井　戸　跡
図版15　下　SE－9　井戸跡セクション

図版16　上　SE－11　井　戸　跡
図版17　下　SE－11　井戸跡セクション



図版18　上　SE－12　井　戸　跡
図版19　下　SE－12　井戸跡セクション

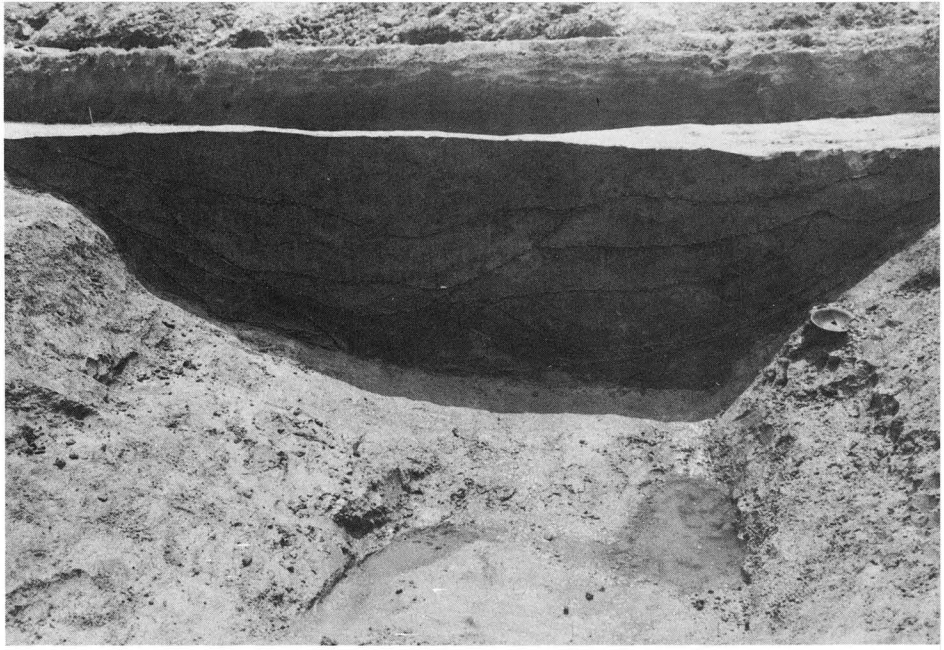


図版20
SD－1　溝　跡

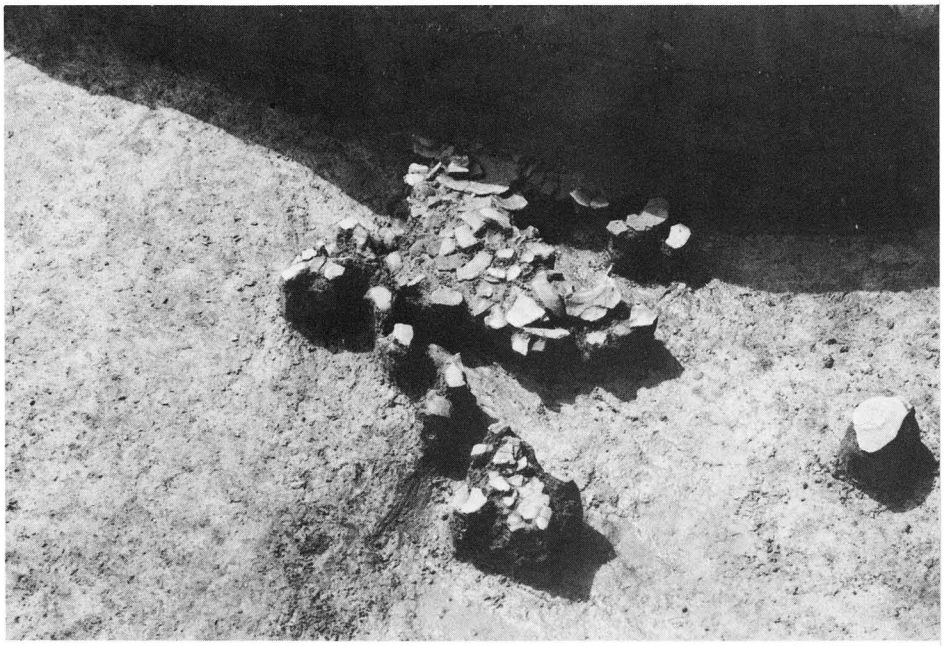
図版21
SD－1　溝跡遺物出土状況

図版22　SD－1　溝跡セクション

図版23
SD－20　溝跡セクション



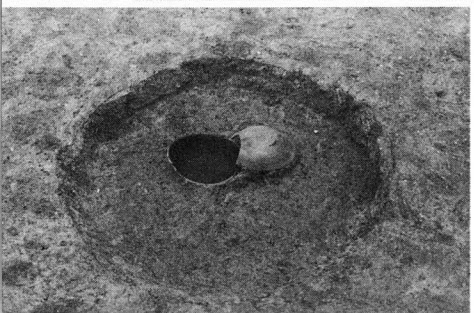
図版24
SD－21　溝跡
遺物出土状況



図版25
SK－13　土　壙

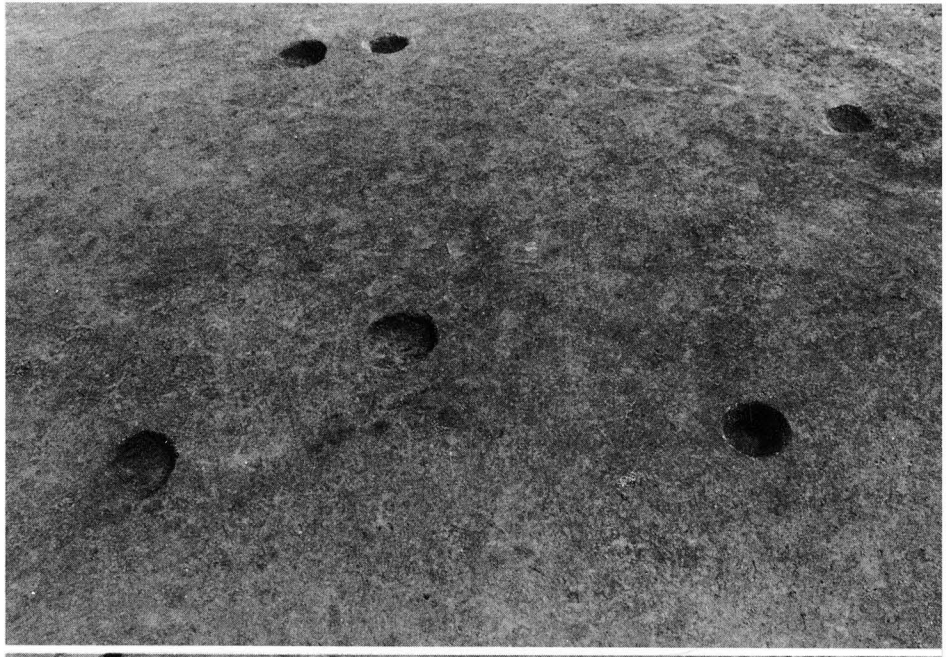
図版26
SK－2　土壙遺物出土状況

図版27
SK－16　土壙遺物出土状況

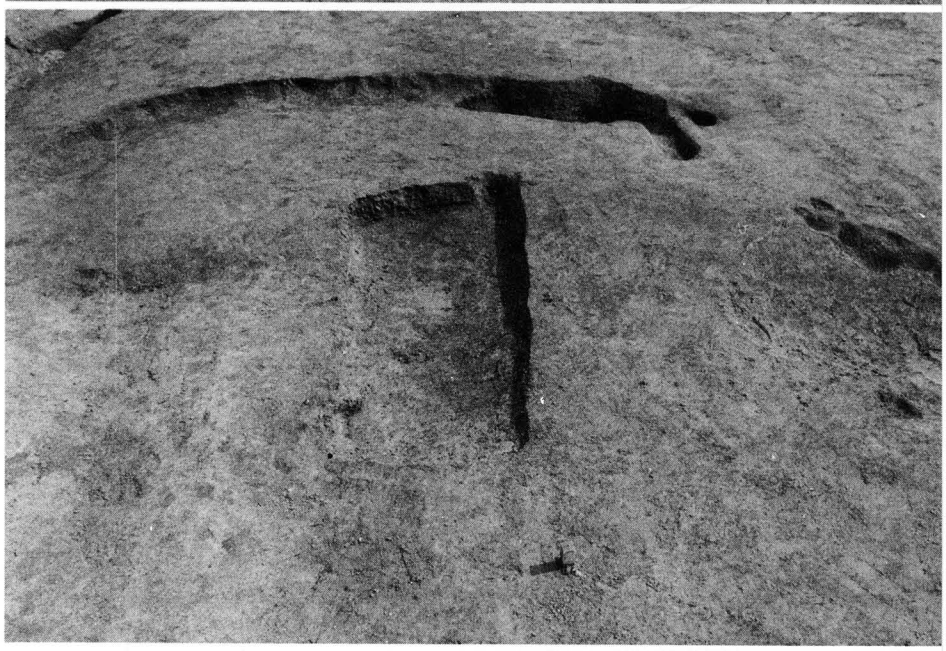


図版28
P－12　遺物出土状況

図版29
SI－1　住居跡



図版30
SK－6．SD－15　周溝墓

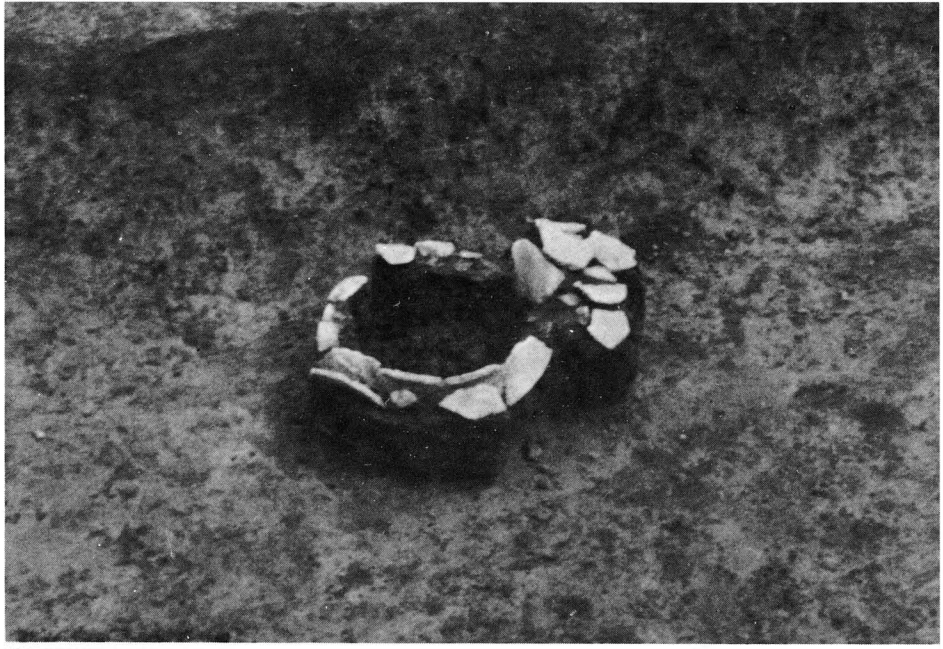


図版31
SK－6　土壙 遺物出土状況

図版32
SX－1　性格不明遺構
遺物出土状況

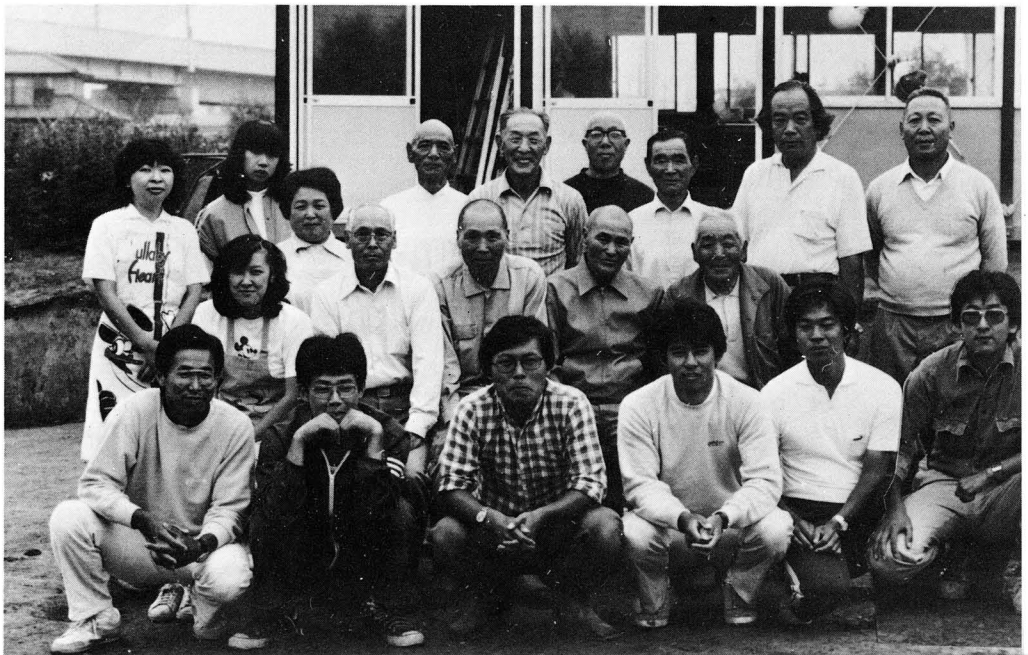
図版33
SX－1　性格不明遺構
遺物出土状況

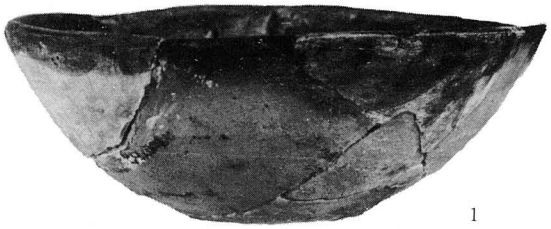
図版34
SX－3　性格不明遺構
遺物出土状況



図版35
現地見学会

図版36
調査参加者





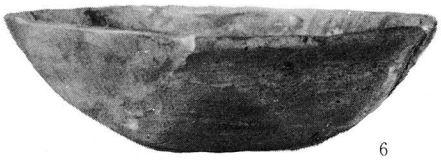
1

2

3

4

5

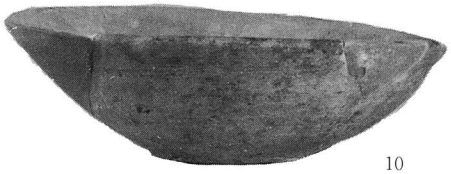


6

7

8

9



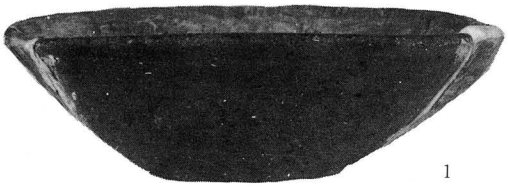
10

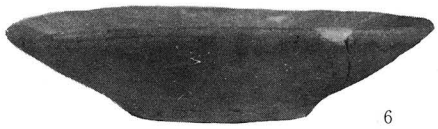
11

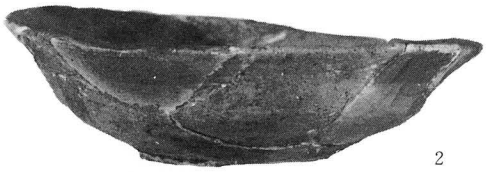
1．D－8　土師器坏　SD－1　溝跡
2．D－52　土師器坏　SE－1　井戸跡
3．D－3　土師器坏　SD－1　溝跡
4．D－45　土師器坏　P12
5．D－7　土師器坏　SD－1　溝跡

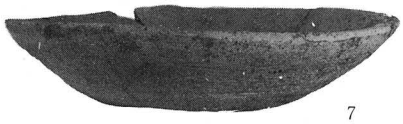
6．D－19　赤焼土器　坏　SD－1　溝跡
7．D－17　赤焼土器　坏　SD－1　溝跡
8．D－18　赤焼土器　坏　SD－1　溝跡
9．D－63　赤焼土器　坏　P87
10．D－48　赤焼土器　坏　表　土
11．D－12　赤焼土器　坏　SD－1　溝跡

図版37　出土遺物　土師器・赤焼土器


1

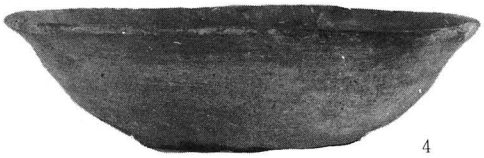

6


2


7

3

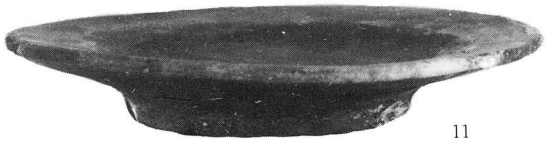
8


4

9

5

10


11

1．D－2　赤焼土器　坏　SD－1　溝跡
2．D－11　赤焼土器　坏　SD－1　溝跡
3．D－10　赤焼土器　坏　SD－1　溝跡
4．D－46　赤焼土器　坏　P12
5．D－62　赤焼土器　坏　SD－20　溝跡
6．D－50　赤焼土器　皿　北側遺構検面
7．D－51　赤焼土器　皿　北側遺構検面
8．D－53　赤焼土器　皿　SE－10　井戸跡
9．D－44　赤焼土器　高台付坏　SD－1　溝跡
10．D－43　赤焼土器　高台付坏　SD－1　溝跡
11．D－28　土師器　段皿　SD－1　溝跡

図版38　出土遺物　赤焼土器

1 a　C－109　土師器坏　SX－1　　1 b　C－9　土師器坏　表土，1C　c－140　土師器坏　SX－1
2．　C－106　土師器高坏　SX－1
3 a　C－104　土師器高坏　SX－1
3 b　　〃
4．　C－75　土師器高坏　SD－12　溝跡
5.　C－57　土師器高坏　表土
6．　C－30　土師器壺　SK－16　土壙　9．　C－77　土師器台付甕　SX－1
7．　C－18　土師器壺　SD－12　溝跡　8 b　C－137　土師器壺　SX－1
8 a　C－126　土師器壺　SX－1，　8 d　C－24　土師器壺　SD－10　溝跡
8 c　C－25　土師器壺　SD－11　溝跡，

図版39　出土遺物　土師器

1

2

3

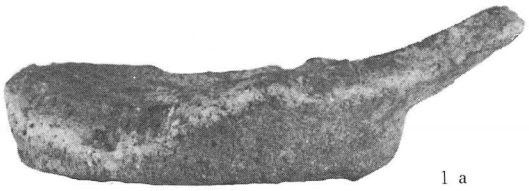
4

5

6

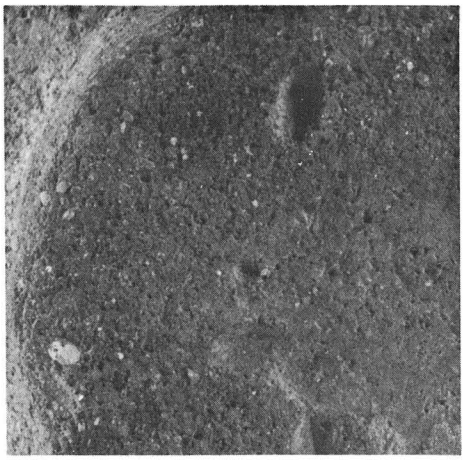
1．C－3　土師器甕　SD－21　溝跡
2．C－19　土師器甕　SK－1　土壙
3．C－1　土師器甕　SK－2　土壙
4．C－17　土師器甕　SK－7　土壙
5．C－16　土師器甕　SK－7　土壙
6．C－143　土師器甕　SX－1

図版40　出土遺物　土師器

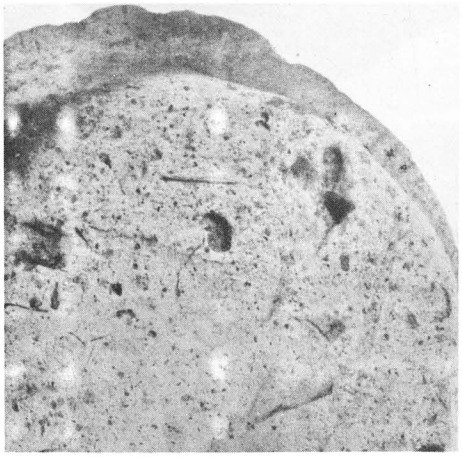


1 a

2 a

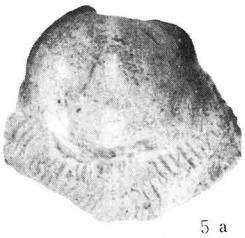


1 b

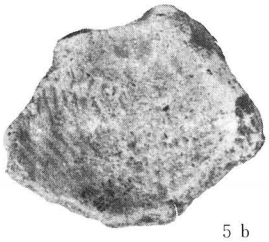


2 b

3



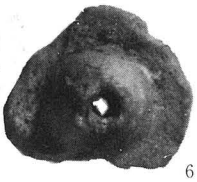
5 a



5 b

4

6 a



6 b

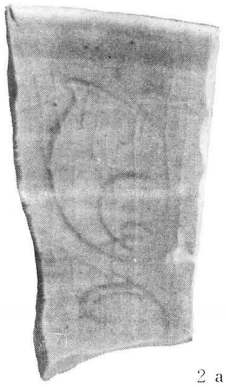
7

8

1 a　C－132　土師器甕　SX－1
1 b　　〃　　底部モミ痕
2 a　C－145　土師器甕　SK－7　土壙
2 b　　〃　　底部モミ痕
3．　C－5　土師器甕　SD－21　溝跡　　SD－21　溝跡
4．　C－7　土師器甕　SD－21　溝跡
5 a　C－45　土師器　表土
5 b　　〃
6 a　P－4　土製品　表土，6 b　P－6　土製品　表土
7．　C－146　土師器　表土
8．　A－1　縄文土器　表土

図版41　出土遺物　土師器・土製品・縄文土器

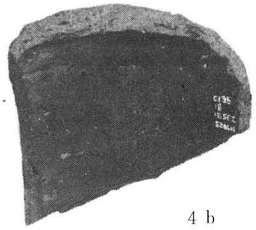
1



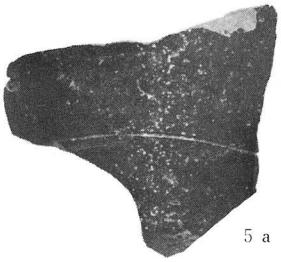
2 a

2 b

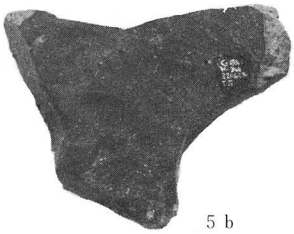
4 a



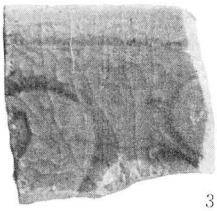
4 b



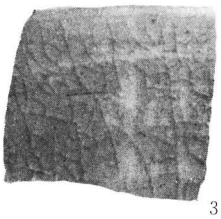
5 a



5 b



3 a



3 b

6 a

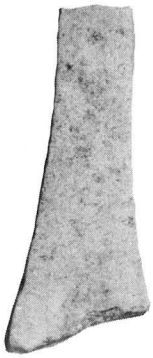
6 b

1．　J－2　中世陶器大甕　SE－4　井戸跡
2a　J－10　青白磁　表土
2b　〃　〃　〃
3a　J－8　青磁　遺検面
3b　〃　〃　〃
4a　J－1　中世陶器三筋壺　SE－2　井戸跡
4b　〃　〃　〃　〃
5a　J－20　中世陶器三筋壺　表土
5b　〃　〃　〃
6a　J－9　中世陶器　SD－19　溝跡
6b　〃　〃　〃　〃

図版42　出土遺物　中世陶器・青磁

1 a

1 b

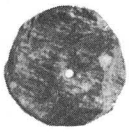

3 a

3 b

4 a

4 b

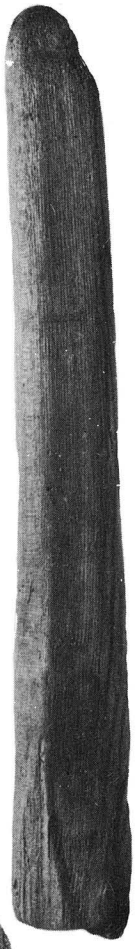
2 a


2 b

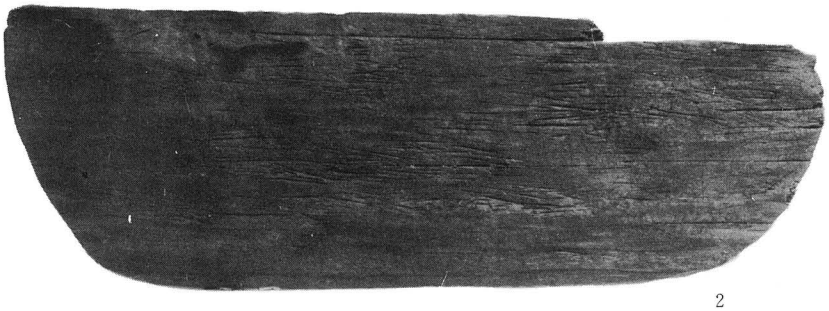
5

1a　K－2　石製品　耕作土
1b　〃　〃　〃
2a　K－4　石製模造品　有孔円盤　遺構検出面
2b　K－5　石製模造品　有孔円盤　SD－11　溝跡
3a　K－1　石製品　砥石　SE－2　井戸跡
3b　K－3　石製品　遺検面
4a　K－6　石製模造品　SK－6　土壙
4b　〃　〃　〃
5．　N－5　鉄製品　刀子　SK－6　土壙

図版43　出土遺物　石製品・鉄製品



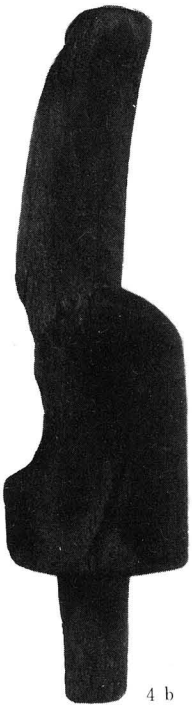
1



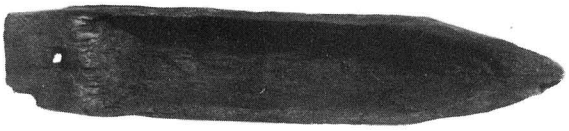
2

3

4 a

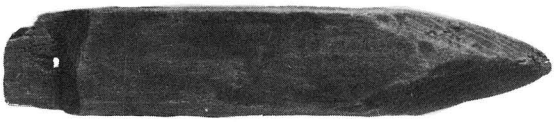


4 b



5 a

5 b



5 c

1．　L－7　木製品　SE－9　井戸跡
2．　L－4①木製品　桶の蓋　SE－6　井戸跡
3．　L－4②　〃　〃　〃　〃
4a　L－5　木製品　SE－6　井戸跡
4b　〃　〃　〃　〃

5a　L－6　木製品　舟形　SE－9　井戸跡
5b　〃　〃　〃　〃　〃
5c　〃　〃　〃　〃　〃

図版44　出土遺物　木製品

職　員　録

社会教育課

課　長　永野昌一
主　幹　早坂春一

文化財管理係

係　長　大沢隆夫
主　事　山口　宏
〃　　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　諭　佐藤　隆
〃　　渡辺忠彦
〃　　佐藤　裕
〃　　加藤正範
主　事　田中則和
〃　　結城慎一
〃　　成瀬　茂
教　諭　青沼一民
主　事　柳沢みどり
〃　　木村浩二
〃　　篠原信彦
〃　　佐藤　洋
〃　　金森安孝
〃　　佐藤甲二
〃　　吉岡恭平
〃　　工藤哲司
〃　　渡部弘美
〃　　主浜光朗
〃　　斎野裕彦
〃　　長島栄一
〃　　荒井　格
派遣職員　高橋勝也
嘱　託　鈴木　実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―(昭和53年３月)
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告１（昭和55年３月）
第22集　経ケ峯（昭和55年３月）
第23集　年報１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）
第28集　年報２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年３月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第１次調査報告（昭和57年３月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年３月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第41集　年報３（昭和57年３月）
第42集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年３月）
第43集　栗遺跡（昭和57年８月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）

仙台市文化財調査報告書第44集
昭 和 57 年 度

鴻 ノ 巣 遺 跡

昭 和 57 年 12 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市国分町 3 － 7 － 1
仙台市教育委員会社会教育課
印刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト
仙台市立町24－24 TEL 63－1166